
ヘビー・レイン&ダーク・レッド

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘビー・レイン&ダーク・レッド

【Nコード】

N7708N

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

狂気と残酷と愛がテーマのファンタジー小説。

雨の小部屋（1）

彼女のことについて考えることは、フェルマーの最終定理について頭を悩ますことに似ている。勿論、私は知っている。フェルマーが戯れに残した他愛の無い落書きが何世紀にも渡って数学者たちを苦しめ、そして一人の偉大な男性によって、ようやく長い長い苦しみから幾多の数学者が解放されたことを。証明された定理に数億円の価値は確かに存在するが、魅力はない。数学者たちは常に新しい定理を求めている。世界の誰も発見したことのない、完璧で無欠な証明を探し続けている。彼女のことについて考えるということとは、つまりそういうことだ。彼女のことを全て知ってしまったら、もう、私は彼女に一切の魅力を感じることはないだろう。女性はミステリアスな方が良い、なんて陳腐な言葉を吐くつもりはない。私は彼女についてこれ以上ないほど知りたいと思っている。それこそまさに、失明してまでフェルマーに挑戦し続けたオイラーのように。解き明かされれば、圧倒的な輝きを失ってしまうと知りながら、私は彼女について考えねばならない。

いかなる存在なのか。彼女はこういった女性なのか。はっきり言う、もう答えは出ているのだ。無論、これが最終的な答えでないことはよく理解している。ともあれ、膨大な解の内の一つであることは確かだ。彼女はこの世界を創った一人である。勿論、こんな巨大な“星”を一人で創れる訳がない。夏休みの工作ならば小学生一人でも、八月三十一日の夕方からでもなんとかだろう。しかし、これほどの質量と体積と面積を持った惑星を創造することは、並大抵のことではない。彼女一人で出来るとは思えない。当然、時間をかければ可能だろう。無限のような時間である。宇宙が出来てから、もう一つの宇宙がその内側に完成するまでの時間を費やせば、彼女一人で星一つを創り上げることも不可能ではない。しかし私は知っている。この星はたった九日間で完成した。どう考えたって、彼女

一人では無理である。

私を知っているのはいくつかの事実だ。彼女は、創造主の一人だ。そして、今、私の隣にいる。三人掛けのソファを贅沢に、私と彼女で占領している。彼女は寝ていた。安らかに。私の肩にもたれかかりながら。彼女の寝息がさやさやと私の内耳を揺らす。それはあまりにくすぐったい快樂だった。私は彼女を抱き締め、その身体を蹂躪する欲求を必死に抑えていた。出来ない。してはいけない。彼女を欲望に貶めることは、決してしてはいけない。道德？ そんな大層なものじゃない。国家も法律も存在しないこの星で何を我慢する必要があるのだろうか？ 動物としての本能に忠実に、彼女の亜麻布のチュニツクを引き裂いて、その奥にある白い柔肌を気が済むまで舐め尽せばいい。そうするだけの腕力が私にはある。それを拒否するだけの腕力が彼女にはない。やればいい。なのに、できなかった。

彼女はあまりにも高潔だった。天使？ 女神？ そういった存在に限りなく近い。真っ白な紙に黒いインクをぶちまけるような背徳的な快感を、私は味わいたいと強く望んでいる。同時に、まっさらな紙をそのまま保存しておきたいという甘っちょろい優しさも持っている。私は、何を隠そう、臆病なのだ。私に全幅の信頼を寄せている彼女を、汚したくはない。私の穢れた欲求の矛先を向けたくない。できるのならば、父親が娘を抱くような、慈愛に満ちた抱擁を彼女に与えたい。私は弱かった。弱い人間だった。考えてみれば当たり前なのかもしれない。この星は彼女が創った。その星に生きる私も、彼女に創られた。創造主にどうやって被創造者が太刀打ちできよう？ 牙を向けてもその牙を抜かれるだけだ。掴みかかろうとした指を残らず切り落とされて、ついでに四肢も切り落として、達磨のように床に転がるだけだ。

窓の外を見る。雨が降っていた。重い雨だ。手の平で受け止めれば、手の平を貫通してしまいそう。まるで天空から重油が降り注

いでいるようである。窓ガラスを濡らし、大地を湿らせ、そして雨はいつまでも降り続いている。私がこの小さな部屋の中で生まれたときから、ずっと。私はその間、ずっとソファ―に座って彼女の体重を受け止めていた。軽い、羽毛のような体重である。その心地よい重さは、私の心を少しずつ世界へと溶かしていった。私はまだ創造されてから間もない。どれくらい経っただろうか？ 私は何歳になっただろうか？ 壁に掛かっている時計は動いていない。二時二十九分を差したまま止まっている。私は眠くならなかった。腹も空かなかった。私はずっと窓の外を見ていた。太陽が一億回以上は巡ったと思う。空が灰色の雲で覆われているのでよく分からないが、ともかく暗い時と明るい時がそれくらい繰り返した。

雨の小部屋（2）

私には何故か、知識がある。誰の？ どの？ 分からない。分からないけれど、私は色々なことを知っているらしい。私の頭はくるくるといろんな情報を回転させている。時々、私はその情報の奔流に気が狂いそうになる。例えば、生まれた瞬間に大人と同等の知識を植えつけられた赤ん坊は、果たしてまともな産声を上げることが出来るだろうか？ 私が想像するに、赤ん坊は産声の代わりに奇声を上げ、発狂し、そのまま感情と情報に破裂して死んでしまうと思う。しかし私はそうはならなかった。彼女は、今私の隣で眠っている彼女は、私に知識と同時に“絶望”を与えたいらしい。それが精神安定剤となって、私は発狂せずに済んだ。まったく、幸運である。彼女の優しさに感謝しなければならない。この世の残酷さについていくには、この世に絶望するしかない。よく分かっている。彼女は創造主として優秀なのだろう。彼女以外の創造主がいかなる者なのかは私に分かるはずもないが、私は彼女に創られたことに無上の感謝を抱いている。

雨は降り続けている。止む気配は一向に無い。いつまでも、いつまでも、永遠に降るような雨だった。私はここで一つの可能性に行き着く。もしかしたら、まだ星は完成していないのではないだろうか。まだ創造の途中なのではないだろうか。私の知識が語る。生命の揺り籠である“海”を創るためには膨大な水が必要だと。すなわち、創造主たちは海を創るために雨を降らし続けているのではないだろうか。そう考えると合点がいく。ならば私は待てばいい。海が完成するまで、この部屋の中で。

おや？

少し考えることが増えた。彼女について考えることもそうだが、

私はこの部屋についても考えねばならないようだ。この部屋とは？
私が生まれたこの部屋だ。大きさは？ 小さい。私が両手を広げれば両側の壁に手が付いてしまいそうな、本当に小さな部屋だ。床は木造。壁も木造。天井も。木目模様と、板の境目が六方を覆っている。正確な立方体だった。木製のサイコロの中にいるようだった。さしずめ、窓が“目”だろうか。しかしそんなサイコロは欠陥品だ。一の目が三つもある。他の面には目がない。私が座っているソファ―は壁際にあり、その背後の壁には窓はない。私から見て左右と正面の壁に、窓がある。嵌め殺しで四角形のこれまた小さな正方形だ。立方体やら四角形やら、どうもこの部屋は幾何学的で直線的である。目の休まるような優しい曲線はないのかといくつか探してみたが、一つしかなかった。正面の壁の窓の横にある、時計。二時二十九分で止まっているアナログ時計である。文字盤の円形のみが、この部屋にある曲線だった。他は一切合財が直線だった。私から見て左隅には一人掛けの机がある。木製である。椅子もある。言うまでも無く木製である。机の上には何もなかった。机に座って何かの作業をしようにも、道具が何もなかった。何か素晴らしい物語を紡ぎだそうにも、紙もペンも、何もなかった。密室である。私は閉じ込められている。でも恐怖はなかった。あるはずもない。なにせ、創造主である彼女がすぐそばにいるのだ。何を怯えることがある？ 閉鎖空間なのだろうか、ここは？ 違う。基準である彼女がここにいる限り、ここが基準であり、むしろ外の世界が“閉鎖”しているのだ。私はこの小さな部屋で世界を閉じ込めたのだ。

我ながら詭弁である。馬鹿らしい。どんな言い訳をしようとも、私が彼女と共にこの小さな部屋に押し込められて、外に出る事ができないことには変わらない。いつになったら出られるのだろうか？ 脱出できるのだろうか？ 分からない。彼女に聞いてみなければ。しかし彼女は寝ている。起こそうか？ 何と、愚かな考え！ 何と、傲慢！ 彼女の眠りを妨げることなどできるはずがない、私に！ 私は待つしかない。太陽が何度、地平線から地平線へと旅をしよう

とも、何億年経とうとも、私は彼女が自然に目を覚ますのを待つしかないのだ。

雨の小部屋（3）

彼女について考え、部屋について考えた。考察はまだまだ足りないが、今のところはこの辺で妥協しておく。あまり深く考えても脳が壊れるだけだ。そもそも深く追求しようにも、考察材料があまりにも少ない。部屋は沈黙し、彼女は寝ている。私が何か素敵なアイディアを口にしようとも、誰もそれに反対も賛成もしてくれない。議論は成り立たない。一人で考えることには限界がある。よって、私は二つの命題からはひとまず目を逸らし、次の事象へと移るべきであると考え。独善的であると自覚している。本来ならば、もっと限界まで彼女について思索を繰り返すべきである。私は、何度でも繰り返すが、臆病だった。これ以上彼女について思量することは恐怖だった。もしかしたら、この世界の秘匿に触れてしまいそうで――思わず身体が震えた。

さて、次の命題とは何か？ 外、である。窓の外の世界である。雨が降っている。延々と窓を濡らす淫雨に嫌気は差さない。生まれたときから続いている天候に何かしらの反抗心を持つわけもない。雨を嫌うのは快晴を知る者だけだ。私は知識としての“晴れ”を知っている。まだ現実での現象としての“晴れ”を経験していない。太陽を渴望しているわけではない。重苦しいグレーシャドウの雲はもはや私の乳母に近い。生まれたときからずっと、窓の外から私を見下ろしている、肉親にも近い存在だ。いつまでも変わりなくそこにある曇り空は、私をどう思っているのか、それは分からない。少なくとも、私は曇り空を好いている。それだけははっきりしておきたい。

一つ、気付いたことがある。先ほどから私は窓から空を見ていると言っていたが――よくよく考えてみれば「空しか見えない」というのは変ではないだろうか？ 私は座っている。ソファに座っている。立っているときよりは視線は低い。しかし私はそれなりの身

長があるようで、座高も相応だった。窓の高さと目線はほぼ同じだった。なのに、窓からは空しか見えないのだ。地面が見えない。地平線も見えない。おかしくはないか？　もしも、この小部屋が地上にあるとしたら、窓からの景色は空と大地の二分割になるはずだ。雨に打たれ続ける大地と、雨を降らし続ける空の対比を眺めることができるはずなのだ。なのに、私の目には曇り空しか見えない。どういったことなのか、これは。

仮定の時点から間違っているのかもしれない。この部屋が「地上にある」という仮定が、そもそも違うのではないだろうか。では、正しくはどうなのか。考えてみよう。私の知識を掘り出してみよう。――うん。一つの解が導き出された。もしかしたら、この部屋は「高い場所にある」のかもしれない。塔の上や山の上に建設されたか、もしくは宙に浮いているとか、ともあれこの部屋は地上から離れるか高みに存在するものとして考えた方がいい。そうすれば窓から空しか見えないという事実と合致する。高所にあれば地上が見えず、空ばかりが窓に映るのも当然である。解を確かめるためにはこの部屋から出なければならぬ。しかし私はまだこの部屋から出ることを許されていない。彼女に。つまり私は自分の出した解の答え合わせをすることができない。でも私は自分自身の中ではこの解は間違いないように思う。なので、とりあえずはこの部屋が地上よりは空に近い場所にあるのだと思うことにする。

素敵だ。空に近い部屋。雨が降る世界。静かな室内。肩によりかかる彼女。かすかな寝息。何もかもが私にとって幸福感を与える要素になっていた。一切の雑念も懸念もこの空間には存在しない。時間さえどこかに取り払われたような、密閉された完全なる幸せの小部屋。私は少し申し訳なくなった。この場所とこの部屋は、彼女が創造した。いかなる理由のもとにこの空間と私を創り出したのかなど私に推知できるはずもないが、どんな理由であっても、私は彼女に感謝しなくてはならない。確かな幸福感を与えてくれた彼女に精

一杯の恩返しをしなくてはならない。起き抜けの彼女への第一声は決まった。「ありがとう」だ。まずは彼女に頭を下げよう。持ちうる限りの謝儀を伝えよう。

雨の小部屋（4）

雨は強くなるわけでもなく、弱くなるわけでもなく、一定の量で大地に降り注いでいた。いつまでも、いつまでも、変わることはない雨音。パチパチと窓ガラスを叩く。屋根を叩く。しかし私と彼女は濡れない。こんなにも雨が降っているのに、一切濡れることはない。服が身体に張り付いて気持ち悪くなることや、鼻筋まで落ちてきた前髪が視界を遮ることもない。私たちは守られていた。この小部屋に守られていた。まるで母親の胎内で羊水に包まれた胎児のよう。私たちは絶対安全の空間にいた。何ともいえない至福と優越感。――待て。誰に？ 誰に対しての優越感？ それは勿論、外にいる人間に対してだ。ん？ 待てよ。そもそも外の世界に私と彼女以外の人間が果たしているのだろうか？ いや、人間というよりも動物はいるのだろうか。もし、いないとしたら？ この世界にいるのが私と彼女だけとしたら？ この世界に存在する動く物体が私と彼女の二人だけとしたら？ ――とても素敵だ。それは非常にフレキシブルで都合の良い、あまりにも素晴らしい発想だ。この世界に、私と、彼女だけ！ ああ、だとしたら、だとしたら！ 私はきっとどうにかかってしまう！ 身体の奥底から湧き上がり、皮膚を突き破って天空まで飛翔しそうなほどの感動に、私は気が狂ってしまう！ 私と彼女だけの世界。これ以上ないほど単純で、私にとつての理想の世界。ああ、そうなのかもしれない。私は望んでいる。私は彼女と何かしらの形で結ばれることを望んでいる。強く、とても強く。暴力的な肉欲であれ、哲学的な友情であれ、とにかく常に一緒にいたいと願っている。一方通行で自分勝手な想いだ。でも真剣だ。私は、今、私の肩に頭を載せて健やかに眠る彼女の寝顔の全てを、自分一人で独占したいと思っている。申し訳ない。迷惑かもしれない。それでも、私は一人の人間として彼女のことを本気で愛そうと思っている。

「んっ」

声が聞こえた。どこから？ 私は愚かにもキョロキョロと部屋の中を見回してしまった。我ながら間抜けである。自分以外で声を発するものなんて決まっている。彼女だ。私は彼女の顔を見た。目は瞑っている。まだ眠っている。寝言のようだ。呻き声とも喘ぎ声ともとれない、小さな細かい寝言だ。彼女は同時にわずかに身をよじらせた。私は身体を緊張させる。登下校中に初めて異性と手を繋いだ思春期の青少年のような、初々しくも微笑ましい、青臭いほどの緊張が私の背筋を通り抜けた。身体の傾きを少し変え、そしてまた彼女は動かなくなる。規則的な寝息が鼻と口から聞こえる。私にかかる体重の割合が少し変化しただけで、先ほどとは何も変わらない。彼女が声を漏らし、体勢を変えただけ。今、起きたことを総括するならば、そうなる。何千年も待った割には、ひどい虚脱感を覚えるような乏しい変化。しかし、確かな変化。微量であれ、彼女に何かの変化が与えられたことは、私にとっては喜ばしいことである。

こうして、何千年に一回の変化を待ち続けるのもまた、良いものかもしれないと、私は思う。彼女が起きることが私にとって最も嬉しいことであることは、わざわざ言及するまでもないことだが、彼女の身に何かの小さな、ほんの小さな変化でも起こることも、やはり私にとっては無上の喜悦なのだ。今この場所にいる私にとっては彼女が全てであり、私の命と身体は彼女のためにあると言ってもよい。全てを捧げる覚悟はある。彼女のために全てを投げ捨てる決意もある。準備は万端だ。いつ、彼女が起きても、私は大丈夫。大丈夫なはずだ。

雨の小部屋（5）

数万年か、もしくは数億年が過ぎた。

時間が分らないので正確には判断できない。太陽の巡りを数えるという方法もあるが、流石に数万数億の数を頭の中だけで加算していくというのは無理がある。途中で間違えてしまうかもしれない。まあ、十や二十間違ったところで何かしらの支障がでるようなものでもないが。または無人島の漂流者のように、身近なものに日数を刻んでいくという手段もあっただろう。しかし私は彼女の体重を支え、ソファーから身動きがとれない状態なので、木造の壁や床に傷を刻もうにも手が届かなかった。手が届かないならば足で？ そんな猿みたいな器用な真似はできない。そこまでして、やるほどの行為でもない。

部屋の中に変化はなかった。彼女は眠り、私は座り、窓の外には雨が降っている。変化のない毎日。たがしかし、確かな予感のある日々。私は知っている。彼女がいずれ起きるということを。それが百億年後だろうと一秒後だろうと、とにかく彼女は起きる運命にある。そうしなければ、私がこの場所にいる説明がつかない。私はこの数万か数億年の間、何もせずに過ごしていたわけではない。考えていた。私がこの世に生まれた理由だ。

彼女と共にあれ。

おそらく、私が生み出された理由とは、そういった事なのだろう。私は生まれながらにして、彼女の眠りを支える物言わぬ背もたれとして、この場所にいる。この世に生まれた理由などと、齒が浮くような感傷的感情を抱くのはちょっと恥ずかしいものがあるが、そういったことをじつくりと考えるだけの時間と動機が私にはあった。

動機とはすなわち、彼女のことを愛し、心の底から仕えたいと思う奉仕の心である。私は彼女の下僕になら喜んでなろう。彼女の従順な召使に、真っ先に志願しよう。私は生きている。この狭い部屋の中で。彼女と共に。彼女だけと共に。だから、私は彼女の側において、彼女の望む事を何でもやらなければならない。それが彼女の望むことであり、私の望むことであると信じている。

変化が、起きた。

彼女にではない。世界にである。あまりに緩やか変化だったので、私は数年ほど、その変化に気付かなかった。太陽の光が、差している。雲間から、剣のような鋭い光が、大地へと突き刺さっている。

「これは……」

私は思わず声を漏らした。声を発するのも何億年ぶりだろうか。私は窓の外をしっかりと見る。雨は降っている。雨脚はまだ弱まらない。しかし、確かに、窓から見える景色の遠く――遥か遠くに、光の筋が見える。薄明光線が確かに見える。

「雨が、止む」

まだその時ではない。しかし、これは予兆だ。雲が途切れつつある。雨を降らす根源が太陽に切り裂かれつつある。変化だ。今までの数十億年の中で、最も大きな変化だ。

「彼女が、起きる」

私は気付けばそう呟いていた。雨が止むと同時に彼女は起きる。何の根拠もないが、それは真実だと確信していた。太陽が差し込むのと同じくして、彼女の瞼が開き、私に何かしらの言葉をかけてくれる。期待が、私の身体を貫いた。

雨の小部屋（6）

一年毎に一粒ずつ、雨は止んでいくように思えた。少しずつ、少しずつ、赤ん坊が母親へと這い寄る速度で、雨は次第に弱まっていた。雲間に光が差してから一万年ほど経って、重い雨はようやく通常の重さの雨に変わった。それからまた十万年ほど経って、小雨になった。百万年で、雨とも霧ともつかいないような、細かく小さな粒になった。あと少しだ。あともう少しで雨は止む。彼女が起きる。

私は怯えているのかもしれない。変化に。この世界と彼女の変化に。私は気の遠くなるような時間を、停滞の中で過ごしてきた。無変化の毎日に慣れてしまっていた。何も起こらず、緊張もせず、心が緩んでばかりの日々。そんな幾多の年月を過ごすうちに、私の心はすっかり弱ってしまっていた。腹は減らない。髪も伸びないし、髭も伸びない。生理現象も起こらない。完璧に閉鎖された安全な場所で、私は怠惰を貪っていたのかもしれない。だから、彼女が起きて、何かしらの圧力が私の心に押し掛かったとき、果たして私は耐えられるだろうか。数十億年ぶりの緊張に、私の心は張り切れてしまうのではないだろうか。そんな不安がある。

だからと言って、彼女の目覚めを望まない訳ではない。恐怖心と同じだけの期待感もある。両者は相反しながらも、仲良く喧嘩していた。相殺することなく、プラスとマイナスが同じ座標に確かに存在していた。数学的にも物理的にもあり得ない現象だが、私にとっては至極当然だった。私はいつだって矛盾を抱えている。彼女を守りたいと願いながら、陵辱したいとも思っている。愛したいと思いが、ひと思いに殺したいとも思っている。私だけではなからう。おそらく、この部屋の外にいるほとんどの人間たちは自己矛盾を胸の中に飼っている。私がもしこの部屋から出る事ができて、外の世界の人間たちと話す機会が与えられたのなら、そういったこ

とを質問してみるのもいいかもしれない。きつと意気投合できるだろう。外の世界に人間がいるとして、だが。

さて、それから起きた出来事について話そう。

まず、雨が完全に止んだ。太陽こそ顔を出していないが、雨音は完全に途絶えていた。世界は静寂で、この部屋には彼女の寝息が満ちる。彼女が、息を吸った。ゆっくりと、世界三大珍味を初めて味わうときのように、横隔膜を動かして、空気を肺に入れた。吸入された酸素が酸化する前に、私はそのことに気付いた。小屋の隅が光った。立方体の六隅が均等に、光を発していた。いや、発しているのではない。差し込んでいるのだ。雲間から光が差すように、雨上がりの弱々しい貧弱な光が、立方体の六隅に開いた小さな「隙間」から部屋の中に入ってきていた。部屋が、崩壊しようとしている。

雨の小部屋（7）

部屋が開く。

正確な立方体の小部屋は各辺が引き剥がされ、正方形の六枚の板に分かれる。かつて床だったもの——私と彼女が座るソファ——を載せた板は、その場に固定されたままで、他の五枚の板が弾けるように分離した。たいした音も立てずに板たちは飛び散り、すぐに重力に引かれて下へと落ちていった。そう、私と彼女を載せた板は空中に浮いていた。塔の上でも山の上でもなかった。単純に、私たちは高所に浮いていた。私たちは何十億年もの間、空に固定された小部屋の中にいた。

「んっ……んんっ」

彼女がもそもそと動いた。肩にかかる体重が軽くなる。彼女が一人で自分の体重を支えようとしていた。身体の傾きが七十度から垂直へと戻っていく。完全に私の肩から重みが消えた。私がこの世界に生まれてから初めてのことだった。私は今、生まれて初めて何の圧力もかかっていない状態にある。彼女の体重はもう、私の肩を押さない。あの柔らかい肌は私に触れない。彼女の目が開いた。焦点を合わすように何度か瞬きして、半開きの状態で止まった。身体も脳も、まだはつきりとは起きていないらしい。ぼうっと前を見たままで固まっている。私は何も言わずその横顔を眺めた。何も、言えなかった。見とれていた。

彼女の瞳は、エメラルドを名匠の手で三十回磨き上げた後、世界中に芽生えた新緑の精気を全て注ぎ込んだかのような、この世のものとは思えない色の輝きを放っていた。睫はほどよい長さで、綺麗に揃ってくるつと上に丸まっている。鼻は少し低いが、そこにはまだ大人になりきれない幼児性を感じられた。外見的には私とそう変わりないが、どこことなく彼女は子供のような雰囲気を感じている。だがしかし、透き通るような肌や、薄く健康的な桜色をした唇を見

ると、やはり女性の色気も相当に持ち合わせていた。髪の毛は長く、一見黒髪のように見えるが、太陽の光に透かしてみると、金茶色にきらめいた。至極上等な鹿毛馬のたてがみのように、空気の揺れに合わせてキラキラと眩いばかりに艶めく。わずかに髪のかかった耳から視線を落とすと、片手で掴めそうな細い首があり、はつきりとした筋肉の筋が見て取れる。決して筋肉質ではなく、痩せぎすでもなく、適度な脂肪が身体全体を覆っている。服装は至って簡素で、亜麻布のチュニツクに、羊毛のスカートを履いていた。まるで中世の一般市民のような格好だった。上着であるチュニツクはかなり薄手で、しかも身体にぴったり合う様に作られているので、彼女の上半身のラインが私からも明瞭に確認できる。胸は――正直に言ってしまうと――あまり大きいとは言えなかった。しかし、美術館に世界遺産として飾られる女神像のように、有無を言わず神の存在を感じさせるような、神秘的なまでの形の良さを誇っていた。抱きかかえるには丁度よさそうな胴回りで、尻は安産型だった。

私がじっと彼女を観察していると、不意に彼女はこちらを向いた。萌芽したばかりの新芽の鮮やかさを湛えた瞳が、私の顔を覗く。緊張が視覚神経から全身を通して、私の身体を貫いた。どうすればいいのだろう。ぼんやりとした顔で私の顔を見つめる彼女に、私はいったいどういった反応を示せばいいのだろう。迷った。困った。どうしようもなく空転する思考に心臓が巻き込まれて暴れて血液が血管の弁を決壊しながら逆流して静脈と動脈の区別がつかなくなつてチアノーゼを一瞬だけ経験して軽く死になつた私に、

「おはよう」と、彼女は言った。

笑っていた。

なんだかもう――なにもかすが、どうでもいいと思えた。

「おはよう」と、私も返した。

数十億年待ち続けた、始まりの鐘の音が、世界に鳴り響いた。

雨の小部屋（8）

「多分、あなたは色々なことを勘違いしている」

彼女は唐突にそう切り出した。適度な湿り気を帯びた唇が、彼女の声に合わせて小気味良く動く。滑らかな一枚肌の奥にある頬の筋肉がそれに合わせて脈動するのを、私は何かにとりつかれたかのように見ていた。絶滅危惧種を期待と哀れみの瞳で観察する動物学者のごとく、私の目は彼女に釘付けだった。

「勘違い、とは？」

私は答える。その一言を発しただけで、脊髄に稲光が落ちた。彼女と、会話している。こんなにも美しい彼女と、私は言葉を交わしている！ その事実が私の精神と肉体を歓喜に打ち奮わせた。指先の半分死滅した細胞が活性化し、髪の毛は根元から毛先までピンと張りつめ、全身の末端神経が快楽的な痛覚を感知して一斉に弾けた。「まず、ここは空の上じゃない」

小部屋が開いたこと。彼女が起きたこと。それらのことで頭が占領されていたので、周りの景色を見ることを忘れていた。私は今まで小さな窓からしか望むことのできなかった世界の光景を見渡した。何も、ない。白っぽい靄が一面に広がっている。雲は、ある。あの重い重い雨を降らせていた雲は、確かに頭の上にある。それ以外は、乳白色の何かに覆われている。下を見ても、地面なんて見えない。そういえばあの分離した元壁の板はどこにいったのだろう。探しても、どこにも見当たらなかった。消えてしまっていた。

「空に浮いているというのは正しいけれど、おそらくあなたが想像しているようなものではない。浮いている、というよりも、閉じ込められている、と表現したほうが正しい」

「閉じ込められている？」

「ここは、雲のドーム。世界の空に点在する、“密閉された空”」
彼女が説明することによると、空にはいくつかの領域があるらし

い。領域は“雲の壁”と呼ばれる境界線で分けられていて——本当は壁の成分は雲とは違うものらしいが、見た目が似ているのでそう呼んでいるらしい——この“雲のドーム”と呼ばれる場所は、雲の壁に包まれた空間を指すようだ。雲の壁は無秩序に空に存在しているので、たまにこのような密閉された空間ができるのだと言う。また、本物の雲は雲の壁をすり抜けることができるらしく、頭の上に見えている雲は、このドームの外からやってきた本物の雨雲らしい。「雲の壁は雲そっくりよ。見た目も、中身も。でもね、やっぱり両者は決定的に違うの。雲の壁は絶対に消えたりしない。風で霧散したりしない。いつまでも永遠に空に浮かんでいて、かつては一つだった空を無数の領域に分断したの」

分割された空は長い年月を経ることで、それぞれ独特の特徴を持つようになったと言う。夕日の赤さに染められて青色に戻れなくなった空。台風と竜巻がミックスされて累乗されたような凄まじい風が吹き荒れ、近付けば一瞬でサイコロステーキのように細切れにされる空。和やかな太陽の光に包まれ一見とても優しそうに見えるが、実際には超濃度の瘴気が満ちていて、そこの空気を吸えば一分も経たずに内臓を腐らせて死んでしまう空。

「このドームは比較的、元の空に近いよね。降る雨が人の頭蓋骨を貫通するくらいの運動量を持っている、ということを除けば」

「えーと、つまり君の話をまとめると、こうだね？　空は雲の壁と呼ばれるもので分割されている。それらは各々個性的な性質を持つ。雲の壁に包まれた空間のことを雲のドームと呼ぶ」

「その通り」

「何だか、想像できないというか、イメージしづらいな。雲のドームについては何となく理解できるけど、壁によって分割されているというのが分かり難い。垣根くらいでは空を分かťことなんて不可能なんじゃないかな？」

「それはあなたの世界——いえ、あなたの“頭の中にある世界”で話でしょう？」

「どういう意味だい？」

私が語尾を上げて疑問の意を表すと、彼女は穢れを知らぬ少女のような極めて清純な笑みを口元に浮かべた。

「ごめんなさいね。あなたの“知識”はこの世界では何の役にも立たない。そんな知識を与えたことは謝るわ。多分、あなたはこれから沢山の勘違いをする。この世界を見て、沢山驚いて、沢山怖がって、沢山絶望する。でもそれは、あなたにとって悪いことじゃない。そうでしょう？」

彼女が何を言いたいのか、彼女が私のことをどう見ているのか、彼女にとって私とはどういった存在なのか、少しだけ分かったような気がする。私は色々なことを知っているようで、実際には何一つとして知らないのだ。この世界について、私は赤子ほどの知識もない。私の中にある常識はもはや紙くず以下の価値もない。全てを白紙に戻して、私は少しずつこの世界について見識を広めねばならないようだ。

雨の小部屋（9）

巨大な振動音が聞こえた。何かが動いている。私は周囲を見渡した。何も変わらないように見える。しかし音は確かに聞こえる。巨人の住む城が地滑りに乗って山肌を落ちて行くような、腹に響く重低音だ。

「ドームが移動しようとしてるわ。私たちが起きたから怯えてるのね」

「怯えてる？ 雲の壁が、かい？」

「そうよ。誰だって自分の身体の中で騒がれたら、落ち着かないでしょう？」

それはそうだが、今ひとつ腑に落ちなかった。雲と同じような物体が、人間の声を怖がるものなのだろうか。そもそも雲が怖がるのはどういった現象なのか。すぐにはピンとこなかった。だが、これがこの世界の常識なのだろう。感情を持つ者が人間だけとは限らない。無機質も有機物も平等に何かを感じ、何かを思う。そういうことなのだろう。一つ勉強になった。

「出ましょう。このままだと雲の壁に押し潰されちゃう」

「出るって……どうやって？」

まったく、自分は驚いたり質問したりしてばかりだ。我ながら少し呆れるが、それも仕方のないことだ。私は何も知らない。彼女は何でも知っている。教師と生徒の関係よりもさらに飛躍した、師弟以上の間柄にある。私は尋ね、彼女が答える。この一連の行動は、これからずっと続くのだろう。それが、何だか嬉しくもある。

彼女はソファアールから腰を挙げ、床板の端に立った。私も同じように立ち上がる。考えてみれば、私はこのとき初めて両の足で立ったことになる。こんな小さな面積の足裏で自分の体重全てを支えていることになる。感動的ではない。病気で足が動けなくなった子供が車椅子から立ち上がる瞬間は紛れもなく感涙のシーンだが、私はあ

らかじめ立てるといふ確信を持ってこの世界に誕生した。こうして初めて立ったからと言って、何かしらの感動が沸き起こるわけもない。画面の向こうの視聴者が目頭をティッシュで拭くこともない。

私たちは床の端に並んで立った。身長を比べてみると、私の方が頭一つ分だけ高いことが分かる。私が軽く腕を上げたときに、手の平がちやうど彼女の頭を触るような、そんな身長差だ。訳もなく私は彼女のつむじ付近を撫でてみたい衝動に駆られたが、相変わらず地鳴りのような音は続いていて、彼女の横顔もどことなく真剣だったので、自重した。

「降りるわよ」

「降りる？」

私はつま先のさらに先を見た。新生児の薄紅色の頬のような色をした靄が、はるか眼下に広がっている。あそこまでどれくらいの距離があるのかは分からない。仮に――あの靄がアスファルトの道路だとしたら、ここから飛び降りた私は間違いなく死ぬだろう。ぺちやっと、軽快な音を鳴らして、綺麗に死ぬだろう。

また、彼女は雲の壁は雲と同じような成分だと言っていた。つまり、私たちが今落ちたら、あの雲の壁を貫通してさらに下まで落ちて行くのではないだろうか。ここがどれくらいの高度なのかは、全方位を壁に覆われているので、まったく見当が付かない。しかし雲が発生しているからには、相当の高さなのだろう。落ちたら――わざわざ想像するまでもない。

「あなたの考えていることは分かる。ここから飛び降りて本当に大丈夫なのか、って疑っているのよね」

「ああ」

「答えは『大丈夫じゃない』よ。落ちたら死ぬ。この世界の人間もあなたの世界の人間と同じように、高いところから身投げしたら簡単に死ぬるわ。そうじゃないと、自殺の方法が一つ減っちゃうからね」

「でも君は今、降りると」

「そうね。私たちは今からその身投げをしようとしている。でも、大丈夫。私たちは死なない。決して。信じてくれる？」

私の方に振り向いた彼女の耳裏から、光の滴が髪の毛を伝って空気中に飛び散った。キラキラと刹那の煌きを残して滴は霧散し、私はそれを目で追い――そして、彼女のどこか不安げに歪んだ眉の形の愛おしさに、何も言えなくなった。

私は首を縦に振る。

「ありがとう」

微笑みは空気の揺らめきに蒸発してすぐに消えた。私たちは、現世で精一杯の愛を育んだ自殺志願者の恋人同士みたいに床板の端に並んで、一瞬の躊躇すらなく、同時に飛び降りた。

地下国のメリー・ゴー・ラウンド（1）

どれくらい落下し続けただろう。雲のドームを貫き、本物の雲と、雲の壁と呼ばれる偽者の雲を、いくつも通り抜け、私と彼女はいつまでも落ち続けた。感覚的には、もう一時間になるだろうか。私たちは、そんなに高い場所にいたのだろうか。いや、高いと言ったって、一時間も落下し続けるほど高い場所なんて存在するのだろうか。私の頭の中の常識では、それはもう空の上というよりも宇宙の領域に当たる。そして宇宙からは落下することはできず、結論として一時間も落ち続けることなんて不可能だと考える。周りの景色はいくまでも変わらず、空と雲。それだけが下から上へと視界を流れていく。いくら経っても変わらないので、少し飽きてきた。顔を叩き、服を皮膚に貼り付ける空気の抵抗にも、ちよつと嫌になってきた。地上にはいつ到達するのだろうか。そして、そのとき私は果たして原型を保っていられるのだろうか。疑っているわけではない。彼女の言葉を疑うはずもない。ただ、どうやって着地するのか、興味があつた。

それから更に二時間が経った。太陽が西に傾き始め――この世界でも太陽は東から西へと動くらしい――空が赤色に汚染され始めてきた。まだ地上に着かない。下を見ても、雲や雲の壁が邪魔して地上が見えない。本当に私たちは落ちているのだろうか、とうとうそんな疑問まで持ち始めた。目に映る景色は確かに下から上へと昇っているが、これが何かしらの幻覚で、私たちはずっと同じ場所に固定されているのではないかと、とりとめのない不安に駆られた。私は子供が母親に何かしらの救いを求めるときのような顔をしていると自覚しつつ、彼女の方を見た。彼女は目を瞑って、自然体のまま落下していた。下から押し付けてくる空気に抱かれるように、全身の力を抜いていた。無論、その顔に不安の色など欠片もない。髪

の毛がバサバサに乱れても、気にする風もない。強い人だ、と改めて思った。

ようやく地上が見えたのは、さらに五時間ほど経ってからだった。日も暮れ、頭の上の空はすっかり星模様だった。空に抱かれながら天体観測もいいものだ、などと、私自身もこの状況に慣れてきた時分に、不意に彼女が目を開いた。私の方を向いて、ついついと指で下を指す。私は名残惜しく思いながらも下を見た。地面だった。白い、真っ白な地面。最初は雲の壁かと思ったが、違う。どう違うかと言われると説明に困るが、白さの性質が違った。雲の壁は壁と言っても柔らかい綿菓子のような白さである。今、急速に迫っている白は、固い氷のような白さだった。

もし、本当にあれが氷のような固さだったら、間違いなく私たちは死ぬ。カキ氷にかけられたイチゴシロップみたいになって死ぬ。怖い、という感覚はなかった。彼女を信じていたといえればそれまでだが、もし死ぬようなことになって、彼女と一緒に後悔はないと思えた。潰れて肉塊になったとしても、そのとき彼女の血肉と私の血肉が少しでも混ざり合うのなら、それはそれで幸せなことだと思った。

地面が近付く。高速で。

目の前に、白。

ずばっ、と何かが破裂するような音がして、その瞬間鼓膜が破れたような感覚が襲ってきて、私の目の前は真っ暗になった。頭と肩に柔らかいものが次ぎから次へと押し付けられて、良く分からないままもみくちゃになった。意識はあるのか、死んでないのか、五体は満足なままなのか、と私はそればかり考えていて、そのうちプツンと糸が途切れるように私の意識は深い井戸の底へと沈んでいった。

地下国のメリー・ゴー・ラウンド(2)

シャチが泳いでいる。海の、とても綺麗な海の中を、そのヒレを翼のように広げて、自由きままに泳いでいる。珊瑚の森を眼下にしなから、イワシの群れを切り裂き、王者の風格を漂わせて、悠々と海中から見上げる太陽の煌きは、グロテスクな白さを持っている。ゆらゆらと揺れる光線は水底に落ちて、砂の中に隠れていたヒラメを照らした。ヒラメは不意に白日に照らされて、驚き慌てふためく。ヤドカリはそんなヒラメを見て小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。シャチはくるくると二、三度身体を捻り、海中に渦巻き状の潮流を形成したあと、息継ぎのためにぐいっと高度を上げた。キラキラと輝く水面。シャチは眩しそうに目を細める。空気はもう少し。シャチは全身で歓喜を表すように海面からその身を飛翔させ――

「何だ、生きてたのか」

目に映るのは暗い天井。背中がぐつぐつする。どうやら私は床に寝かされているらしい。転がされている、と言った方が正しいかもしれないが。全身がぐつしよりと濡れていた。寝汗ではない。腹の辺りを触ると、冷たいものが手に当たった。握ると、シャリ、と音を立てて手の中で解けた。これは、雪？

私は上半身を起こした。その途端、急激な寒気が全身を駆け抜けた。ぶるっと身体が振るえ、奥歯がカチカチと鳴った。

「まあ、こっちおいで」

先ほどから誰かの声が聞こえる。私は少しでも体温の流出を防ごうと、両腕で自分自身を抱きながら、声の主を探した。数メートルほど離れたところに、妙齡の女性がいた。簡易コンロの前に胡坐をかいて座り、煙草を吹かしている。簡易コンロの上には使い古された湯沸し用ポット。沸騰間近らしく、注ぎ口から白い湯気がぴゅうぴゅうと噴き出していた。

私は這いずるように女性の元へと近寄った。女性の横に座って、コンロの火にあたる。小さな火だ。下着まで完全に水分が浸透してしまっている私を温めるには、あまりにも脆弱な熱量だ。

「脱ぎな」

「え？」

私がきよとした顔を見ると、女性は煙草を咥えながら器用に舌打ちした。三十代半ばだろうか。栄養不足か手入れ不足なのか、原因は分からないが、肌はざらざらと荒れている。しかし、その瞳と口元には消え失せない活力が満ちていて、若い頃にはかなり活動的だったのではないかと思わせた。

「乾かすんだよ。そのまま凍えて死にたいのかい？ 珍しく人が善意を見せてやろうってんだ、大人しく従いな」

女性は燃えるように赤い髪を乱暴にかき上げた。その動作がどこか色っぽくて、私は少しどぎまぎしながら服を脱いだ。パンツ一丁になって、脱いだ服を女性に手渡す。女性は服を受け取ると、代わりに自分の着ていたコートを投げてよこした。女性はかなりの厚着をしていた。コートの下にはセーターも着込んでいた。そこで私はようやく気付く。ここは寒い。吐く息が白い。凍え死ぬというのも脅しではなさそうだ。

コートを身体に巻きつけて、コンロの前にうづくまる。女性はコンロの横にあった金属製のカップに、ポットのお湯を注いだ。それを私の前に差し出す。

「白湯だが、何も飲まないよりはマシだろうよ」

ぶっきらぼうにそう言って、女性は私の脱いだ服を一枚ずつ丁寧に広げ、床に並べ始めた。その手つきがやたら慣れていて、何だか私は母親が洗濯物をするのを眺めている子供のような気分になった。そんな経験などないのに。差し出されたカップは取っ手まで金属製で、凍えた手で持つと焼けるように熱かった。それを我慢して、お湯を口を含む。ただのお湯である。高級茶葉を使用したロイヤルティーでも、キリマンジャロ産の豆を丁寧に挽いた贅沢なコーヒーで

も、何でもない。ただのお湯である。それが、何で、こんなにも美味しいのか。食道を落ちて行く熱湯が、蕩けるような熱を私に供給してくれる。私はゆっくりと、慌てることなく、すぐに飲んでしまうのが勿体無いなくて、ちびちびと女性のくれたお湯を飲んだ。

地下国のメリー・ゴー・ラウンド(3)

それにしても私はどうなったのだろう。私の記憶は彼女と共に空から落ちて、何かに衝突したところまでしかない。その後どうなったのだろう。一つの事実として、私は生きている。彼女の言った通り、私は死ななかった。それだけが、心の救済として胸の中をふわりと満たした。彼女を、信じてよかった。

寒さもだいぶ緩和され、周りを見わたす余裕が出てきた。私は首を巡らせて自分のいる場所を観察した。首を動かすと立てたコートの襟が顎に刺さって少し痛い。

ここは、何だろう。私の知識では判断できない場所である。天井は高い。先ほどはただ薄暗いものとしか見えなかったが、よく見ると、金属とプラスチックの中間のような光沢をした梁が、複雑かつ規則的に張り巡らされている。私と女性のすぐ近くには、太い柱が立っていた。これも見たことのない材質のようである。柱は等間隔で一列に並んでいる。これであの高い天井を支えているようだ。並んだ柱を目で追うと、奥行きも相当であることが分かる。この空間は横に長い形状をしているようだった。私たちの後ろには壁があり、二十メートルほど進んだ正面にも壁がある。しかし左右に目を向けると、どこまでも深い闇が佇んでいる。女性の隣に置いてある小型のランプでは、到底その闇を取り払うことはできない。

「で？」

ランプに向けた目線を持ち上げると、紫煙を吐き出しながら女性が私の顔を見ていた。私の濡れた服を広げ終わったようである。

「あんたは、何だってあんなところに落ちてたんだい？」

「あんなところ？」

「水汲み場だよ」

「水汲み場？」

女性は面倒くさそうに頭をガリガリと掻いた。

「あんたは、オウムか何かの生まれ変わりなのかい？　人の言ったことを繰り返してばかりで」

「すみません」

「まあ、多分上から来たんだろうね。だったら知らないのも無理はないか」

「上とは、空の上のことですか？」

「空？　そりゃまあ、空も含むかもしれないが――私が言ったのは地上って意味なんだがね」

「地上……つまり、ここは地下？」

初めて女性は笑顔を作った。年齢と共に刻まれた皺が浮き立つ。その皺には老いというよりも、重ねてきた年月によって得た深い世才のようなものが感じられた。女性は煙草を指に挟み、その先端で私を指した。設問に正解した生徒を教鞭で指し示す教師のように。

「いいね。頭に血が巡ってきたようじゃないか。それでだいたい合ってるよ。地上の人間の感覚としては、限りなく正解に近い。けどね、厳密には違う。地下と言っても、地面の中って訳じゃあないんだ。つまり――」

女性は眉を聳え、唇をくにゃつと曲げた。

「ああ、面倒だ。説明が面倒だ。少し待ってな。服が乾いたら、あんたが落ちてた水汲み場まで連れて行ってやる。そこの方が説明し易い」

そうして私たちはその場所を離れた。携帯コンロや女性の荷物はあの場所に置いたままで、小型ランプと、「ついでだから」と女性が荷物の中から取り出した手提げバケツだけを携え、闇の中へと入っていく。女性の少し後ろを私が付いて行く。一列に並んだ柱を辿って、奥へと進む。まるで洞窟の中を探検しているようだった。柱の列は延々と続き、闇も果てが見えない。鉱山の長い横穴のようでもある。

十分ほど歩くと、横壁に穴が開いている場所に着いた。そこから

は白い光が漏れていて、ランプを点けなくても十分に明るかった。私と女性はその穴の中に入る。暗闇に慣れていた視界が、光量の変化に順応できなくて一瞬フラッシュする。

「ここが、水汲み場だ」

私の知識で例えるならば、学校の体育館のような場所だった。ただし、その天井も壁も、全て真っ白である。雪、だった。地面だけは土で、雪解け水の水溜りがいくつもできている。足元がぬかるんでいて歩きづらかった。今こうしている間にも、天井から水の滴がびちゃびちゃと地面に落ちてきている。

「あんたはここに落ちてた。雪まみれになってね」

「地上ではない。地下でもない。そして、この雪」

ぐるりと一回転して美しい雪の白さを目に焼き付ける。

「ここは、積もった雪の下にある空間なんですね？」

「そうだ。私たちのご先祖様——曾爺さんの曾爺さんのそのまた曾爺さんたちが、この豪雪地帯に作った居住用のコロニーだ。まあ、今となってはその機能の大半は失われてるがね」

女性はランプを消した。頭上の雪から、太陽の白い光が透過してくるので、この空間だけは明るい。居住用のコロニーならば他の場所には電灯が付いていてもよさそうだが、女性の言う通り、コロニーとしての機能が老朽化のために失われつつあるのだろう。

地下国のメリー・ゴー・ラウンド（4）

要は、私は雪に守られたのだ。こういう話がある。上空数百メートルを飛行中のプロペラ機から誤って男性が落ちてしまった。普通なら誰もが死んだと思うが、男性はなんと骨折だけで済んだ。男性が落下した先には針葉樹林の森があり、男性は密集した枝にぶつかりながら少しずつ速度をゆるめ、地面に着く頃には、三階建ての建物から飛び降りたくらいの衝撃になっていた。眉唾物の話ではあるが、説得力はある。相当の運が必要だが、理論的に不可能ではないだろう。数百メートルだろうと数万メートルだろうと、空気抵抗によって最終的な落下速度は一定になるので、私が柔らかな雪の層に抱かれ、この場所に落ちたというのも、ありえない話ではない。

そして、私は最優先すべき事項について女性に聞かねばならない。忘れていたわけではない。ただ、タイミングが掴めなかったただけであって、私が彼女のことを失念してしまう事態など、あってはならない。それは私の存在意義すらも歪めてしまう失態であって、私の頭から彼女の事が取り払われたとき、私はきつと融解するようにこの世から消えてしまうと思う。

「あの、私以外には、誰かいませんでした？」

「誰かって？」

女性は持ってきたバケツを、雪解け水の滴る場所に置いて、水を溜めていた。ぽちゃんぽちゃんと、規則正しく水滴はバケツに落ちる。水汲み場、という名前の意味がようやく分かった。あれが生活水になるのだろう。先ほど飲んだ白湯も雪解け水からつくられたのだろうか。だとしたら、あの何ともいえない旨みの説明がつくような気がした。

「女の子なんですけど。私より少し年下の」

「いなかったよ。落ちてたのは、あんた一人だ」

私と彼女は並んで飛び降りた。落下地点はそう変わらないはずだ。なのに、彼女の姿がない。気絶している私を放ってどこかに行ってしまったのだろうか。その可能性もなくはない。だからと言って、私は彼女に幻滅したりはしない。気絶する私の方が悪いのだ。何だかことん従順な下僕の思想だが、私と彼女の関係はもともとそういうものだと思っている。あと、もう一つの可能性がある。彼女が別の場所に落ちたというものだ。

「ここみたいな場所って、他にもありますか？」

「そりゃ、あるだろうよ。私が知ってるだけであと六つはある。コロニー中を探せば、もっとあるだろうさ」

「コロニーはそんなに広いのですか？」

「広いよ。人間一人の生涯じゃ、とても回りきれないくらいにね。なんせ国一つを雪の下に埋めちゃったんだ。広いのも当然だ」

「国一つ……なるほど。では、ここから一番近い水汲み場はどこにありますか？」

「歩いて二十分くらいの所に一つ。外側の層になるがね。内側に行けばもっと近い所もあるかもしれないが、生憎と私はこの層から内側に行ったことがないんだ」

「えっと、外側と、内側とは？」

女性はバケツを覗き込みながら、溜息を吐いた。

「こっち来な。水が溜まるまで講釈垂れてやる。この国の構造についてだ」

女性は私も同じようにしてバケツの前にうずくまると、ぬかるんだ地面に指で小さな円を描いた。

「これが一番最初に建造されたコロニーだ。よくあるようなドーム状の建物だと思えばいい。この国の主要機関は全てここに詰まっている。お偉い方や金持ちどもが住んでるのもここだ」

次に、その小さな円の周りに、一回り大きな円が描かれる。

「男女が一緒にいれば、子供ができる。子供ができちゃ、人口が増

える。最初のドームの人口密度はあつという間にレッドゾーン。ぎゅうぎゅうのすし詰め状態だ。それを緩和するために、お偉い片はコロニーの外側に、ドーナツ状の新しいコロニーを建造した。これが二番目のコロニーだ。一時的に人口密度は元に戻ったが、またすぐにポンポンとガキが生まれて、新しいコロニーも人で溢れるようになり――あとは、分かるね？」

私は自分の指で、二重の円の周りに円を付け加えて、三重の円にした。

「人口増加に伴って、外側にどんどん新しいコロニーの層を造っていった、と」

その通り、と女性は頷いた。

話によると、現在百二十層近くまで建造されており、一番外側の層では今でも非公式に新しい層が建造されていると言う。今私たちがいるのは四十三層目らしく、ちょうど“中流階級”と“一般市民”の境界の層だと言う。

「内側に近いほど裕福な人間どもが詰まってると思っていい。逆に外側に行けば、人間だか動物だかよく分からないような生活をしているような奴らが、わんさかいる。少なくとも百層以降はもう人間の住処じゃないね。文字も読めず言葉もともに話せないような奴らが、食って寝て交尾しているだけの空間だ。食料が乏しいから、共食いだって平気でしているだろうよ」

女性は入ってきた横穴から見て、正面の壁を指差した。

「あっちが内側の方向になるね。だいたい四十層目まではちゃんとした人間が住んでる。小奇麗な服を着て、朝昼晩と三食食べ、学校にも通って、働いて給料を貰ってる、至極文化的な人間たちだよ。私たちが言うところの“中流階級”以上の奴らだ。けどね、そんな奴ら、全国民の数パーセントにも満たない。国民の大半を占めるのは、私みたいな廃墟同然のコロニーを渡り歩く宿無したちだよ。“一般市民”と呼ばれる階級さ。ちなみに、さっき言った野蠻人どもは国民としてカウントされてないから除外してるよ」

女性はバケツを一瞥すると「そろそろいいかな」と呟いた。バケツの中には雪解け水が満杯近くまで溜まっていた。

「内側から外側に行くのは簡単だが、外側から内側に行くのは、ほぼ不可能だと言ってもいい。ドーナツの層同士はいくつかの細いパイプで繋がっているが、そこには険固なセキュリティが設置されていて、通ろうとする人間を見定めて、不適合ならレーザーで焼き殺しちゃうんだ。まあ、とは言っても、そんな高度な機能が生きてるのは、ここら辺の層までで、五十層目以降は内側にも外側にも行き放題だよ。そんな層を行き来しても何の意味もないがね」

女性は立ち上がって、バケツを持ち上げた。ちやぷん、と中の水が揺れて、少しこぼれた。私も一緒に腰を上げる。

「とまあ、こんなところだね。私が知ってるのは。参考になったかい？」

「ええ、とても」

「で、話は戻るが、近くの水汲み場を探してるんだね？」

「はい。ですが――」

いくら違う場所に落ちたからと言って、歩いて二十分もかかるほど離れた場所に落ちるとは思えない。墜落する数秒前、私と彼女は目線を交わせるだけの距離にあった。どれだけ離れていても、数十メートルがせいぜいだろう。つまり、女性の言う外側の層の水汲み場ではあり得ない。となると。

「内側の層を探してみたいと思います」

地下国のメリー・ゴー・ラウンド(5)

女性は水の入ったバケツを片手に提げたまま、胸ポケットから煙草の箱を取り出して、一本を口に咥え、火をつけた。それらの動作を慣れた手つきで片手でやってのける。女性は一度深く吸い込むと、軽く俯きがちに煙を吐いた。薄灰色の煙が白い壁に映える。煙はたゆたう余韻すら残さず、綺麗に空気に溶けていった。煙の残滓がひび割れた唇から零れる。女性の横顔は、過ぎ去った時間を慈しむような、故人を想う未亡人のような、悲しげでどこか懐かしげな――私には到底表現しようのない表情をしていた。

「不可能に近いって言ったのに、それでも行くのかい？」

「ええ」

「そんなに大事なのかい？ その女の子は、あんたにとって」

大事とか大切とか、そういう話ではない。私は彼女の側にいなくてはならないのだ。彼女の体温をいつでも感じていられる距離にいないといけないのだ。私がそういう存在だから。彼女と共に過ごした、あの小部屋での数億年は無為で無駄なようであって、実は私と彼女の絆を確固なものとするための必要不可欠な時間だった。もう、私は、一秒たりとも、彼女の側を離れたくないのだ。彼女の隣を独占できるのなら、何だってする。人を焼き殺すというレーザーの矢雨の中だろうと、かの不可能を不可能としない天才軍師のように、渡りきって見せよう。私は女性への返事の代わりに、その意思を宿らせた視線を向けた。

女性はもう一度、煙を吐いた。

「あんたが何者かなんて、私は知らない。たまの善意にあてられて、気紛れで拾ってきてやってただけだ。あんたには雪の一欠けらほどの同情も持ってない」

けどね、と笑窪を浮かべる。

「久々にまともな人間を見た気がするよ。長い事、もう、長い事、

はつきりとした自分の意思を持つてゐる奴なんて見たことなかった。金持ちだろうと乞食だろうと野蛮人だろうと、この国の人間たちは皆、太陽の光を忘れ安全な雪の中に引き籠もってしまったせいで、基本的に無気力なのさ。ただ生きてるだけ。自分よりも外側の人間たちを見下すことでしか、自分の生きてゐる意味を見出せないような下種ばかり。あんたみたいに、自分の命を賭してまで誰かを捜す奴なんて、もう一人もない。だから、今ちょっと、私は楽しいよ。あんたみたいな人間が、地上にはまだいることが分かって、安心した」

中途半端に吸った煙草を水溜りに投げ捨てた。じゅっ、と音を立てて火が消える。さらに、雪解け水が満載のバケツを、思い切り振りかぶって、天井めがけて放り投げた。バケツは中に入っていた水を撒き散らしながら、一回転、二回転、宙で舞う。冷たい飛沫が私の頬にもかかった。水を全て吐き出して、からっぽになったバケツは、ぬかるんだ地面にべちゃっと情けない格好で落ちた。

「あんたも、あんな風に落ちてたよ」

女性は肩を揺らして笑った。本当に楽しそうな笑顔だった。先ほどまでと比べて、五歳は若返ったような気がする。赤髪をばさりと両手で掻き上げた。雪の層を透過してきた真っ白な光で、髪はどす黒い血の赤さから、鮮やかな緋色に変わる。女性は煙草の箱と一緒に胸ポケットに入っていたヘアピンで、掻き上げた髪を一つにまとめた。意外にも白く滑らかなうなじが露になる。きつと、この女性は和服が似合うだろうと、私は至極どうでもいいことを思った。

髪をまとめた女性は、別人のようだった。私と同じ年と言っても通用するような、若々しいオーラを全身から発している。人間とは心の持ちようひとつで、ここまで変わるのかと、私は新鮮な驚きを見せた。世界にはなく、この世界に生きる人間たちに驚いたのは、これが初めてだ。

「あんたの覚悟は立派だが、やっぱりね、セキュリティを強引に通る抜けるのは無理だよ。ここ四十三層目と、あんたが行きたいと言

つて四十二層目は、さっきも言った通り人種の境目なんだ。中流階級の空間へと薄汚い乞食が入ってこないように、連結パイプでは自動セキュリティの他にも政府の門番が目を光らせてる。セキュリティをどうにか無効化しても、門番に見つかったらアウトだ」

「何か方法はないのですか？」

「ないと言っても、あんたは諦めないだろう？　ついて来な。あんたに私の二十年の苦勞を見せてやる」

女性は水汲み場から出て、私たちが来た方向とは別の方向に歩き出した。女性の説明を受けた後だから気付いたが、この横穴は直線ではなく、ゆるやかにカーブしていた。私たちは四十三番目に建造された巨大なドーナツ型のパイプの中を、左回りに歩いているのだ。ところで、パイプの中を歩きながら、私は一つの疑問を浮かべた。

「あの、ちょっと聞いていいですか？」

「なんだい？」

ランプで道先を照らしながら、すたすたと先に行く女性。

「あなた以外の住人は、この層にはいないのですか？」

先ほどから人間の気配がしなかった。居住用のコロニーというならば、もっと人がいてもいいはずだ。

「いるよ。でも、こちら辺にはいないね。ご存知の通り、人間ってのは群れる生き物だ。広い空間があつて、そこに人間たちが均等に散らばって暮らしているなんてのはあり得ない。乞食たちは乞食たちなりに共同体みたいなを作っていてね、この四十三層にも二十個くらいの集落がある。そこに行けば私みたいな浮浪者が沢山いるよ。こちら辺は特に老朽化も進んでいて、しかも建造した奴が手抜きした場所らしくて、今にも天井が崩れ落ちてきそうってんで、人が寄り付かないのさ」

私の疑問は氷解した。ついでに、コロニーにしては狭い横幅や、梁が剥き出しの天井にも納得がいった。しかし、すぐに次の疑問が

湧き上がってきた。なぜ、女性はそんな場所に住んでいるのだろうか？

「私が何でここいらに巣食ってるのか、不思議って顔だね？」

女性は首だけこちらに向けた。

「二つほど理由がある。一つは、もともと私が人嫌いだっていうこと。馴れ合いが肌に馴染まないんだ。私は静かな場所が好きなのさ。そしてもう一つは、今向かっている場所に関係がある」

地下国のメリー・ゴー・ラウンド（6）

さほど遠くではなかった。女性に案内された場所は、水汲み場から五分ほど歩いたところにあった。通路から見た感じでは、単なる横穴である。水汲み場と同じように、パイプの壁が崩れ落ちて雪の壁が露になっている。しかし、どうも自然に崩壊したようではなかった。断面こそギザギザだが、少し離れて見ると綺麗な半円を描いて穴が開いている。明らかに、人為的に開けられた穴だ。そして、それを行った人物は、どう考えても、目の前の女性以外にはあり得ない。

「さて、どう見える？」

女性は壁の前に立ち止まって、私に尋ねた。私は女性の横に立ち、白い壁を観察した。雪、である。紛う事なく雪である。しかし、何十メートルにも降り積もった雪の層は、確かに雪の白さを残してはいるが、実際には氷と同じだ。水汲み場のように密度を和らげる空洞があるわけでない。最密された雪は、触ると固い。爪でガリガリと引っかいてようやく削れるくらいの固さだ。

「壁ですね。白い氷の壁です」

「そう見えるかい？ 良かったよ。誰かに見せるのは初めてだから、ちよっと不安だったんだ。本当は他の住人たちにバレてるんじゃないか、ってね」

女性は雪の壁に手をつけた。軽く押す。すると、女性の手が壁に埋まった。私は眉を跳ね上げる。その反応に女性が得意気な表情をする。女性は埋まった手をそのまま下に振り降ろした。ずさつ、と雪の壁が崩落し、人間一人が通れそうな穴が現れた。

私は、理解する。彼女はここから内側の層に向かって横穴を掘っていた。何年も時間をかけて。おそらく、毎日の生活の中で暇な時間を縫ってはこの場所を訪れ、氷の壁に立ち向かっていたのだろう。女性が、人気のない辺鄙な場所に住んでいる理由も分かった。この

作業を他の住人に知られたくなかったのだ。知られば、様々な問題が起こることは容易に予想できる。だから、女性は人知れず作業を進め、そしてこの場所を離れるときには、丁寧に穴を塞いでおき、万が一誰かがこの場所を通っても、横穴の存在に気付かれないようにしたのだ。

「さあ、行こう。まだ未完成だが、あとほんのちよつとなんだ。あんたと二人でやれば、一時間もかからないだろうよ」

女性が内側の層へと行きたい理由は分からない。しかし、それは知る必要はない。きっと、この国の住人にとって、内側の層への憧れは、生まれたときから本能に刻まれているものなのだろう。遺伝子レベルの憧憬なのだ。けれど、その強い願望も現実――セキュリティと門番という障害によって打ち碎かれる。憧れを持ちながらそれを実現することができない。この国の住人が無気力になる根本的な原因が分かった気がした。

そんな中で、この女性は諦めることをしなかった。子供の頃から無常な夢を捨てることをせず、懸命に雪の壁を掘り続けた。二十年、言葉にするにはあまりにも軽い。いくら強い熱情でも、二十年間休まず続けることは、並大抵の人間に出来ることではない。素直に、感心し、感動した。人生を懸けてまで一つのことをやり遂げようとする女性に、私は感服の念を禁じえなかった。

私と女性は穴の中に入った。中腰にならないと進めないほどの狭い横穴だった。穴は約百メートルほど続き、やがて最深部に付いた。現在進行形で掘り進めている場所である。足元に金属製のスプーンと、おもちゃのような小さなトロッコが置いてあった。金属の切れ端を不器用に繋ぎ合わせ、車輪を取り付けた至極簡易的なトロッコだ。ところどころ修復した跡があり、繋ぎ目は今にも取れて落ちそうだった。私がそれに目を奪われていると、女性はふっと小さく苦笑する。

「私が初潮も来てないような歳の頃に、その辺に落ちてた廃材を組み合わせて作ったもんさ。拙いだろう？　今ならもっとちゃんとし

たのが作れるだろうけど——何となく捨てられなくてね。掘った雪を運ぶために、今でも使ってるのさ」

そうして私たちは協力して雪の壁を掘り始めた。片方がスプーンで壁を掘り、片方が削り出された雪を外まで運ぶ。雪とは言えこう寒くては簡単には解けない。結局はトンネルを掘るのと同じようにして、逐一外まで土を運ばなくてはならない。この二つの作業を、私たちは交代で続けた。流石に女性は慣れた手つきで、私の方が身体が大きいというのに、壁を掘る速度は女性の方が早かった。よくよく見てみると、女性の腕はかなり筋肉質で、力こぶが盛り上がっていた。

「二十年は、伊達じゃないよ」

作業をすること一時間強。雪の壁が終わり、ついに内側の層のパイプが見えた。雪ではない、黒い金属製の壁。これが、四十二層目の壁だ。女性はその壁を撫でるように触って、ごくりと唾を飲んだ。女性にしてみればようやく辿り着いた最後の障壁だ。これを越えれば、内側の層へと行ける。

地下国のメリー・ゴー・ラウンド（7）

この地下とも地上とも言えない場所に来てからそれなりの時間が経過したが、ある時から私の脳裏を駆け巡って止まらない一つの考えがある。それは、あまりにも出来すぎではないか、ということだ。ここに来てから、あまりにも偶然が都合良く重なり過ぎている気がする。初めから、そうだ。私が水汲み場に落ちて、女性が自分のねぐらまで運んでくれたのも、冷静に考えてみれば、相当運の良いことだと分かる。私が落ちた場所に、たまたま“赤の他人を助けようとする優しい女性”が現れたのだ。さらに、私と彼女が落ちた場所が四十三層と四十二層目というのも、何だか意図的である。人種の境界線。行き来するのが最も難しい場所。これがもう少し内側か外側にずれていたのなら、何の苦労もする必要はなかったのだ。まだある。これが決定的とも言えるが、女性が“二十年費やしていた作業”が“今日達成される”という奇跡的な確率だ。ありえない。たまたま私が落ちた日が、記念すべきトンネル貫通日なんて、都合が良いにも程がある。

しかし、これらのことも一つの反駁によって解決される。彼女だ。この世を創造したと思われる彼女が仕組んだことだと考えれば、全てに想像がつく。要は、ここは彼女が用意した舞台なのだ。私が“女性”という登場人物の協力を得て“彼女”を捜すという、月並みながらも王道なストーリー。彼女は私にそれを演じろ、と暗黙に命令しているのだ。かなり乱暴な推理ではあるが、あながち間違っているとも思い難い。ならば、演じよう。用意された舞台はとも現実的で残酷だが、私は機械的な舞台装置の一員として、この演劇を彼女が描いた台本通りに進めていこう。

「この壁はどうするのですか？」

四十二層目の金属壁。雪の壁とは違ってスプーンで壊せるとは思

えない。何か大掛かりな工具が必要だ。しかしそのような物は近くなかった。ボールでもあれば壁の繋ぎ目に引っ掛けてどうにかできるだろうかとも考えたが、どうもその繋ぎ目が見当たらない。完璧な一枚板でこのパイプは作られているらしい。四十三層目の壁や天井がハリボテ同然なのを考えると、ここにも格差が如実に現れていた。

「私が何にも用意してないと思うかい？」

ちよつと待ってな、と言いついて女性はある穴の出口へと戻って行った。私は小型ランプ、そして手作りミニトロッコと一緒に、壁の前に座りながら女性を待った。すぐに女性は帰ってきた。手にはいくつかの道具を持っている。その中の一つの中着を取り出して紐を解き、中身をトロッコの中に入れた。黒い粉だった。錆びのような臭いもする。

「もしかして、火薬ですか？」

「爆薬だよ。トンネル発破用の奴を裏口で回してもらったのさ」

黒い粉を注ぎ終わると、トロッコを金属壁に押し付け、テープで固定した。さらに導火線をトロッコの底に取り付け、足元まで伸ばす。

「爆破するつもりですね」

「そう。色々悩んだが、結局はこれが一番手っ取り早い」

「でも、大きな音を立てたら中の人たちに気付かれませんか？」

「構うもんか。平和ボケした一般人に気付かれたところで何の問題もない。警備員が駆けつけて来たときには、私たちはもう中に入っちゃってる」

用意は終わった。あとは導火線に火をつけるだけだ。女性は胸ポケットから煙草を取り出して火をつけた。深く、そして美味しそうに吸う。何かをやり遂げた後の、いや、何かをやり遂げようとするときの顔だった。半分まで吸って、赤熱する煙草の先端を足元の導火線に向けた。一瞬だけ、女性はトロッコをいとおしむように目を細める。戦友を看取る戦士のような、銃創をガーゼで押さえながら

悲壮を宿す野戦病院の衛生兵のような、そんな瞳だった。

「いくよ。火を点けたら急いで外に出るんだ。一、二の……三！」

じっ、と導火線が燃え始めた。私と女性は全速力で横穴の出口へと向かう。滑る足元に注意しながら、とにかくがむしゃらに走った。ホームベースへとヘッドスライディングする野球選手のように、私たちは横穴から四十三層目の通路へと滑り込む。同時に、後方から爆音と衝撃が響いた。ずん、と地面が揺れる。何かが崩れる音もした。私と女性は折り重なるように床に寝そべりながら、顔を見合わせた。すぐにUターンして先ほどの場所に戻る。雪のトンネルが崩れ落ちて横穴が塞がっていたが、そんなものは気にせず、雪の土砂を掻き分けるようにして、破壊された金属壁の先を目指した。雪でもみくちやになり、手は霜焼けのように赤くなって――私たちはどうとう四十二層目へと辿り着いた。

そして、見た。

地下国のメリー・ゴー・ラウンド(8)

「遊園地で、延々と廻り続ける回転木馬の気持ちを、考えたことがあるかしら？」

彼女の声だった。耳の奥にすん、と差し込んでくる、声変わり前の少年のような声。暗闇から、炙り出しのようにして彼女の姿が現れる。顔には、誰かを哀れむようで実際には楽しんでいる――コロッセウムで血みどろの死闘を見下ろす貴婦人の笑顔を張り付けていた。エメラルドグリーンの瞳が闇の中で光を揺らす。

「ぐるぐるぐるぐる……いつまでも、いつまでも、偽物の馬は、廻り続ける。同じ場所を、朽ち果てるまで。無邪気な子供を背中に乗せている瞬間は確かに有意義なものかもしれない。けど、それも一瞬の煌き。蠟燭の炎よりも儚い充実感、閉園後の夜には同じだけの絶望感となって、木馬を苛む」

吟遊詩人が詩を唄うがごとく、彼女はリズムに乗せて言葉を並べる。

「何のために作られた？　ぐるぐる、上下運動を加えて、今日も明日も木馬は廻る。きっと来年も再来年も、ぐるぐる。何のためにここにいるの？　絢爛豪華な舞台を愉快的ミュージックに合わせて、木馬は物言わず廻る。ぐるぐる。笑っているように作られた顔は、びくりとも動かない。その黒曜石のような瞳からは、何の液体も流れ出すことはない。人間たちは、自分たちが刹那の愉悦を楽しみたいたために、木馬を廻し続ける」

「何が言いたいんだい？」

彼女の詩を遮ることは少し気が引けたが、言わずにはいられなかった。私が止めなければ、彼女はいつまでも詩を唄っていそうだった。私の声に、彼女は微笑む。やはり、世界中の誰よりも彼女は美しかった。しかし、今は、その美しさが不気味だった。

「暗喩に気付かないほど、あなたを愚かに創った覚えはないわ」

「君の、仕業なんだね？」

彼女は柔らかく首を横に振った。髪の毛がそれに合わせて左右に揺れる。光もない――電灯も街灯も何もない場所にも関わらず、彼女の髪の毛は輝きを失わなかった。まるで彼女だけが別次元にいるような――私と女性が地獄でもがき苦しんでいるのを天界から見ている神様のような、そんな雰囲気だった。

「勘違いしないで貰いたいのは、私が用意したのはあくまで“舞台”と“登場人物”だけだという事。私は台本を書いてない。登場人物たちにああしろこうしろなんて命令をした事もない。こんな結末になったのは、あくまで登場人物たちが自ら選択し、自ら決断した結果よ。責任がまったくないとは言わないけど、私が一から全て仕組んだわけじゃないのよ？」

「でも、予想はできたはずだ。君なら」

「そうね」

「……」

「私のことが、嫌いになった？」

「なるものか。なるはずがない。私が君のことを嫌うだなんて。けど――」

私は横目で自分の足元を見下ろした。そこには、女性がへたりこんでいる。呆然とした顔。全身から力と精気が抜け落ちていた。一気に老け込んだように見える。赤髪も艶めきを失い、一瞬で白髪が増えたようにも見えた。感情を失った瞳に、ぼろぼろのドロッコや、女性のごつごつした指先を浮かび上がらせて、私は爪が食い込むほどに手を握った。

「君の頬を、殴りたいと思っている。一度でいいから、君を思い切り、殴り飛ばしたいと、今、強く思っている」

何も、なかった。空っぽだった。

女性がいたいけな少女の頃から毎日のように夢見た中流階級の世界は、とっくの昔に崩壊していた。四十三層目と何ら変わりのない、

いや、むしろ、もっと酷い有様の光景が目の前に広がっていた。あ
るのは、瓦礫。崩れた天井と柱。皮肉にも壁だけは頑丈に作られて
いたようで、どこも壊れてはいなかった。女性が爆破した場所以外
は。人なんて、いるわけない。綺麗な服を着た、当たり前の生活を
送る、当たり前の人々なんて、どこにも見当たらなかった。建物は
全て無人で、廃墟同然と化していた。居住区はゴーストタウンで、
動物の気配すらなかった。当然電気も通っていない。天井の電灯
は全て消えている。ドーナツ同士を繋ぐ連結パイプのセキュリティ
と警備員は？ 多分、セキュリティは生きているだろう。ああいう
のはたいてい予備電源から電気が供給されている。警備員は、もう
いないだろう。彼女が得た情報が何年前のもののかは分からない。
少なくとも、今はもう、わざわざ意味のない責務をやる人間なんて、
いない。見上げれば、小さな光。私たちを照らすのは、パイプの壁
に作られた採光用の小さな窓から差し込んでくる、白く頼りない光
だけだ。

原因なんて分からない。分かりたくもない。政府が崩壊したとか
国家が国民を維持できなくなったとか食料が尽きたとか、どうせそ
んなありきたりな理由だろう。過程なんて、もはやどうでもいいの
だ。ただ、悲惨な現状がある。残酷な事実が突きつけられている。
この国は、もう、どこにもないのだ。雪の下で、人知れず一つの国
が滅んでいたのだ。

あまりに、あんまり過ぎる。

女性の二十年は何だったのだ。何のために、毎日毎日、雪の壁を
掘り続けたのだ。その先にある輝かしい光を目指して、弛まぬ努力
を続けてきた女性の半生は、無駄に終わった。何の結果も生み出さ
なかった。沢山の犠牲と我慢を自らに強いながら、幼い憧れに向か
って進み続けた女性は、何一つとして報われなかった。無益なこと
を、二十年、やり続けていた。それは多分、奴隷のように回される

回転木馬よりも、虚しいことだ。がりがりと、金属のスプーンの先端で雪を掘り続けた女性。がりがり。その先の光を信じて、ひたすらに。

私は女性に何か声を掛けようとした。口は開いた。でも言葉が出てこない。声帯は震えだそうとしない。何を、言えがいいのだ？

私が、何を？ 食い込んだ爪が激しい痛みを手の平に伝える。こんな痛さが、何だ。今の女性に比べれば、こんな痛みなんて蚊に刺されたようなものだ。私はとにかく、何かを言おうとした。努力した。その時、女性が咄嗟に動いた。信じられないくらい機敏な動きだった。私は驚いて瞬時に反応できなかった。女性は足元に落ちていた金属壁の破片を手にとった。ナイフのように鋭く尖った破片だった。それを自分の首めがけて突き刺そうと――

パチンッ

「選りなさい」

彼女が指を鳴らした。すると何もかもが停止した。女性は破片を喉元に突きつけたままで止まっている。顔も絶望に歪んだままだ。私と彼女以外の時間の流れが止まっていた。彼女が止めたのだ。私は彼女へと向き直る。

「選択肢は二つよ。この女性を、生かすか、殺すか。今時間が止まっているうちに破片を手から離して助けるか、それともこのまま死なせてあげるか、選りなさい」

「どうして、こんなことを」

「制限時間は十秒。さあ、早く」

地下国のメリー・ゴー・ラウンド（9）

「十秒も、必要ない」

私は女性の手を傷つけないように、握っていた破片を取り払った。投げ捨てる。カラン、と、時間の止んだ世界に無機質な音が昇る。彼女が瞼を半分閉じて、三白眼のようになりながら私の顔を見上げた。

「それで、いいの？」

「……ああ」

私はエゴイストだ。偽善的で良い子ぶりただけの、自分勝手な優しさを他人に押し付ける、はた迷惑な人間だ。この後、女性に責められるだろう。どうして、死なせてくれなかったのか、と。希望のなくなった世界に、もう生きている意味などない。価値などない。生きていても絶望に染められるだけだ。他の住人たちと同じように無気力になって、そのうち道端に倒れて、糞尿を垂れ流しながら、蛆に内臓まで食い破られて、死んでいくだけだ。そんな未来を押し付けられるくらいなら、今、死んだ方がどれだけマシか。悲しみの涙を流せるうちに意識を失って綺麗に死んでいくことが、女性にとってが一番幸せなのかもしれない。それでも、私は女性を死なせたくないのだ。生きていくことがどれだけ辛くとも。誰のためでもない。私のために。これで、私は彼女を非難できなくなった。殴ることなんてできなくなった。私も、もはや同罪だ。私は自分の気持ち救いたいがためだけに、女性を地獄に突き落とした。蜘蛛の糸は一人しか登れないと知って、後からついてくる女性を切り離れた。私はその場に膝を付いた。自分自身の残酷さと身勝手さに、涙腺が暴れだしそうだった。しかし、それは駄目だ。ナルシズムに溺れることだけはあってはならない。誰かを突き落としておきながら、涙で後悔を体外に流してしまうのは、絶対に駄目だ。自分だけが救われるなんて、女性を馬鹿にするにもほどがある。私は、神経回路

をF1の速度で駆け巡る自責の念を、ありのまま受け入れようと必死だった。感情がビートダウンして細胞を踏み散らかす。両腕を組んで、外に出ようともがく感情を押さえ込んだ。出て行くな。ここにいろ！ 自分だけが楽になろうとするな！ 崩壊した世界で誰かを生かすのと同じだけの苦しみを、自分自身でも味わえ！

身体がガクガクと震えた。私の身体は破裂寸前だった。感情が身体を突き破って爆発しそうだった。子供のように地面にうずくまる私を、彼女が――私よりも一回り身体の小さな彼女が、包み込んだ。細い腕が私の背中に回される。薄い胸が額に当たる。髪の毛からはレモンバームの匂いがした。強く、しかし優しく、彼女は私を抱き締めてくれた。

「あなたの選択は褒められたものじゃない」

耳元で彼女は囁く。先ほどまでの冷たい声ではなく、雪を溶かす春の日差しのような、温かみのある声だった。彼女の口から発せられる単語一つ一つを聞いたたびに、私の心は平静を取り戻していった。「でも、それは確かな優しさ。他人を死なせたくないという、とてもありきたりで、とても原始的で、とても人間らしい優しさ。しかも、あなたは責められることを望んでいる。自分自身が引き起こした悲劇の、責任を取ろうとしている」

彼女の声が湿る。うずくまり、彼女に抱き締められている私からは、彼女の顔は見れない。だけど、きっと、彼女は私と同じように、目尻を濡らしている。

「合格よ。まず一つ。あなたは私と旅をする権利を得たわ」

「え？」

彼女は私を離れた。私も顔を上げる。至極近い距離で、私たちは顔を合わせる。彼女の目はやっぱり少し赤かった。でも、口元は笑っていた。嬉しそうに。そして、また指をパチンと鳴らした。

「時間よ、走りなさい。悲しみを振り切るまで」

景色が巡った。止まっていた時間が動き出した。高速で。私と彼女以外の時間が、早くなっていた。早送り映像のように周りの景色が入れ替わっていく。崩壊していた建物はやがて風化して、四十二層目は完全な更地になる。何十年、何百年、経ったのだろう。私と彼女からすれば数秒の出来事だ。また、新しい建物が建ち始めた。頑丈に作られた特殊素材のパイプだけは崩れることなく、ずっと雪の下に埋まっていた。それを発見した地上の人間たちが、そこに新しい国を作り始めた。更地に次々と民家が建ち、街路が整備され、電気が通り、整然とした町並みが一瞬にして出来上がる。小奇麗な服を着た、ありきたりな人間たちが、町を歩いている。一度死んだ土地に、新しい人間たちが住み始めた。新しい国が、生まれた。

「もういいかな」

彼女はつつと指を上げた。すると周りの景色の流れが通常に戻った。私たちは綺麗な町並みの端っことで、二人寄り添ってうずくまっていた。通行人は怪訝な視線を私と彼女に投げた。

「さあ、そろそろ地上に戻りましょう」

彼女は何事もなかったかのように歩き出した。

「あ、ああ」

私は呆氣に取られながらその背中を追った。私たちは街の一角にあった地上への直通エレベータを見つけて、そこに入った。エレベーターに乗る前に出国検査を受ける必要があったが、彼女が女性検査員に何やら一言二言話しかけると、検査員はすぐに直立不動になって、私たちを通してくれた。エレベーターに乗り込む直前、帽子を被っていた女性の検査員のうなじが見えて、私は思わず声をかけていた。

「あ の っ」

「はい？」

女性検査員は振り向く。二十代前半の、まだ若い、夢に溢れた女の子だ。この世に落ちている残酷さの欠片が、これからいくらでも

身体に突き刺さることを知らずに、ただ毎日の幸せを甘受すること
で生きている、純真無垢な顔。

「あなたのご先祖はどこの国の生まれですか？」

「はぁ？」

検査員は首を傾げた。

「あ、いや、すみません。気にしないでください」

エレベーターの扉が閉まる。その隙間から女性検査員の姿が見えた。帽子に手をかけ、被り直したその一瞬、燃えるように赤い緋色の髪が垣間見えた。隣にいる彼女がウインクした。扉が閉まる。エレベーターが上昇する。私は声を上げて笑った。

特徴のない道（1）

足元は舗装されていない砂利道。道の両側には民家の垣根。庭先の枝垂桜が、道の上まで伸びていて、視界を遮る。暖簾をくぐるようにしてその枝葉を取り払い、先に進むと、今度は一面の畑。耕されてはいるものの何も植えられていない休耕地だ。規則的なストライプを描いて黒い土が盛り上がっている。私たちは畑の真ん中のあぜ道を歩いていった。空を見上げれば、複雑怪奇に切り分けられた奇妙な空。雲の壁によって多種多様に分割された様々な空が、私と彼女を見下ろしていた。その一部の、紫色の不気味な空で太陽が輝いている。これは、快晴と言っているのだろうか？　そもそも消えない雲の壁が空を占領しているこの世界に快晴という状況は有り得るのだろうか？

「ねえ」

つん、と私の横腹を彼女がつついた。彼女は畑の方向を指差している。

「案山子」

彼女の指し示した方向には、麦わら帽子を被った案山子が立っていた。顔はへのへのもへじで、胴体にはぼろぼろの布切れが巻きつけられている。風雨に晒されて全体的に崩れかけている。まるで十字架に貼り付けられたゾンビのようで少し不気味だった。作物が植えられていないのに、案山子の意味はあるのかと、私は疑問に思った。カラスだって何もない畑を荒らしには来ないだろう。カラス？

と私は思い立って、辺りを見渡した。そういえば、鳥の姿が——いや、動物の姿が一切見えなかった。音はする。耳を澄ませば、かすかな虫の鳴き声も聞こえるし、スズメのさえずりだって遠くから聞こえてくる。何かが息づいている気配もする。なのに、姿が見えなかった。民家があり、耕作された畑があるのだから、それらを管理する人間がいてもよさそうだが、人っ子一人として目にする事は

できなかった。私と、彼女だけだった。二人だけの世界だった。

地上へと出た私たちは、歩き出した。どこへ行くのかなんて決まてなかった。ともあれ、私たちは進みだした。最初から、何らかの目的を持って私たちは生きているわけではない。少なくとも、私はそう思っていた。私と彼女はこの世界に“生きているから生きている”のであり、高尚な理由を模索する必要はないと、私自身は思っていた。だがしかし、どうやらそれは違うようだ。彼女にとってはそれだけではないらしい。彼女には、何かしらの目的がある。それが、先ほど明らかになった。

『合格。まずは一つ。あなたは私と旅をする権利を得たわ』

旅をする権利とは何なのだろう？ 権利を得たということは、それ以前の私は彼女と共に旅をする権利がなかったということなのだろうか？ だから、彼女はあえて、違う場所に落ちて、私から距離を置いたのだろうか？ それに“まず一つ”ということは、次もあるということだ。一体、彼女は何をしているのだろうか。私に、何を課しているのだろうか。疑問は尽きなかった。彼女のことについて考えるだけで何時間も過ごせそうだった。なぜなら、それは苦痛ではなく、むしろ楽しい時間だから。自分の頭の中が彼女の事で埋め尽くされるのは、とても快いものだった。ずっと彼女のことを思いながら一生を過ごすのも、悪くないと思えるほどに。

道は――何の変哲もない、どこにでもあるような道は、どこまでも続いていた。相変わらず誰もいない。畑を貫く道はやがて森の中へと入る。細い杉の木が空を突くように高く伸びている。これは、太陽の光を渴望して他者と競合した結果だ。他の木より高くなければ日差しを浴びることができないので、どの木も競り合うようにして背を伸ばしている。根元には雑草や苔が繁茂している。道には枯れ枝や落ち葉が散乱していた。それらを小気味良い音を立てて、私たちは踏み鳴らしていく。相変わらず、鳥や虫の鳴き声は聞こえる

のに、その姿が見えない。木々の隙間を吹き抜ける風が、彼女の髪を揺らす。それを、美しいと、私は思う。彼女には、森が似合う。まるで神話の中のドライアドのように、彼女は木々と調和していた。あまりにも馴染んでいるものだから、私は時折、彼女が唐突として森の中に溶け消えてしまうのではないかという不安に駆られ、そのつど隣の彼女の姿を確認した。私の横を歩いていることを確かめた。そんな私の顔を、彼女は無表情と微笑の中間の、形容するにも形容するべき言葉が見当たらない、とても淡く繊細な表情で見返した。そんなとき私は、間違いなく自分は彼女と旅をする権利を得たのだと、実感する。

特徴のない道(2)

森を歩いているうちに夜になった。月明かりは木々の葉に遮られて、私たちがいる道までは降りてこない。完全に暗くなってしまう前に、私たちは野営の準備をした。どうせ誰も通らないので、道の真ん中で堂々と焚き火の準備をする。原始的に石同士を打ち鳴らした火花を利用して、拾ってきた落ち葉に引火させる。すぐさま枯れ枝を上に乗せて、炎を安定させれば、焚き火の完成だ。私と彼女は寄り添うようにして炎の前に座った。それは、そう、まるであの小部屋で過ごした蜜月の時と同じように。私の肩に、彼女の心許ない体重が押しかかる。私は揺れる炎をじっと瞳の中に入れていた。考えてみれば、あの小部屋を出てからまだ数日しか経っていないのだ。窓の外の雨を見ながら、彼女の目覚めを待ち続けた数十億年を考えれば、ほんの一瞬のような時間だ。けれど、私にとってはあの数十億年よりも、この数日間の方が長く感じられた。無論、知らないわけではない。人間の意識単位で考えれば、時間の流れは一定ではないことを。時間が一定に流れるのは時計だけで、生物にとっては時間は常に流動した速度を持っている。一秒たりとて、一ミリ秒たりとて、同じ速度で進む時間はないのだ。だから、数十億年と数日間を比較して、どちらが短いとか長いとかを議論するのはナンセンスだ。数百億倍の速さで時間が流れれば、数十億年など数秒にも満たない。

「あなたは」

「うん？」

言葉を交わしながらも、お互いに顔は見ない。どちらも焚き火に視線を向けていた。不安定に揺らめく光が私たちの顔をオレンジ色に照らす。たまに枝が燃え崩れて炎が吹き上がるときがあり、前髪が焦げそうになった。ちょっと位置が近すぎたかもしれない。けど、私は自分の意思で動けない。寄りかかる彼女が動かなければ、私も

動けない。

「……………」

彼女が何かを訪ねようとしていたので、次の言葉を待ったのだが、いつまで経っても彼女は質問をしてこなかった。少し眠そうに目を細め、口をつぐんでしまっている。

「何も、ないのかい？」

しびれを切らしてこちらから聞いてみる。それでも彼女は何も言わなかった。なら、それでいいと思った。何も言いたくないのなら言わなくていい。彼女に何かを強制できるほどの権利を私は持っていない。

静かな夜だった。

特徴のない道(3)

夜が明けて朝になった。立ち並ぶ木の幹の隙間から、ベージュ色の光が吹き込んでくる。真っ直ぐ突き刺すように、朝日は森の中を照らして、明瞭な境界を持った木の細い影が、縞々に道を染めた。白と黒のコントラストが眩い。火の始末をして、私たちは再び歩き出した。

朝鳥たちの肌をさわさわと撫でるような、くすぐったい鳴き声が聞こえる。カサカサと、虫が飛び跳ねて草葉を揺らす音も聞こえる。相変わらずのサウンドオンリー。適度に湿った空気は葉裏に朝露を残して、芳醇な青々しい香りを立ち昇らせた。肌に差す日光は、眠った細胞を一つずつ揺り起こす。私たちは身体全体で森の朝を感じ取っていた。砂利道を歩きながら、朝に抱かれていた。母親の優しい声色で起こされるとき、ほんのちよつとの苛立ちと、確かな幸福感を、私たちは森から受け取っていた。

昼前になって、私たちは森を出た。森の先には草原が広がっていて、その真ん中を果てしなく長い一本道が伸びていた。私たちは決して立ち止まることなく、歩き続ける。ゆるやかな丘陵をいくつも越え、歩き続ける。風に乗って羊と、羊を追いつてる牧羊犬の鳴き声が聞こえた。よく耳を澄ませば、杖を振り回す若い羊飼いの声ももう、その姿を探したりはしない。どうせ、見えないのだ。私は横にいる彼女の気配と存在だけを感じながら、足を動かすだけだ。何度見ても見慣れない、いくつにも分断された空。頬をすり抜ける薫風。ああ、自然だ。まがうことなく自然だ。私たちは真つ当な自然の真っ只中を旅している。

数十キロメートルほど歩いた頃、草原の草の密度が少しずつ薄くなっているのに気付いた。進むほどに、草が消え、代わりに赤銅色

の大地が露になっていく。さらに十キロほど歩けば、もう草原ではなく荒野と呼ぶべき光景になった。握りこぶし大の石がいくつも転がっていて、錆びた鉄のような臭いの風が吹いている。表現としては陳腐だが、幌馬車が似合いそうな場所だ。ホルスターを提げたカウボーイがいれば尚良い。錆びたレールの機関車が走っていたら完璧だ。

特徴のない道(4)

歩いて、

歩いて、

歩いて、

夜は寄り添って寝て、

歩いて、

歩いた。

荒野を越え、海岸線に出た。白波が押しは引いていく。水が崩れる音が大気を満たしていた。ざざん。ざざん。海鳥の声と、灯台がライトを回転させるときの錆びたおもちゃみたいな音。白い雲か、もしくは雲の壁が、遠い遠い水平線と空を切り分けていた。広い海を横目にして、私たちは海岸線を並んで歩く。ぬめった潮風が頬や髪に当たって、彼女は少し不快そうな顔になった。そういえば、もう何日も風呂に入っていない。シャワーも浴びていない。海ではなく、川でもあれば水浴びもできよう。しかし、今のところ真水の流れる場所には行き着かなかった。私たちは不潔だろうか？ もし、不潔だとして、何の問題がある？ 今、この――狭義的な――世界には私と彼女しかないのだ。そして私たちのどちらも、不潔なことを気にする人間ではない。人間が、人間という動物が、ありのまま生きて、何が問題がある？ 獣のような臭いを全身から昇らせて、垢と埃にまみれた服を着て、そうやって生きていることの、一体何が悪いのだろうか？ 何も、悪くない。悪いはずがない。確か

に、不潔は病気の原因だ。獣だって、水浴びはする。カラスは公園の噴水で羽を濡らす。けど、それは最低限の清潔さを保つためだ。人工の薬品で身体を染め、一切の汚れも垢もなくなった体は、不自然だ。綺麗過ぎることは抗体を弱め、逆に病気の原因となる。適度に汚れている方がいい。私たちはまだ、それほど汚れていない。少なくとも、私たち自身はそう思っている。

「ねえ」

海岸線を一週間ほど歩いたとき、彼女が口を開いた。随分と久しぶりに彼女の声を聞いた気がする。ああ、そうだ。彼女はこんな声だった。こんなにも耳触りのいい、綺麗な声だった。

「退屈じゃない？」

「どうして？」

私は素直にそう聞いた。彼女の言わんとすることは分かる。私たちはひたすら歩いているだけだ。何の、刺激もない。様々な風景を観賞することはそれなりに面白くもあったが、何も起きず、誰にも会わない旅は、きっと普通の人にとっては我慢できないほど退屈だろう。けれど、私にとっては退屈ではなかった。理由は――長ったらしく説明するまでもない。一言。彼女が、隣にいるから。

「あなたは、無欲ね」

「そうでもないよ。欲の対象が一極化しているだけさ。総量是一般人並だと思ってる」

特徴のない道(5)

「もしも」

軽く上を向いて、彼女は言葉を始めた。その滑らかな曲線を描く顎の角度に、私は一瞬の快楽を覚える。

「私が、この世からいなくなったなら、どうする？」

「そんなこと、考えたこともないな」

「じゃあ、考えて。今、すぐ」

決して脅迫するような声ではない。任意でありながら、しかし私が彼女の頼みを断れないことを彼女自身も知っていて、そうやって発した、少し卑怯な声色だ。私は自分の顎に手を当てる。彼女が消えたら、どうなるか。どうするか。雪の下の国での出来事とは違ふ。あれは、眼の前からいなくなっただけだ。視界に入らなくなっただけだ。彼女がどこかにいると確信していたから、私は何の不安もなく彼女を捜すことができた。けれど、それとは違う。彼女が、世界のどこにもいなくなったなら？ 私は、どうする？ 単純に、死ぬか？ 彼女の側にいることが唯一無二の存在意義である私にとって、

彼女がいなくなることは死に等しい。ああ、陳腐だ。とても陳腐だ。大切な人がいなくなったから、後を追う？ 月並みにも程がある。

そんな答えで彼女が満足するとは思えない。もっと、気の利いた答えはないだろうか。彼女もきつと、捻りの利いた答えを求めている。

彼女は――私もそうだが――お世辞にも素直とは言えない。言いたいことをはっきりと口にするタイプではない。いつだって歪曲して伝える。ストレートな言葉が一番心に響くと知っていながら、それができない、不器用な人間だ。急旋回する戦闘機のように、私たちは言葉のドッグファイトを繰り返している。面倒くさいコミュニケーションである。でも、その分、噛み合ったときは、素直な者同士では決して得られない、極上の一体感が得られる。互いの機銃がお互いの機体を捕らえたとき、私たちは心臓をライフル弾で貫かれ

たときのような、痛烈な感動を覚える。ああ、私たちは繋がっている、と。私たちは曲がりくねった複雑な道を歩きながら、低確率で確かに出会った運命の二人だと。

「それでも、君を捜すかな」

「いないと分かっているのに？」

「うん」

「あなたは死なない。飢えることも歳をとることもない。永遠に、果てしなく長い時間を、私を捜して過ごすの？」

「うん」

「馬鹿らしいとは思わない？」

「思うかもしれない。君がいなくなつて、三日目あたりに、沈む夕日を見ながら『どうして、自分はこんなことをやっているんだろう？』って疑問に思うかもしれない。でもね、思い出があるから」

「私との？」

「そう。君の姿と声と——私が目にした耳にした肌で感じた君の姿が、自分の脳の中に保存されている限り、君を捜し続けるよ。捜し続けるのは辛いけど、捜さないのはもっと辛い」

特徴のない道(6)

「馬鹿ね。あなたって本当に馬鹿」

「でも、そんなふうにしたのは君だろう？」

「そう。だから私も同じ」

海岸線を歩いていると、岬の影から橋が現れた。コンクリート製の橋である。ぶつとい足で海底に立ち、はるか彼方の水平線まで伸びている。きつと、別の大陸に続いているのだろう。私は橋を指差して、彼女を見た。彼女は頷いた。一言も交わさずに合意がなされた。橋を渡ろう。別の大陸に行こう。

芸術的なまでに真っ直ぐ伸びた橋だった。アスファルト舗装の二車線道路になっていて、黄色いセンターラインが途切れることなく続いている。造られたばかりという訳でもなからう。太い足には無数のフジツボが張り付いている。ずっと昔からここにあって、人々の旅路を見守ってきた——そういった風格がある。例えるならば、屋久杉の老樹のような威厳だ。

やあ、通るのかい？ 橋の付け根に立った私たちに、橋が語りかけてくる。ええ、通らせてもらいます。あんたら人間のようなだが、人間じゃないね？ 分かりますか？ 分かるとも。わしはこの場所で星の数ほどの人間を見てきたんだ。その足音をこの身に刻んできたんだ。橋を渡る奴がどんな人間なのかなんて、一発で分かるよ。あんたらの足音は大地を踏み慣れていない。ずっと長い間、空の高くにいたような、ぎこちない音だ。さすがですね、その通りです。この大陸には飽きたのかい？ いえ、そういう訳ではありません。あなたの姿を見かけたから、渡ってみようと思っただけです。なるほど。真っ当な理由だ。誰にも後ろ指を差されることのない、真摯な言葉だ。けど、本当は少しだけ、この大陸に未練を感じている。違うかい？ 当たっています。隠し事なんてできませんね、あ

なたには。引き返しても、構わんよ？ わしはいつまでもここに
いる。ええ、その提案はとても魅力的ですけど、もう決めたこと
から。そうかい。ええ。なら、行きな。徒歩なら一週間もあれば隣
の大陸に着くだろうよ。ありがとうございます。

私と彼女は踏み出した。

特徴のない道（7）

「この世界にはいくつの大陸があるんだろう」

あえて、独り言のように呟いた。何かしらの意図があるわけではない。ただ、何となく、直接彼女に聞くのがはばかれた。なぜだろう。自分でも分からない。何となく、としか言いようがない。彼女に質問したところで彼女が気分を害するとも思えないが、今の私は何故か、彼女にはつきりとした自分の考えや疑問をぶつけることに怯えていた。

「いくつあって欲しい？」

独り言はちゃんと彼女に届いた。それがありがたくもあり、申し訳なくもあった。キャッチボールで余所見しながら投げた球を、際どいところでキャッチされた気分だった。

「そうだなあ、三つ以上十個以下、ってところかな」

「平均的ね」

「今、私たちは大陸から大陸へと渡っている。少なくとも、この世界には二つの大陸があることが立証されたわけけれども、君はこの世界にいくつの大陸を創ったんだい？」

「知りたい？」

「知りたくないと言えば嘘になる。けど、君が教えたくないのなら、言わなくていい」

「じゃあ、言わない」

お互いに軽やかな笑いを起こす。とても壮大なようで、とても小さな会話だ。どうでもいいようで、どうでもよくない。その距離感が、私たちには一番合っていた。

海鳥の鳴き声。ちらちらと海面で反射する太陽の光。潮風。これでもかというほどの海が、目の前に広がっていた。その中を、一本の橋が貫く。橋は人工のはずなのに、海という大自然に馴染んでい

た。海の一部になっていた。その上を歩く私たちもきつと。私たちは自然と一体化していた。森を歩いたときもそう。荒野を草原を歩いたときもそう。私たちは旅をしながら、自然と対話し、自然と調和していった。この世界に自分自身を溶かしていった。

特徴のない道（8）

橋の上を歩き続けて五日目の朝に、彼女はとつにこう切り出した。「ろくでもない話をしましょうか」

切り分けられた空の一つで、稲光が走った。音はしない。雲の壁のクッションに音は吸収されたようだ。突き刺すような鋭い光だけが頭の上で交差した。

「誰かが、誰かを救おうとした話」

彼女は波音に負けそうなほどの儂い声で、静かに話し始めた。

とても豊かな国がありました。山裾には果樹園が敷き詰められ、平野部には見事な田園風景が広がっています。畑を耕す農民たちの顔は幸せそうで、課税に苦しまされている様子もありません。民家の軒先では赤子が寝ている揺り籠を揺らす若い母親の姿が見えます。その隣ではちよつと肥満気味の猫が丸まっていました。穀物をつまむスズメが庭にいてもぴくりとも反応しません。

見渡す限りに広がった田園の真ん中には、強固な城壁に囲まれたお城がありました。狭間胸壁の隙間では見張りの兵が目を光らせています。鉄兜に鎖帷子。とても強そうな兵士です。彼らは徴兵されたのではなく、自ら志願して兵士になりました。それだけ、自分たちの国を愛していたのです。自分たちの手で国を守りたいという使命感に燃えていたのです。

厳しい門から城壁の中に入ると、そこには眩いほどに輝く白亜の城。高名な建築家によって設計されたこの城は、見た目ばかりではなく、防衛の拠点としても優秀でした。中庭は多層構造になっていて、本城に入るためにはいくつもの門をくぐらなくてはなりません。当然、門前や壁の上には兵士たちが並んでいて、怪しげな行動をしようものなら、熟練された弓兵たちの十字砲火によって、あつと言う間に針ねずみになってしまいます。

ようやくと本城の前に辿り着くと、重そうな全身甲冑を着込んだ騎士たちが出迎えます。鍛えられた剣の切っ先を顔の前に掲げ、来客に敬礼します。本城の扉にはこの国の紋章が描かれていて威厳たっぷりです。一歩中に足を踏み入れれば、そこは絢爛豪華に装飾された見るも麗しい荘厳な宮廷。足元には遠くの国から輸入してきたふかふかの絨毯。土足で踏むのが憚られるほどです。天井には無数の蝋燭を差した金ぴかのシャンデリア。壁には貴族たちの旗が所狭しと掲げられています。

エントランスホール中央の階段から二階に上がり、王の間へと向かいます。長い廊下を歩き、扉の前に辿り着くと、扉の前にいた召使や女中が深々と頭を下げます。王と謁見するだけの人物に対して、召使たちは礼儀を欠かしません。よく教育がなされています。そういえば、この国には奴隷の姿が見えません。そもそも、必要ないのでしょうか。誰もが望んで労働をしているこの国に、脅迫された労働力など不要です。

護衛の騎士が扉を開きます。赤い絨毯を歩み行けば、王の座があり、そこにこの国の王様が座っていました。情熱と闘争の色である赤色のマントを羽織り、頭にはいくつもの宝石が施された金の冠。そして腰にはこの国で一番の職人に作らせた名剣が提げられています。王の両隣には精鋭兵が直立不動のまま待機していて、来客に対して軽い威嚇をしています。この場所で余計なことはさせない。そう言っているようです。

「よくぞ来てくれた、我が盟友の息子よ」

特徴のない道（9）

「して、今日は如何様かな？」

赤絨毯にひざまずく来客——二十歳にも満たない青年です。顔は精悍そのもので、しっかりと鍛えられた体つきをしています。大人の仲間入りを渴望するように無理に伸ばした口髭がなんとも微笑ましく映ります。王様は目の前の青年の幼年期の姿を思い浮かべて、薄い笑みを豊かな髭の奥に滲ませました。あんな小さな子がもう、こんなに立派になって。王様は我が子のように青年のことを可愛がっていました。なので今日も、青年がこの国に立ち寄ると知って、謁見をととても楽しみにしていました。

「王様」

青年は顔を上げました。無表情でした。おや、と王様は思いました。青年の冷たい瞳を見て、違和感を覚えます。この子は、こんな目をする子だったろうか。いや、と王様は自分自身をたしなめます。目の前にいるのはもう子供ではないのだ。自分と同じ大人なのである。いつまでも無邪気な笑顔を張り付かせてはいられない。きつと、大人になる過程で色々と苦労したのだろう。自分と同じように。

「何かな？」

「山向こうの国の王女についてはご存知ありませんか？」

「山向こう？ はて？」

「“白面の姫”という言葉に覚えは？」

「おお！ それは耳にしたことがある。確か不治の病に冒され、長らく床に伏せている姫のことじゃな。生まれつき身体が弱く、城壁の外はおろか、部屋の外にも出た事がないとか。まるで死人のように顔が白いため“白面”と呼ばれているらしいの。もしや、それが山向こうの王女なのかな？」

「その通りでございます」

「なるほど。ふーむ、気の毒じゃが、生まれつきの身体の弱さはど

うにもならんからの。それで、その王女がどうかしたのか？」

「先日、白面の姫が息を引き取りました」

「なんと！……気の毒に。噂ではまだ二十歳にもなっていないかったとか——そう、ちょうどお主と同じくらいの歳だったと聞く。恋の一つのもせずに召されてしまったか」

「いえ」

青年は立ち上がりました。長身痩躯の身体がすっと持ち上がりま
す。王様はちよつと眉をひそめますが、何も言いません。

「恋はしております」

「ほう？　白面と逢瀬を交わすとは、酔狂な若者もいたもののだ」

「ええ」

剣を引き抜く音。王様はすぐにはそれがどこから発せられたのか
分かりませんでした。両脇の精鋭兵たちが声を上げます。青年は目
にも留まらぬ早さで、二人の騎士を切り裂きました。切っ先から血
飛沫が舞います。王様が事態を理解したときには、すでに喉元に剣
を突きつけられていました。

「お、おぬし、一体」

「二人は恋をしていました。とても情熱的で苛烈で——この世の全
てを犠牲にしても二人の愛が成就すればいいと願うほどに、強く、
激しく、二人は心身で結ばれていました。けど、彼女は病気でした。
どうにか治せないかと、恋人は医療技術の発達した東の国から医師
を呼び寄せました。しかし、医師は黙って首を横に振りました。彼
女も、分かっていました。もう治らないのだと。もう、自分の命は
長くないのだと。恋人は泣きました。一晚、二晩、いつまでも、月
がその姿を新月から三日月に変えるまで、延々と。そして彼女は死
にました。嘆き苦しみ悶えながら死にました。恋人は発狂しそうで
した。そんなとき、酒場で偶然こんな話を聞きます。彼女の病と同
じような症状をとある国で見たことがある。旅商人の話でした。恋
人はその話を詳しく聞き、それから数日人々に話を聞きまわって、
やがて一つの事実に行き着きます——」

「お姫様の病気の発祥地は王様の国なんだね。それで青年は復讐をしに来た、と」

「……オチを読まないで」

彼女は――物語の中ではなく、私の隣にいる彼女は、頬をふくらませた。

「でも、その通り」

「誰かを救おうとした話、か。一体、誰を救おうとしたのかな」

「誰だと思う？」

「優等生的な答えをするならば、当然お姫様だろうね。でも、君が求めている答えは違う。そうだろう？」

「正解なんて求めているない。あなたの考えが聞きたい」

「そうか。じゃあ、きつと青年は自分自身を救おうとしたんだろうね。許されなかったんだろう、天国のお姫様に」

「ひねくれ者の答えね。でも、私もそう思う」

そうして私たちは橋を歩き続け、七日目の夕方、ようやく次の大陸に辿り着いた。

学び舎における若人たちの咆哮とその理由（1）

別の大陸に移ったからといって別段に変わったことはなかった。

大地があり、山があり、空がある。風が吹き、砂埃が立ち昇って、木々の葉が舞い落ちる。それは世界中のどこに行ったって変わらないう。変わるのはいつだって自分だ。話す言葉が違ったり、文化が違ったりするのは些細な変化だ。大地の底に眠る巨大な鉦脈や、空を蠢く雲の集団からすれば、本当の意味でどうでもいいことだ。

しばらく進むと、舗装された道が目についた。半分砂に埋もれているが、確かに人間の手が加わった跡がある。私と彼女は話し合わせることもなく、その道を辿ることにした。道は数キロほど続いた。進めば進むほど道が綺麗になっていく。道の途中で民家を見かけた。私は――期待と不安を持って――その民家の窓を覗いて見た。人間がいた。生物がいた。音だけではない。ちゃんと動いて息をして、話していた。民家の中の人間がこちらに気付いて、私はすぐに視線を外した。嬉しいという気持ちはそれほど高くはなかったが、ともあれ現在の狭義的世界には人間や動物がいるらしい。鳥が道端で麦の穂をついばんでいるのを見て、私は実に微笑ましい気持ちになった。

さらに進み、道は完全に“道路”へと変わった。白いラインが引いてあって、両側には縁石も置かれている。車が一台、後ろから私たちを追い抜いていった。周りには鉄筋コンクリートの建物がちらほら現れて、近代的な都市の風景になっていく。さらに数キロほど道路を歩き続ければ、完全に“都市”の中に入った。自動車が道路を占領し、歩道には人間たちが溢れ、装飾された建物が隙間なく敷き詰められている、というありきたりな――だけでも私にとっては貴重な光景だった。久しぶり、という感覚は私にはないが、彼女によって植え付けられた知識が、これが人間のあるべき姿だと言っている。正しいかどうかはともかく、言っている。

「お願いします、入れてください！」

声がした。私よりも若い男性の声だ。私と彼女は声がした方向に顔を向けた。そこでは、青年が警備員らしき男に何かを頼み込んでいた。警備員の後ろには門。厳しい煉瓦造りで、二人が言い争いをしている間にも、何人もの人間が門から出たり入ったりしていた。門をくぐる人たちは皆裕福そうな服を着ていた。かたや、警備員と話している青年の服はみすばらしい。乞食とまでは言わないが、明らかに貧乏だと分かる服装だった。

「何度言ったら分かる。学校に入りたかったら金を持ってこい」

初老の警備員は青年を通せんぼするように胸を張っていた。片手に警棒を握り、もう片方の手は腰のホルスターを触っている。

「だからお金がないんです。図書館を利用したいだけなんです。お願いします」

「駄目だ。これ以上門の前で騒ぐようなら、武力行使も厭わんぞ」
そう言われて、青年は奥歯を噛み締めながらすすり立ち去った。私と彼女はその一部始終を少し離れたところで見ていた。

「面白そうね」

彼女が言った。

「話を聞いてみる？」

「わざわざ面倒事に首をつっこむのかい？」

「だって面白そうじゃない」

反論の余地はない。確かにちょっと興味をそえられるやりとりだった。私と彼女は門から離れていく青年の後を追った。

学び舎における若人たちの咆哮とその理由（2）

青年に追いつき、さっきのやり取りを聞いて興味が沸いたことを話した。それで、少し話を聞かせてくれないかと持ちかけると、青年は目を輝かせて二つ返事で了解した。立ち話も何だからと、近くにあった喫茶店に入ることにした。外装はコンクリート建築だが、中に入るとシ木造の西洋カフェ風の様相になっていた。木目模様の壁にはセピア色の写真がいくつもかけられている。私たちは外の通りが見える窓際の席に座った。肥満ぎみではあるが優しそうなマスターにコーヒーを三つ注文する。すぐに粉を挽くカリカリという音がカウンターから聞こえ始めた。ここは注文を受けるたびに豆から煎れる店らしい。私たちの他にはいかにも常連といった感じのおじさんが一人カウンターに座っているだけだった。落ち着いた雰囲気の良い店だ。

「あなたは学生さん？」

彼女がまず口を開いた。

「いえ、違います。今はまだ」

「まだ？」

「自分はある学校に入りたいんです」

「でも入れない」

私が横から指摘した。青年は頷く。

「お金が必要なんです。それも大金です。大人が三年働いてようやく得られるような、馬鹿馬鹿しいほどの金額です」

「どうしてそんなにあの学校に入りたいの？」

「それはもちろん、勉強がしたいからです！ 他に理由がありますか！」

青年は前屈みになって咳き込むように言った。その迫力に押されて、私は思わずのけぞった。椅子に背もたれがなかったら倒れていたかもしれない。

「学校は他にもあるんじゃないの？」

「あります。けど、あの学校ほどの設備が揃った学校は他にはありません。少なくとも、この大陸では一番の学校です。どうせ勉強をするなら恵まれた環境の中でやりたいと思うのは、自然なことでしょう？」

「ええ。でも、お金が足りないなら、妥協するのも必要じゃないかしら？」

「妥協？」

青年は眉を思い切り曲げた。眉間にグランドキャニオンよりも深い溝が刻まれる。

「あなたは、自分が一生をかけようと思っていることに、妥協するのですか！ お金が足りないなんていう些細な理由で、自分の夢を諦めるのですか！ 信じられない！」

彼女はちらっと私を見た。私も彼女を見た。なるほど、変わっている人間だ。でも、だからこそ面白い。私と彼女はさらに青年に興味を持った。

青年が興奮し始めたとき、タイミングを見計らったように、マスターがコーヒーを運んできた。コーヒーの香ばしい匂いが鼻腔をくすぐる。青年もその匂いを感じて浮き上がった腰を沈ませた。私たちは思い思いにミルクや砂糖を入れた。ちなみに私は砂糖無しのミルクのみだ。白いカップを持って口にベージュ色の液体を含むと、ほどよい苦味と爽やかな酸味が舌の上に広がった。美味い。

「マスター、このコーヒー美味しいですね」

素直な感想をカウンターにいるマスターに言った。マスターは丸い顔を綻ばせて「ありがとうございます」と頭を下げた。彼女と青年も同じ感想を持ったようで、私たちはしばし無言でコーヒーを味わった。

「でも、さっきみたいに駄々をこねていたって、何の解決にもならないんじゃない？」

半分ほど飲んだところでまた彼女が言った。

「たしかに法外な金額を要求する学校も悪いけど、それに対して真正面から突っかかっていくのも子供っぽいとは思わない？」

「そんなこと、言われないでも分かっています」

青年はいささか乱暴にカップを受け皿に置いた。コーヒーがこぼれそうになる。

「だから今、有志たちと計画を練っているんです。自分と同じで勉強がしたくてもお金がない若者がこの街には沢山いますからね」

「計画って……どうするつもりなの？」

「それは話せません。こうして話を聞いてくれるのは嬉しいですけど、自分はまだあなた方のことを完全に信用したわけではありません」

「まあ、それもそうよね」

彼女は肩を落とし、コーヒーを一口啜った。

その後は軽く世間話などを交わして、青年と別れた。私と彼女は喫茶店の前に立ち、青年の後ろ姿を見送った。背中が見えなくなつてから、「さて」と彼女は手を合わせた。

「このままじゃ不公平よね」

「そうだね」

「学校側の話も聞きにいきましょうか」

私たちは先ほどきた道を引き返して、学校まで戻った。

学び舎における若人たちの咆哮とその理由(3)

学校の門まで来て中に入ろうとすると、やはりあの警備員に止められた。

「あなた方は何ですか？ 許可のない人を中に入れるわけにはいきません」

「許可？ あなたは何を言っているの？」

彼女は警備員の瞳をじっと見た。その瞬間、警備員の瞳がぐるんと一回転して、次の瞬間にはもう敬礼の姿勢をとっていた。

「これは失礼しました。どうぞお通りください」

そうして私たちは何の苦労もなく門をくぐった。そういえば、と私は思い出す。あの、雪の下の国から出るときも彼女は同じようなことをした。女性検査員に少し話しかけただけで、地上へのエレベーターの使用を許可された。不思議という感覚はとくに失われている。この世界において彼女にできないことなどない。

門の中は丁寧に入入れされた庭園になっていて、正面には赤煉瓦の学舎がそびえていた。生徒や教師たちは庭の中で本を読んだり、昼食を食べたり、何かを真剣に話し合ったりしている。中には何百ページもある本を使って熱弁を繰り広げている生徒もいた。それを真剣な顔で見つめ、ときどき反論を投げたりする生徒も。学校という施設について特別詳しいわけではなく、まだこの学校の一割すらも見えてはいないが、何となくあの青年の言っていることが理解できた。確かに、ここは良い学校だ。

私たちは事務の人からこの学校の責任者の居場所を聞き、そこへ向かった。中庭を抜け、階段で最上階まで上がる。窓から柔らかな光が差し込む静かな廊下の奥まった所に扉があった。扉には「校長室」というプレートが張ってある。彼女がノックすると、中から「どうぞ」という声が聞こえた。私たちは校長室の中に入った。

部屋の中には簡素ながら歴史の感じられる机があり、そこで頭頂

部がだいぶ薄くなった老年の男性が書類に目を通していた。部屋の中央には向かい合ったソファもある。私たちの姿を見て校長は眉を上げた。

「何だね、君たちは。何か私に用かね？」

書類から手を離し、机の上にあった老眼メガネをかけた。机を回り込んでこちら側にやってくる。

「お話を聞きにきました」

彼女が臆面もなく言う。校長は「ふむ」と唸って、私たちにソファに座るように促した。自分は部屋の奥へと向かう。すぐにお茶を運んできて、私たちの前に置いた。

「君たちはどうやら一般常識では測れない人物のようだね」

「どうしてそんなことが？」

私は訪ねた。

「伊達にこの学校の校長はやっていないよ。人を見る目はあるつもりだ。さて、何の話を聞きにきたのかな？」

私たちと向き合って校長もソファに座る。

「この学校は入学するのにとても沢山のお金が必要だと聞きました」
彼女が言う。

「学校の維持管理にお金がかかるのは理解できますが、本当にそんな大金が必要なのでしょうか？」

彼女の単刀直入な質問に、校長はお茶をすすって一拍置いた。

「必要ないさ。本来なら現状の入学金の半分——いや、四分の一程度でもこの学校はやっていける。国からも援助が出ているし、研究機関としての収入もあるからね」

「ならば、なぜ？」

「……君たちは“本気”ってどういうことだと思いかね？」

私たちは横目でお互いを見た。

「とても抽象的な質問ですね。すぐには答えられそうにありません」
「うん、まあ、そうかもな。私はね——私たちはね、この学校に入学する資格は“学力”だけではないと考えている」

「経済的に恵まれている必要がある、と？」

「違う。私たちは入学の際には生徒たちがどれだけ勉学に対して“本気”かどうかを問うている。入学金の額は、それを図るためのものだ。本当に、本当に勉強がしたくて、この学校に入りたいのなら、どんな大金でも用意すべきだ。自分の身体を売ってでも、家族を質に入れてでも、とにかくどんな手段を使っても金を得るべきだ。それくらいの気構えがない者は、この学校に入れるわけにはいかない。その資格がない」

教師らしく雄弁ながら静かに語る校長の言葉には、強い覚悟が感じられた。教わる方も本気なら、教える方も本気なのだと。一切の妥協など必要ないのだと――そう、それはあたかも、あの青年の熱情のような覚悟だった。

「なるほど、立派な考えだと思います」

彼女は営業的な笑顔を浮かべて頷いた。

「ありがとうございます。とても参考になりました」

彼女が立ち上がったので、私も腰を上げ、一礼してから校長室の後にした。

私たちは黙ったまま学校から出て、先ほど青年の話を聞いたカフェに戻った。出てすぐ戻ってくるのはちょっと恥ずかしかったが、あの美味しいコーヒーの匂いをもう一度嗅ぎたくて、半ば無意識に入ってしまった。

私たちは同じ席に座る。コーヒーを注文する。丸顔のマスターは怪訝な顔ひとつせず「分かりました」と返事をした。

「で？」

彼女はいたずらっぽい顔をして私に訪ねた。

「どっちに味方する？」

学び舎における若人たちの咆哮とその理由（4）

外の通りでは貧富も男女も老若も関係なく、多種多様な人々が歩いている。私はそれを眺めながら思考を巡らせた。ややつて、答える。

「間違っていると言えどどちらも間違っていると思うし、どちらが正しいかと聞かれればどちらも正しいと思う」

「そうね」

方法論や感情論はともかく、どちらも本気なのだ。青年は本気で学びたいと思い、学校側は本気で教えたいと思っている。その間に“金”という至極分かりやすい壁が立ちはだかっている。学校側は、強引にでもそれ乗り越えて来いと言っている。青年たちはそれを横暴だと言い、壁を壊してしまおうとしている。

第三者から見ればどっちもどっちだということは簡単に分かるが、本人たちは自分の考えが絶対に正しいと信じて疑っていない。お互いが少しずつ譲歩すれば解決する問題なはずなのに、あいにくとお互いに“妥協”を許さない人間たちなので、ここまで話がこじれてしまったのだ。

「一応君に聞いておきたいけど、どちらにもつかないという選択肢はないのかい？」

「ないわね。そんな日和見で卑怯な選択肢は許さない。関わろうと決めたのなら、最後までやり遂げるべきだわ」

「そうだね。変なことを聞いてごめん」

「で、結論は？」

コーヒーが来た。私と彼女は一口ずつ啜る。ああ、美味しい。こんなにも美味しいコーヒーを飲みながら、彼女と他愛のないようにとてもプレシヤスな話をしているこの瞬間が、この上もなく幸せだった。

「青年側につこうと思う」

「どうして？」

「理知的に考えても結論が出なかったから、最後は結局自分の気持ちに従ったよ。どちらかと言えば青年たちの方に感情が移入しやすかった」

「そう。じゃあ、決まりね。さっきの子を探しましょう」

私たちは喫茶店を出た。ちなみにコーヒーの料金は払っていない。なぜなら、彼女だから。他に理由なんてない。

私たちは青年を捜した。

喫茶店を出た時点でもう夕方になっており、青年を見つけ出したときには完全に夜になっていた。閉店間際の本屋で立ち読みをしていた青年は、私たちの姿を見て拒絶とも歓迎ともつかない微妙な顔をした。本屋の店員の迷惑そうな顔を背中に受けながら、私たちは本屋を後にする。

三人並んで歩道を歩く。街はネオンサインと自動車のライトに彩られていた。ガードレールの向こうを殺人的な速度で自動車が走り、歩道にはこの時間帯を待ち構えていた夜の住人たちが嬌声と笑い声を上げながら練り歩いている。

「あなたに味方することにしたわ」

「どうしてですか？」

青年は懐疑的な視線を私たちに向けた。無理もない。突然話しかけてきて、突然力を貸すと言われたのだ。疑いたくなるのも当然だ。「あなたの考えに共感したから、では駄目かしら？」

「駄目ですね。あなた方が学校側のスパイであるという疑いは晴れません」

彼女は路地裏を吹き抜ける一陣のつむじ風のような笑みを浮かべた。すれ違った男が思わずこちらを見返したのを気配で感じた。白い蛍光灯の光に照らされた彼女の横顔は蠱惑的だ。男女問わず、誰もが彼女のことを振り返った。

「素敵ね。あなたはとても本気の目をしている。こんなにも情熱的

で精力に溢れた人間が、この世界に生きていることが、私はとても嬉しい」

「はぐらかそうとしても無駄ですよ」

「そう」

そして彼女は青年と唇を重ねた。私は無様にも「あっ」と声を漏らしてしまった。周りの通行人たちも一瞬足を止めた。ゆっくりと唇を離し、彼女は青年の二の腕を握った。青年は呆然として何が起こったのか分かっていなさそうな顔だった。

「あなたの仲間がいる場所まで連れて行って」

「はい」

青年は従順な奴隷のように頷いた。

私たちは青年の言う有志たちが集まる安アパートに向かった。

学び舎における若人たちの咆哮とその理由(5)

当然、歓迎はされなかった。青年の仲間——有志たちは全員で十人ほどいたが、その誰もが部屋に入ってきた私たちに思い切り怪訝な顔をした。

「何だ、そいつら」

頬ににきびを浮かせた青年と同じような年恰好の男が、今にも殴りかからんばかりの睨みを利かせて青年に聞いた。青年は言い訳をしようとしたが何も思い浮かばず、口を半開きにしたまま固まってしまった。動かなくなつた青年を押しつけて彼女が一步前が出る。四畳半の部屋に押し込められた若人たちの前に立つ。

「こんにちは。お邪魔します」

天使がかき鳴らすハープのような声が部屋に満ちた。女性の水着姿のポスターが壁に貼られ、床にはコンビニのゴミが散乱し、机の上には本と吸殻が乱雑に置かれている安アパートの部屋には、明らかに不釣合いな声。しかし、もうこれで大丈夫だ。私と彼女は彼らに受け入れられた。彼らは手の平を返すように私たちを彼らの輪の中に招き入れた。

「みんな、今日自分は最後の交渉に行ってきた」

輪の中心に居座る青年が有志たちの顔を見回した。有志たちはそのきらきらした瞳に火花を散らしていた。私はそれを見て自分が場違いな存在だと思い、少し居心地が悪くなったが、彼女の方を見ると、彼女は楽しそうに笑っていた。

「結果は——もう分かっているとは思うが——駄目だった」

「じゃあ、いよいよ？」

有志の一人が身を乗り出した。

「ああ、明日だ。明日、計画を実行する」

「待ってました！」

拍手喝采が沸き起こる。有志たちは立ち上がり、腕を振り上げた。

興奮して意味もなく壁を殴ったり、足を踏み鳴らしたり、窓の外に顔を出して叫んだりしている。そんな彼らを一人冷静な青年がたしなめた。鼻息を荒げたまま、彼らは床に腰を下ろす。

「いいか、みんな。もう十分に話したと思うが、確認しておく。自分たちは明日の朝、門の近くのビルに用意した貸し部屋に待機し、門が開くと同時に学校に突入する。当然警備員が立ち塞がるだろうが、そこは強行突破だ。各々用意した武器で対抗してくれ」

有志の一人が金属バットを肩にかけた。ゴルフのクラブを持って
いる者もいる。何を考えているのか、ハンディタイプの掃除機を持
っている奴もいた。

「門を突破したら二手に分かれる。Aグループは校長を探して拉致
する。Bグループは図書館二階の展望テラスを占拠だ。それぞれの
目的を果たしたら合流だ。その後は――自分にまかせてくれ。何か
質問は？」

「それで本当に俺たちはあの学校に入れるようになるんだな？ 好
きなだけ勉強ができるようになるんだな？」

有志の一人が尋ねた。青年は力強く頷く。

「なら、何も言う事はない。あとはやるだけだ」

誰もが頷いた。彼らは無言で誓いを交わしていた。私はその青臭
いほどの熱情に気圧されそうになっていて、彼女はどのようなだろう
と私は横を見ると、彼女はやっぱり楽しそうだった。

明日の朝、例の部屋に集まることを確約して、ひとまずは解散に
なった。安アパートを後にして、私たちは夜の住宅街を歩いていた。
繁華街から離れ、すっかり街の賑わいは遠くなっている。静かな夜
が満ちていた。街灯の明かりに群がる虫の羽音が聞こえた。

「素晴らしいことね」

彼女は星を見上げて呟いた。

「何か一つのことによって全てを懸けようとする人間は、どうしてあかも
輝いてみえるのかしら」

「そうかな」

自分でもぶっきらぼうな返事だと分かった。恥ずかしくて頬が少し赤くなる。それに気付かない彼女ではない。彼女はくるっと身を翻し、意地悪そうな顔をして私を見上げた。

「嫉妬しているのかしら？」

「少し」

彼女に嘘をついても無駄だ。正直に答えた。

「キスをしたことに？」

「うん」

「私にとってはね、この世界に生きる人間たちは子供のようなものなの。母親が自分の子供に口付けをしたからって、何もおかしくはないでしょう？」

「私も君の子供のようなものなのかい？」

「いえ、あなたは違う」

きっぱりと否定された。

「私が手をかけた創造物の中で、あなただけは別」

「そう。でも言葉だけじゃあね。証拠が欲しいな」

彼女はころころと笑い声を上げた。我ながら露骨だとは思った。けど、そのときの私は必死だった。自分の存在意義の危機だった。私にとって彼女は特別であり、彼女にとっても私が特別でなければならぬ。だから、何かしらの行動で示して欲しかった。

「いいわ。今回のことがちゃんと“上手くいったら”、あなたが特別だという証拠を見せてあげる」

意味深な言葉だった。上手くいったら？ どちらにとって？ そもそも、今回のことは青年と学校の問題であり、部外者の私が手を出せるような問題でもないはずだが。

「考えなさい。あなたはこの世界の事象に頭を悩ましなさい。そうすることで、あなたはきつともっと成長する」

街灯の明かりに照らされた彼女は、人智を遥かに超越した美しさを持っていて、彼女がこの世界の創造主であり女神なのだと、改め

て確認させられた。

学び舎における若人たちの咆哮とその理由（6）

カッチコッチ。時計の秒針が静まり返った部屋に響く。コンクリート剥き出しの部屋の中に押し込まれた十数人の人間たちは、その時を待っていた。正門が開く七時まで、あと五秒、四秒、三、二、一……。

「ゴー！」

敵陣へ突入する軍隊のように、青年の合図で私たちは一斉に部屋を飛び出した。手にはそれぞれの得物を持っている。私たちは特に何も用意していなかったので、適当に公園から拾ってきた木の枝を持っていた。人を殴ればポキリと簡単に折れてしまいそうな貧弱な枝だ。そもそも人を殴るつもりなどないので、格好だけだった。

ビルの出口から門に目掛けて一直線に走る。全力疾走。さすがに若いだけあって有志たちの足は早く、私と彼女は出遅れてしまった。門を開けていた警備員は突然押し寄せてきた若者たちに驚く暇もなく殴り倒された。青年は気絶した警備員の懷から鍵の束を取り出した。若者たちは門の中になだれ込む。私たちも少し遅れて門をくぐる。

構内には、朝帰りの学生や専用の出入口から入ってきていた事務職員などがちらほら歩いていた。その誰もが若者たちの猛り狂った顔と、手に持った凶器を見て悲鳴を上げた。

「分かれろ！」

庭園の中央まで来て、昨日聞いた通りに、若者たちはAグループとBグループに分かれた。Aグループは校長を捜して校内へ。リーダーの青年を含むBグループは本校舎に隣接している図書館へと向かった。私と彼女はBグループに加わった。私たちは最初から物の数としてカウントされていないので、どちらについても良いと言われていた。

二階建ての大きな図書館だった。二階正面にはテラスがある。青

年は警備員から拝借した鍵を使って図書館の扉を開けた。中では司書や事務職員たちが本の整理などをしていた。悲鳴を上げて逃げ惑う彼らを、若者たちは追い掛け回したり武器で脅したりして、一人残らず捕まえた。全員を縄で柱に縛り付けると、若者たちは二階のテラスに集まった。Aグループの到着を待つ。

サイレンの音が聞こえた。警察が来たようである。青年はテラスの縁に足をかけながらチツと舌打ちした。数台のパトカーが門の前に停まり、中から警察官が出てきた。手には金属製の警棒、腰には拳銃。若者たちの持っている得物が玩具に見えるほどの、本格的な装備だった。特に拳銃は脅威である。

「Aグループはまだか！」

青年は苛立たしげに叫んだ。

「来ました！」

Bグループの若者の一人が答えた。本校舎の裏口から、校長を羽交い絞めにした若者たちが出てきた。抵抗する校長を引きずりながら、図書館へと向かっている。しかし警察官も図書館へと走っている。このままでは警察官の方が早く図書館に着いてしまう。

「まずいな……予想よりも警察が来るのが早かった」

青年は齒軋りした。手に持った廃材に力が込められる。それを見て、青年の後ろにいた若者の一人が何かを決意をした顔を見ると、いきなり走り出してテラスから飛び降りた。

「あととはまかせたぞ！」

二階から落下しながら、目を丸くしている青年にそう言うと、若者は下手くそな受身をとって庭園に降り立った。足を痛めたのか立ち上がるときにフラフラとよろめいていた。すぐに駆け出す。図書館へと迫ってくる警察たちに向かって。

若者は警察を食い止めようと、彼らの前に立ちはだかった。だが、たった一人の一般人が大勢の警察相手に何ができよう。あつと言う間に警察たちの波に飲み込まれて捕まってしまった。Bグループはまだ着かない。

そのとき警察へと特攻した若者を見ていたBグループ内の数人の若者が、同じようにして警察隊へと突っ込んでいった。鬨の声を上げながら武器を振りかざし、敵陣へと向かっていく姿はまるで戦場の兵隊のようだ。いや、もとい、ここはもう戦場なのだ。数人の若者たちの必死の抵抗を受けて、警察隊の足が止まる。

校長を連れたBグループがようやく図書館に入った。一階に待機していた有志が図書館の鍵をしめる。これで図書館は閉鎖された。数人の犠牲は出したものの、ここまでは計画通り。校長を拉致して、図書館を占拠した。

縄で手足を縛った校長をテラスまで連れて来る。青年は校長の姿を見ると、哀れみと侮蔑の交じり合った視線を向けた。校長を横に置き、青年は叫ぶ。構内にいる教師や生徒、警察隊に向けて。

「我々は勉強に命を燃やさんとする志義の学徒である！」

構内の全ての視線が図書館二階テラスにいる青年に注がれた。その後ろには同じ志を抱く若者たちと、やはり場違いな感じのする私と彼女。

「本日は諸君らに我々の主張と要求を聞いてもらいたく、この様な荒業をとらせて戴いた！　すでに幾許かの犠牲者は出てしまったようだが、不要に人が傷付くのは我々の望むところではない！　しばし、黙って我々の言葉に耳を貸してもらいたい！」

学び舎における若人たちの咆哮とその理由（7）

青年は熱い演説を繰り広げた。拡声器もなしに、よく通る声で、自らの主張を一昔前の書生のような堅苦しい言葉で伝えた。警察たちは、校長を人質に取られていることもあり、庭園の真ん中にかたまつて様子を見ていた。その他の教師や生徒も足を止めて青年の話に耳を傾けている。共感する者もいただろう。反発する者もいただろう。全く興味のない者もいただろう。ともあれ、今、青年の声が学校を満たしていた。

ある意味では、この計画はもう成功したと言ってもいい。これだけの騒ぎを起こしたのだ。もはや隠蔽は不可能だ。学校側がどう対処するのかは分からないが、少なくとも世間が黙っていない。青年のような若者がいるのだと世間が知れば、民衆が動けば、少しは事態は好転するだろう。今日この場で暴動に加わっていない貧乏な若者たちにとっては、降って湧いたような幸運である。

そして、その貧乏な若者たちの中には“勉強なんてどうでもいいから、世間体のために学校に入っておきたい”という者もいるだろう。それこそ校長が恐れていた事態である。壁が低くなったせいで望まない生徒まで入ってくる。学校の質が下がり、教育の質が下がる。教育に命を懸けている校長たちからすれば、腸が煮えくり返り、この世の全てを嘆きたくなるような事態だろう。

私は熱弁を振るう青年の背中を見ながら、あの喫茶店のコーヒーの味を思い出していた。今すぐ飲みたいと思っていた。なぜだろう。青年の話に興味がないわけではない。ただ、彼の話を中心に真ん中で聞くことが申し訳なかった。青年の隣にいる縄で縛り上げられた校長の姿を見るとチクチクと胸が痛んだ。だから私は現実逃避をするように、甘美なコーヒーの味を舌の上に再現しようとしていた。

彼女がこちらを不満そうな顔で見ているのに気付いた。彼女が不機嫌な理由が、私にも少しは分かる。私は青年に味方し、校長を哀

れみながら、現実にも目を逸らそうとしている。最低な男だ。しかし、今の私にはどうすれば良いのか分からなかった。どうすれば私自身の心のもやもやを取り払うことができるのか、なんにも良いアイデアが思い浮かばなかった。

ポケットに手を入れた。やさぐれた気持ちだった。彼女の不服を知りながら何もできない自分に苛立っていた。左ポケットに入れた手に何かが当たった。おや？ 私はそれを取り出してみる。紙マッチだった。あの喫茶店の電話番号と住所が書いてある。ああ、そういえばあの喫茶店の場所を忘れないように、帰り際に貰ってきていたんだっけ。今頃紙マッチなんて珍しいという気持ちもあった。煙草は吸わないが、マッチを携帯しているというのは何となくハードボイルドな感じがして良いものだ。私は手の平の上に置いたマッチをしぼし見つめた。もう一方の手には貧弱な――よく燃えそうな木の枝。

――いいわ。今回のことがちゃんと“上手くいったら”、あなたが特別だという証拠を見せてあげる。

私は隣にいる彼女の方に顔を向けた。青年の邪魔をしないように、小声で聞く。

「いいかな？」

彼女は私の問いに、ようやく不機嫌そうな顔をやめて、にっこりと笑った。

「どうぞ」

許可を貰った。私はマッチと木の枝を握り締める。

青年が演説をしているテラスを後にして、一階へと降りた。一階には拘束された司書と事務員、それと入り口を固めている有志たちがいた。有志たちは私の姿を見ると軽く目を見開いただけで、特に何も言っていない。一応私も彼らの仲間として見られているらしい。好都合だ。私は出来るだけ怪しまれないように、トイレを探

す振りをして一階の奥へと入っていった。

奥には、無数に並んだ本棚。流石は大陸一の学校の図書館である。蔵書の数も半端ではない。本棚の間には、眩暈がするほどの紙とインクの臭いが立ち込めている。私は適当な場所を探した。仕切りのついた机が置かれた閲覧スペースを見つける。

「ここでもいいか」

そう独り言ちて、私はさっそく近くの本棚から本を数冊つかみ取りし、閲覧スペースの真ん中へと投げた。本の種類なんて気にしない。題名なんて気にしない。この図書館にしかない貴重な資料や論文だとしても、構わず放り投げていく。一分も経たずに、閲覧スペースの真ん中に本の山ができた。

私はマッチを取り出した。火をつける。その火を木の枝に移す。炎が大きくなった。わずかな躊躇と罪悪感をその炎の熱に溶かして、私は燃える木の枝を、本の山の中に放り投げた。

学び舎における若人たちの咆哮とその理由（8）

「勉強は自由でなければならない！ 万人に等しく、貴賈や貧富など関係無しに、この世に生きる全ての人間たちに門戸が開かれていなければならない！ 経済的な裕福さで人間を選別しようなどという愚かな制度があつてはならない！ そのために我々は――」

「おい」

テラスにいた有志の一人が後ろから青年の肩を叩く。青年は仏頂面で振り向いた

「なんだ？ 今いい所なのに」

「何か臭うぞ」

「臭う？」

青年は鼻をひくひくと動かした。隣にうずくまっている校長も顔を上げ、嗅覚に神経を集中させた。テラスにいる有志たちも揃って鼻の穴を広げる。庭園にいる警察隊や、構内に残っていた学生や教授たちも異変に気付いた。

「なんか焦げ臭くない？」

「何かが燃えてる？」

波紋のようにざわめきが広がった。青年の演説を忘れ、誰もが異変の原因を探そうときよろきよると首を巡らせた。

「おい！ 煙だ！ 図書館から煙が出てるぞ！」

院生らしき学生が叫んだ。見ると図書館一階の窓から煙が漏れ出していた。青年や若者たちが驚きに目を剥いたそのとき、一階に待機していた若者がテラスへと駆け上がってきた。

「大変だ！ 本が――本が、燃えている！」

「何だと！」

青年たちは駆け出した。一階へと降りようとする。しかし一階にはすでに煙が充満していて、青年たちは階段の踊り場で二の足を踏んだ。

「何だ……これは」

手で口を押さえながら呟く。奥からは煙だけでなく赤い炎も見えた。青年は煙の向こう側に、事務員たちが柱に縛り付けられて取り残されているのを見た。炎からは離れているが、彼らは煙にいぶされて苦しそうに咳をしていた。

「ちくしょう、何でこんなときに……」

青年は半ば呆然として一階の凄惨な光景を見下ろした。吹き上がる熱風に前髪がゆらゆらと持ち上がる。

「おい！　どうする！」

「このままじゃまずいぞ！」

踊り場にいる若者たちは青年の指示を仰いだ。青年は名残惜しうに二階を見上げ、爪が食い込むほどに拳を握った後、カッと目を見開いた。

「まずは事務員たちを解放しろ！　出入り口の鍵を開けて外に連れ出せ！　残りの奴らは消火だ！　本を――知識の結晶を、一冊でも多く救え！」

若者たちは散った。彼らは焦っていた。勉学に一生を捧げようとしている彼らにとって、先人たちの英知が詰まった本は、全てが聖書にも等しいものだった。焼けてしまいう二度と読めなくなる本があるとしたら――そう考えただけで彼らの心は締め付けられた。事務員たちを外に放り出した後、彼らは水道からバケツリレーをして運んだ水を、燃え盛る炎にかけた。しかし焼け石に水とはまさにこのことで、バケツ一杯の水で図書館一階フロアの半分近くを覆った炎を消せるわけもない。それでも彼らは必死に水をかけた。一冊でも、一ページでも救えるのなら。熱気で顔の皮膚が焦げ、服が溶けるのも厭わずに、彼らは雀の涙ほどの水を巨大な炎の塊にぶつけ続けた。

構内の様子を確認するために、青年は一度テラスに戻った。庭園では解放された事務員たちが警察隊に保護されていた。青年は息を吐いた。拘束するために多少の乱暴はしたが、青年たちは誰かが無

為に傷付くことを望んではない。全員無事ならそれでいい、と青年は踵を返そうとして――その足を止められた。

校長だった。手足の自由を奪われた状態で、芋虫のように這いずりながら、口で青年のズボンの裾を噛んでいた。心許ない髪の毛が乱れて、余計に頭皮が目立った。

「待て」

裾を噛んでいるため籠った声になっている。

「何だ。あんたに構ってる暇はないんだ」

「下は火事なんだろう」

「そうだ。だから早く戻って消火活動を手伝う必要がある」

「この縄を解け。私も手伝う」

「駄目だ。あんたは学校側と交渉するための人質なんだ。もうしばらくここにいろ」

「頼む。私を自由にしてくれ」

しつこく食い下がる校長。

「駄目って言うてるだろう！ この、離せ！」

青年は強引に足を振って校長を振り払おうとした。しかし校長は離れない。年老いたこの男のどこにそんな力があつたのか。渾身の力を顎に込め、校長は青年の裾を啜えて離そうとしなかった。ごろごろとテラスの床を転がり、高級なスーツが埃と小石まみれになっても、絶対に。

「……こいつ！」

「お願いだ！ 私にも手伝わしてくれ！ 本たちを救わしてくれ！」

この図書館の蔵書は歴代の教授たちが世界中を飛び回ってかき集めたものなんだ！ この学校の歴史であり、財産なんだ！ 頼む！

本さえ救えれば私などどうでもいい！ 人質にでも人身御供にでもするがいい！ だからこの縄を解いてくれ！」

安っぽい言葉だと思った。必死な表情でそんな言葉を吐かれたところで、青年の心を動かすことはできない。それほど青年の今回の計画における覚悟は確固たるものだった。だがしかし――こんなに

も必死な一人の人間を放置できるほど、青年は薄情でもなかった。境遇と立場は違うとはいえ、自分と同じように本を救いたいと思っている人間を、このまま置き去りにできるほど、青年は無慈悲でもなかった。

青年は校長の縄を解いた。

校長は自由になると、すっと立ち上がり、髪の毛を軽く整えた。息を整える暇もなく口をつく。

「警察隊にも協力してもらおう」

「は？」

「被害を少しでも抑えるためには、人手は多い方がいい。自明の理だ。何か反論は？」

教授が講義中の学生に問いかけるように、校長は青年に言った。青年は想像した。もしも、この目の前にいる男が自分の先生だったのならば、本気で学ぼうとする自分に対して、きつと、本気で教えてくれるだろう。自分の覚悟をしっかりと受け止めてくれるだろう。そういう目をしている。

青年は自分の太股を殴りつけた。

悔しくて堪らなかった。情けなくて堪らなかった。

青年の胸中を寄生虫のように這いずり回っているそれは、物語に出てくる悪党が本当は悪い奴ではなくて、誰かに脅されて仕方なく悪行を働いていたのだと、最終回間近になって明かされたときのような、何とも形容しがた理不尽さだった。今まで憎んでいた相手が本当は憎むべき相手でないと分かって、今まで溜め込んでいた怒りや憎悪の矛先を失って、圧倒的な喪失感が体を覆う。青年は自分の心臓付近から大量に分泌される不快感をどうにか発散したくて、発散しないと狂ってしまいそうで、どうにかなりそうで――解決策として、青年は咆哮した。

「――！」

自分自身の愚かさを呪って、大声で叫んだ。警察隊が何事かとテラスを見上げた。一階にいた有志たちも一瞬手を止めた。

青年はひとしきり声を上げると、吹っ切れた顔になっていた。

「ちくしょう、馬鹿野郎！」

よく分からない野次を口走りながら、青年は一階へと駆け戻った。校長もその後を追った。警察隊も図書館内へとなだれ込む。構内にいた学生たちも集まってきた。学校にいる者たちが一丸となって、図書館の火を消そうとしていた。

学び舎における若人たちの咆哮とその理由（9）

門の外からも、騒ぎを聞きつけた人々が図書館へと駆けていく。

間もなく消防車が到着して本格的に消火活動が始まるだろう。私と彼女は人々の騒ぎを尻目に、校門から学校の外へと出た。火を付けた犯人が目の前を横切っているというのに、門の前に待機していた警察は何の反応も示さなかった。無能とは言うまい。彼らからしてみれば暴徒を鎮圧するために来たのに、いつのまにか火事を鎮火することになっているのだ。浮き足立つのも無理はないだろう。

「何の解決にもなっていないわね」

街を歩きながら彼女は言った。通行人たちは学校の方向から立ち昇る黒い煙を指差して色めき立っていた。

「結局、沢山の本が燃えて無くなっただけ」

「もともと、あの時点で計画は半分成功していた。放っておくのが最善だったのかもしれないね」

「でも、できなかった。あなたは私のご機嫌を取るために、無駄な行為をした」

私は思わず苦笑を漏らした。ぐうの音も出ないほど、その通りなのだ。私は彼女の不服そうな顔をどうにかしたかっただけなのだ。自己満足的で、しかも他人に迷惑をかけるという、平素だったら許されざる愚行である。

「けど許可は取っただろう？」

「あら、私に責任を押し付けるつもり？ 自分が未熟だから失敗したのに、あなたを信用して首を縦に振った私を責めるというの？」

「いや、そんなつもりでは——」

「最低ね。あなたは最低」

流石にズシンと来た。彼女の罵倒は聞きなれているが——それも少し悲しい——ここまで面と向かってはつきりと言われたのは初めてかもしれない。私は落ち込んでうつむいた。

彼女は職人に作らせた和紙のように薄い笑みで唇を切った。

「けど、あのまま何もなかったら、私はあなたに失望していた」

私は顔を上げる。

「未熟なのは悪いことじゃない。あなたはまだ発展途上なんだから。間違ってる、失敗して、当たり前。どんなに最低な人間だって、成長できるのなら期待できる。未来に明るい光を見出すことができる。でも、失望させる人間は駄目。何にも期待できなから。どんなに優秀でも、最善を目指さずに、自分が傷つく事を恐れて、妥協して、良い所取りするような人間に、私は絶対微笑みを向けない。こんな顔をして、話したりしない」

彼女は、女神だ。いや、もしかしたらもっと高次の存在なのかもしれないが、とにかく今の私にとってはそれが一番近い表現である。女神の微笑みを受けるといことが、どれだけ大変で、価値のあることなのか、今やっと分かった。生まれたときからずっと側にいて、私に協力してくれて、何気なく私を導いてくれたから、気付かなかった。私は、とんでもない存在と一緒にいる。とんでもなく素晴らしい存在と、共にいる。

「本を燃やす。火を消すために青年たちと校長たちが協力する。それで両者の間に何かしらのシンパシーが生まれる。狙いは悪くないわ。結果はともかくね。決して“上手くいった”とは言いがたいけれど――合格よ。あなたは私を満足させるだけの行動力を持っている。そして本当の意味で私の“特別な存在”になる権利を得たわ」

彼女は棒立ちになっている私にずっと近寄った。歩道の真ん中で、私たちはお互いの胸が触れ合うほどの距離で見つめ合った。すれ違った老婦人が何か言いたげな顔でこちらを見ていた。どうでもいい。私はこのまま彼女を思い切り抱き締めたいという欲求をどうにか抑え、彼女の言葉を待った。

細い桜色の唇から言葉がこぼれる。

「エルナコ」

「え?」

聞きなれない単語だった。

「私の名前。この名前を知っている人は、あなた以外に四人しかない」

「……エルナコ」

不思議な響きを持つ言葉だった。神々しいようで、何の変哲も無い庶民的な名前のようにも感じられる。ああ、なるほど、彼女に相応しい名前だ。彼女の雰囲気をよく表している。エルナコ。私は頭の中で何度も繰り返した。記憶ではなく、身体に刻み付けるように。決して忘れないように。

「さあ、そろそろ、この街を離れましょうか」

彼女は身体を離し、くるっとステップを踏んだ。髪の毛がそれに合わせてひらりと舞う。

「うん。……あの、えっと」

「呼んでいいのよ。そのために教えたんだから」

「分かった。……エルナコ」

間違いなく私は彼女——エルナコの特別な存在になったのだと、その瞬間感じた。名前を知り、名前を呼ぶことが、こんなにもこそばゆく、気持ちの良いことだとは思わなかった。私は彼女の背中を追いつながら、また彼女に一步步近付いたのだと、誇らしげな気持ちになった。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（1）

「もうどれだけ登ったかな」

頬を伝った汗が顎から落ちた。上着はすでにぐっしりと濡れていて、麓にいたときよりも数キロは重くなったように感じる。実際には、疲労も相まってそう錯覚しているだけだが。

「まだ先は長いわね」

彼女は平気な顔をしていた。人並み以上の体力がある、という訳ではなからう。彼女にはそもそも疲労という概念がないのだ。三十度以上の傾斜のある斜面を登り続けているというのに、汗一つかいていなかった。

「ふう」

熱い息が肺から出てきた。足はまだ動く。体力もまだ残っている。しかし、いつまで経っても見えない山頂に私はいささか不安になっていた。顎を上げて斜面の先に視線を向けても、雲の壁に遮られて何も見えない。永遠に続くのではないか。この世界ではありえる。

そんな不安が鎌首をもたげて私の心を侵食しようとしていた。

あの街を後にしてから数日間平野を歩き続けた私たちは、天を突くほどに聳える巨大な山脈を目にした。私は「高いな」と言い、彼女は「大きいわね」と言った。なので登ることにした。――特筆すべきことは起きていない。ただ私たちは目の前の山の雄大さについて感想を言い合い、結果として登山をすることになったのだ。理由なんてものは、二本足で自由に歩きまわれる時点ですでに説明されている。山があれば登るものだ。誰だってそうだ。人外に近い私や、創造主である彼女にとっても、それは変わらない。目の前に山があれば、登る。

山は予想以上に高かった。大きかった。休憩無しで登り続けても三日になるが、一向に終着点が見えない。

「今、少し後悔しているよ」

私は棒になり始めた足を持ち上げながら呟いた。

「登山はその後悔を味わうものでしょう？」

「そうだっけ？」

「山頂に着いたときの達成感なんて一瞬。それよりも、長々と登っているときに感じるそういった後悔や苛立ちのほうが、メインディッシュ」

なるほど、そうかもしれない。

「さあ、頑張つて。あとどれだけ続いているのかは分からないけれど、歩き続けなければいつかは山頂に着くから」

どうやら永遠ではないらしい。それでもしばらくは歩き続けることには変わらない。私は半ば自暴自棄になって早足で斜面を登った。

雲の壁をいくつも通り抜け、途中で雨に降られたり雷に打たれたりしたが、五日目の朝、何とか私たちは山頂に着いた。高山植物すら死滅するような酸素濃度と気圧だったが、もともと空の上で生まれた私にとっては産湯の中にいるようなものだ。疲労こそ濃いものの、私は久しぶりに吸う空の上の空気で肺を満たして、とても懐かしく健やかな気持ちになった。

山頂は濃霧に包まれていた。私と彼女はほんの一瞬の達成感を味わった後、しばらく山頂に留まって疲労を癒した。やがて太陽が南中へと登ってきて、霧も薄くなってきた。

「あ」

霧が晴れてきて、私たちがいる山頂よりも少し低い隣の峰に、何かがあるのに私は気付いた。ゴツゴツした遺跡のようなものが、峰の傾斜に合わせて張り付いている。どう見ても自然物ではない。私は未だに震える足でゆっくりと立ち上がった。風が吹き、霧が完全に飛ばされる。

霧の向こうから現れたのは町だった。ただし、この前までいた町とは文化的レベルが明らかに違っていた。建物は全て石造りで、自動車や電灯などといった近代的な物はどこにも見当たらない。小さ

く見える人々は洋服など着ておらず、一枚布を身体に巻きつけたような格好をしていた。建物の煙突からは煙が立ち昇っていて、山肌に残った霧と同化していた。

「こんなところにも人が住んでいるんだな」

「人間が住めないところなんてないわよ」

彼女も私の隣に立って町を見下ろした。

「行ってみましょうか？」

「せっかくだからね」

山頂から降り、私たちは隣の峰にある町に向かった。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（2）

歓迎されていないことにはすぐに気付いた。

街道を歩くと誰もが私たちを避け、半径十メートル以内には決して近付いてこようとしなかった。建物の陰に隠れてこちらを値踏みするように観察している者もいれば、露骨に嫌悪の眼差しを向けてくる者もいた。道の傍らで露店を開いている商人らしき男がいたので、私が興味を引かれて敷物の上の商品に目を向けると、男は途端に布をかぶせて商品を隠してしまった。

大人たちは下手に関わりとうとしないからまだマシとして、子供たちは無邪気ゆえに残酷だった。私たちが街の中心部の広場まで来たとき、突然目の前を握りこぶし大の石が横切った。私はとっさにエルナコを庇った。石が飛んできた方向を見ると、建物の屋根の上に数人の子供たちが立っていて、こちらに向かって石を投げてきていた。私が威嚇の目を向けると、子供たちは悪びれもせず逆にこちらを挑発するような顔をして、屋根伝いに走っていつてしまった。

「大丈夫？」

「ええ」

「何も悪い事はしてないのに、この歓迎ぶりは何なんだろう？」

「さあ？　石を投げつけられる理由は分からないけれど、私たちがこの場所で浮いた存在であることは確かね」

私たちはおよそ一般人らしくない者同士だが、格好だけは普通の人間だった。エルナコはやや古風ではあるものの、ヴィンテージ物と言って誤魔化せば十分通用するような服装だし、私もこの前会った青年とたいして変わらないような出で立ちをしている。

民族衣装——と言えば聞こえが良いが要は布切れ一枚——を着たこの町の民衆たちにとっては明らかに異質の存在である。こういった辺境の地でよそ者が邪険に扱われるのは珍しいことではない。田舎に行くほどコミュニティ意識が強くなるのはどこの世界でも同じ

だ。そう考えれば彼らの熱烈な歓迎にも納得できるが、納得できたからと言って、その排他的な態度に満足できる訳でもない。

「あんまり長居したくない場所だね。もう山を降りようか？」

「逃げるの？」

エルナコの新緑の瞳が残念そうに私を見上げた。ああ、卑怯だ。彼女のこの目を見るたびに思う。そんな眼差しを向けられて、首を横に振れる男がこの世にいるものか。

「分かった。もう少し観光して行こう。町の人たちがこんな状態では、まともに歩き回れるとも思えないけど——おわっ」

不意に左肩が重くなった。何事かと顔を横に向けると、青と白のストライプ模様の変わった鳥が肩にとまっていた。

「クルツクー」

鳴き声からしてハトだろうか。爪が食い込んで少し痛い。

「何だこの鳥？」

「あら、足に何かついてるわ」

エルナコは鳥の足に縛り付けられていた小さな紙片を取った。それを確認すると、鳥はもう一度クルツクーと鳴いて、私の肩から飛び立っていった。

「何かしら？」

エルナコは折り畳まれた紙片を開いた。二人で顔を寄せ合って、中を見る。そこには幼い文字でこう書かれていた。

『神殿の横。ハト小屋で』

「……どういことだろう？」

「多分、手紙の差出人がこの場所で待っているんでしょね」

「君の知っている人かい？」

「まさか。私もこの場所に足を踏み入れるのは初めてよ」

「ということは全くの赤の他人か……怪しいな」

「でも、他に行く当てがないわ。とりあえず行ってみましょうか」

私たちは広場から離れた。

手紙に書いてあった“神殿”の場所はすぐに分かった。広場から伸びている大通りを真っ直ぐ進んだところに、大きく目立つように造られた建物があったからだ。石柱が規則的に立ち並び、壁にはレリーフが隙間なく彫り込まれている。明らかに他の建物とは様相が違っていた。門前には槍を携えた衛兵が立っていたので中には入れそうになかった。

私たちは立ち並んだ石柱をなぞるようにして、建物の隣へと回り込んだ。そこは切り立った崖になっていた。崖の下には白い雲が絨毯のように広がっている。落ちれば、もちろん即死だろう。雪に抱かれるような幸運があれば別だが。

「ハト小屋って……まさか、あれ？」

プールの飛び込み台のような、崖から突き出した足場があった。その先端に小屋が建っている。木材を組み合わせて造られた足場はここから見ると弓なりに曲がっていて、今にも折れて崩れそうだった。

「……やっぱりやめようか」

「敵前逃亡は極刑よ。覚悟を決めなさい」

彼女が背中を押す。私はできるだけ振動を加えないようにゆっくりと足場の上を歩いた。ときどきギシリと嫌な音を立てたが、どうにか私たちの体重を支えるだけの強度はあったらしい。ようやく小屋の前まで辿り着いて、私は扉をノックした。

パタパタと走る音が中から聞こえた。すぐに扉が開く。

「いらっしやい」

中から出てきたのは十歳にも満たない少女だった。手紙の文字から差出人は若い人だとは予想していたが、ここまで幼いとは想定外だった。私は戸惑い気味に二の句を継いだ。

「あの、手紙を受け取ってここに来たのですけど……」

「ええ。あの手紙は私が貴方がた宛てに出したものです。ここでは何ですから、中へどうぞ」

歳の割にしつかりした口調だ。私と彼女は少女に招かれて小屋の中に入った。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（3）

小屋の中は飼料の臭いで満ちていた。腐敗させた穀物の臭いである。入り口とは反対側の壁にはハトの止まり木が格子状に組まれていて、何十羽ものハトたちが餌台から飼料を啄ばんでいた。私たちが止まり木の前まで行くと、ハトたちは見慣れない人間に怯えて一斉に飛び立った。小屋の外に逃げ出すものもいれば、小屋の中を飛び回るものもいた。

「こら、落ち着きなさい！」

少女は懷から石焼の笛を取り出して吹いた。ピーーと甲高い音が鳴り響く。その音を聞いたハトたちは、母親に叱られた子供よろしく、うなだれて止まり木へと戻った。

「すみません、騒がしくて」

申し訳なさそうに少女は頭を下げた。その謝り方が本当に母親のようで、私は軽く笑いそうになった。

「いや、構わないよ。変わった柄の鳥だね」

「タカバトと言います。標高一万メートル以上に好んで生息する鳥です。私たちはこのタカバトを伝書鳩として利用しています。模様が変わっているのは、一種の保護色だと言われています。空の面積が大半を占めるこの土地では、灰色や茶色などよりも、青や白の方が天敵に見つかりにくいそうです」

「へえ、物知りだね」

「“下界”の動物学者とも文通していますから。貴重種のタカバトがこんなにも多数生息しているのはここだけだそうです」

少女の“下界”という言葉に違和感を覚えた。その言い方がまるで『下賤な民が住む場所』というニュアンスを含んでいるように感じたからだ。いくら高い山の上に住んでいるからと言って、同じ人間が住む場所を“下界”なんて普通は言ったりしないだろう。

「どうぞ、お座りください」

簡素な椅子を二つ差し出され、私たちはそれに座った。少女は一旦奥に行き、布袋を持って戻ってきた。どうやら餌袋らしく、少女は餌台の上に均等に餌を撒いていった。

「で、私たちを呼んだ理由は？」

エルナコが少女の背中に声を投げた。一通り餌を撒いてから、少女は振り向く。こちらが座って少女が立っていると、視線がちやうど同じ高さになった。私たちだけ座っているのは少し申し訳なかったが、これはこれで話しやすい。

「あなたがたは、下界から来たんですよね？」

「あなたの言う“下界”という言葉が、地上のことを差すのなら、そうね」

「……あつ」

少女は口を押さえた。自らの失言に気付いたように。

「いけない、つい癖で——そうですね。下界なんて言葉、変ですよ。すみません、言い直します。あなたがたは、この山の麓から登ってきたんですよね？」

「ええ」

「地上からこの町に人が来るのは、数年ぶりです。以前来た人は、登山中に遭難してこの町に行き着いたアルピニストでした。空気の薄さに耐えられず、三日も経たずに亡くなりましたが」

「でしょうね。人間が生活できる環境じゃないもの。むしろよくここまで登ってこれたと、賞賛を与えたいくらいだわ」

「ですから、あなたがたが普通の人間ではないことは分かります。山の上で生まれ育った私たちはともかく、この場所で平然としていられる人間なんて、いるわけありませんから」

「それで、私たちが普通の人間でないことと、私たちが呼び出されたことが、どう繋がるんだい？」

少女は餌袋を棚に置いた。タカバトたちは新たに追加された餌を一斉に啄ばみ始める。少女はそれを横目に一瞬だけ微笑みを浮かべ、すぐに窓の外へと視線を移した。その顔には十歳にも満たない少女

とは思えない、大人びた悲哀が滲んでいた。

「私は――いえ、私たちは今、窮地に立たされています」

「どうということ？」

「この町から見て北西の麓に、とある軍事国家があります」

北西というと、私たちが登ってきた方角とは正反対だ。

「その国は世界最強と自称する空軍を抱えています。実際にはどうだか知りませんが。半年前のことです。その空軍から手紙が届きました。内容は『この町に軍事基地を置きたい』というものでした。空軍の狙いは分かっています。大陸最高峰のこの山頂に基地を置き、索敵レーダーを設置すれば、大陸全土に電波を飛ばし、各地に点在する敵対国の動向を余すことなく監視することができると。そういうことです」

「リアルタイムの情報が何より重視される空軍にとっては願ってもないことだ。戦闘機は音速を超えて飛行できるから、一秒の情報の遅延が命取りになることもある。この場所を基点にして電波の網を張っておくのは妙案だな」

「私もそう思います。けど、それは向こうの都合です。私たちにしてみれば――私たちのような土着民にしてみれば、そんな近代的な情報戦略なんて知ったことではありません。ただでさえこの人たちは、地上の人間たちを毛嫌いしているというのに」

「そこだっ」

私は人差し指を立てた。

「この町に来てからそれがずっと疑問だったんだけど、どうしてこの町の人たちは私たちのような地上の人間を嫌うんだい？」

「簡単です。『自分たちより低いところに住んでいるから』です」

「……それだけ？」

「はい。他に理由なんてありません」

気持ちとは分らないでもない。自分よりも遥か下に住む人間たちを見下したくなる気持ちは、私にも多少は理解できる。高層ビルの最上階に住む富豪が、地べたを這いずるようにして生活している一

般市民を見下ろして悦に浸るのと同じようなものだ。それが数十倍にも増幅された感情だと思えばいい。

「くだらないでしょう？」

少女は自嘲を頬に張り付かせた。

「地上のことを下界なんて呼ぶのもその表れです。自分たちが神に選ばれた人間で、雲の上の“天界”に住むことを許された唯一の人類だと思い込んでるんです」

「……私はそんなの選んだ覚えはないけど」

エルナコがぼそつと呟いた。冗談にもならない呟きだったので、私は聞こえなかった振りをした。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（4）

「でも不思議だな。君もその“選ばれた民族”の一人のはずなのに、どうしてそんなに客観的というか分別があるんだい？」

「先ほども言いましたけど、私はこのタカバトを使って地上の人たちと文通をしています。動物学者、民俗学者、某国の国務大臣、生物学者……そんな偉い人ばかりではなく、私と同年代の子供たちや、一般家庭のサラリーマンの人たちとも」

「す、凄いな」

「地上の人たちは、良くも悪くもこの町に興味があるみたいですね。民俗学者は私たちの生活習慣について細かく質問して来ますし、生物学者は強い紫外線や低い気圧にも耐えられる私たちの身体を研究してみたいと言っていました。子供たちは雲の上にある町という御伽噺のような話に心を躍らせ、大人たちも未開の土地に住む私との手紙のやり取りを単純に楽しんでいるようです」

少女が妙に大人びている理由が分かった。彼女はこの地理的に隔絶された土地にしながら、世界中の人々と密接な交流をしていたのだ。そのコミュニケーション密度は普通に地上に暮らしている人などよりも遥かに濃いだろう。様々な知識を得ながら濃密な時間を過ごしてきた少女は、この土地の誰よりも自分と自分の住む世界についての見聞を深めてきたに違いない。

「この文通は皆には秘密にしています。自分たちが世界の頂点に君臨していると信じる皆が、この土地の文明レベルが地上と比べて“天と地ほどの”差があると知ったら、動揺して混乱してしまうと思いますから」

「うまい皮肉ね」

大して面白くもなさそうにエルナコが言った。少女も自分の言葉に苦笑していた。

「あなたがたはこの町に来て、嫌な思いを沢山したと思います。許

して欲しいとは言いません。ですが、皆にも悪気があったわけではないのです。皆にはまだ、自分たち以外の人間を受け入れるだけの文化的狭量がないのです。どうか、そのことを理解してあげてください」

私と彼女は先ほど石を投げられたことを未だに根に持っていたが――どちらも意地の悪い性格だ――そう言われたら文句を言うわけにもいかない。私と彼女は顔を向かい合わせて溜息を吐き、頷いた。少女はほっと胸を撫で下ろす。その安心した瞬間は確かに十歳未満の女の子だった。無邪気な笑みがこぼれる。

「話を戻します。北西にある国が軍事基地をこの町に建てたいという話ですが――私はその手紙の旨を長老に話しました。私一人ではとうてい判断できない問題でしたから」

「それで長老は何と？」

少女の顔がまた沈んだ。そんな悲しそうな少女の顔を見て、慰めようとも思ったのか、タカバトの一羽がクルックウと優しく鳴いた。

「相手にされませんでした。軍隊や基地について長老は何も理解していなかったので、私は丁寧に一から説明しようとしたのですが、説明の途中で衛兵につまみ出されました。何度説得しようとしても、長老は聞く耳を持つとうしませんでした」

――『下界の奴らの話など聞きたくない！ そんな手紙など破り捨ててしまえ！ 貴様はハトの世話だけしていれば良いのだ！』

「地上の人たちから能動的にアプローチをかけられたのは、おそらくこれが初めてだったのでしょう。長老もこめかみに血管を浮かべながら、困惑しているようでした。本来ならば年長者を集めてじっくりと時間をかけて議論すべき問題なのに、“下界”という言葉だけにヒステリックに反応して、冷静な思考を放棄してしまったのです」

「愚かね」

少女の手前、私が思っても口に出れなかったことを、エルナコは

はつきりと言った。少女も同意する。

「その通り、愚かです。議論をする気がないのなら、せめて丁重に断ればいい。そんな簡単なことも分からず……長老たちは、無意味に相手を挑発するような文面の手紙を、相手国に送りつけました」

——『貴様ら下界の民の下賤な戯言などに付き合うほど、我ら天上人は暇ではない。“ぐんじきち”などという気違い染みた建物を、我らの神聖なる山に建てることは断じて許さん。どうしても“ぐんじきち”を建てたいとほざくなら、相応の供物を捧げよ。貴様らの国が保有する全ての金塊、人間の心臓百個、それと女の奴隷千人だ。それらを用意してこの場所まで徒歩でやって来たのなら、我らの前に跪くことを許可しよう』

「その手紙を受け取った相手方は愕然としたことでしょう。何て無礼な物言いかと。ですが、さすがに軍事国家らしく外交慣れしていました。土着民族の一度や二度の非礼などでは、腹を立てたりしません。相変わらず丁寧な物腰でこちらの機嫌を伺っていましたが、その柔和な態度に長老たちは更に調子に乗ってしまいました。こちらの偉大さに恐れをなしたのだと勘違いしたのです。相手が低姿勢でいることをいいことに、不躰な言葉や身勝手な要求を次から次へと送りつけました。……相手方の怒りが徐々に溜まっていくことも知らずに」

「それで、ついに堪忍袋の緒が切れた、と」

エルナコの言葉に、少女は頷く。

「二日前のことです。相手国からこのような手紙が届きました」

少女は懷から一枚の紙片を取り出して、私たちに見せた。そこには手書きなどではなく印刷された文字で整然と、しかしはっきりと読み取れる怒りに満ちた文面でこう書かれていた。

『貴殿らの至極低俗な態度には遺憾の意を隠し切れない。互いに平和的な解決を望んでいたが、もはや限界である。数日以内に貴殿らが誠実な謝意を示さない限り、我が国は貴国に対して軍事的制裁を

行う。これは我が国民の総意である』

これは宣戦布告などではない。文章にもある通り、これは“制裁”表明だ。人々が布切れ一枚を身にまとい通りを歩いているこの町と、自称大陸一の空軍を所有する国が戦えば、一方的な殺戮ショーになることは目に見えている。戦闘機の爆撃で、通りは一瞬で血の海になることだろう。

「この手紙を長老には見せなかったのかい？」

「見せました。ですが、長老たちはすぐに一笑して手紙を捨ててしまいました。『下界の民が怒り狂った拳を振り上げたところで何ができる。この土地に来れるのは選ばれた人間だけだ』って」

「そうか、長老たちは高度数万メートルを飛行できる戦闘機が存在を知らないのか……」

「徒歩で来ても、すぐに死んでしまうと思っているのね」

少女は大きな瞳に涙を滲ませた。泣きそうになりながら、涙がこぼれるのを必死に我慢して言葉を紡ぐ。

「すでに二日が経ちました。長老たちはまともに謝る気なんてありません。明日にでも、いえ、もしかしたら今日今すぐにでも、隊列を組んだ戦闘機がこの町にやって来るかもしれません。そしたら皆死んでしまいます。私も、私の家族も、皆。私……私、もう、どうしたらいいのか分からなくて……」

「それで私たちを呼んだんだね？ このことを相談したくて、もしくは、何か解決策がないかを教えてもらいたくて」

少女はコクリと顎を落とした。

「この場所で平然としているような特別な人たちなら、もしかしたら何か画期的な手段を持っているんじゃないかと……そんな都合のいい考えです。本当なら、この町に危険が迫っていることを教えて、速やかに下山するよう促すべきでした。でも……私はあなたがたを引きとめてしまった。無関係なあなたがたに戦争の火の粉が降りかかるかもしれないと危惧しながら、こうして繋ぎとめてしまった。」

私は……とんだ卑怯者です」

マウンテン・マウンテン・ア・デス(5)

本格的に泣き出しそうになった少女を慰めようと、私が椅子から立ち上がったそのとき――ハト小屋の扉が開いて、外から衛兵たちがなだれ込んで来た。タカバトたちは私たちが来たときよりもさらに激しく騒いだ。抜け落ちた羽がヒラヒラと舞い落ちる。

衛兵たちは手に持った槍の切っ先を私とエルナコに向けた。

「貴様らが今日この町に来たという下界の者だな？」

くいつと黒曜石の刃を喉元に突きつける。下手に抵抗するのは得策ではないと判断し、私たちは素直に両手を挙げた。隣に目を向けると、少女も衛兵の一人に拘束されていた。万歳をするように両腕を引っ張り上げられ、苦痛に顔を歪めていた。

「連行する。ついて来い」

「私たちはともかく、なぜあの子まで？」

エルナコが口を開く。衛兵は片手で槍を構えたまま、もう一方の手でエルナコの顎を乱暴に持ち上げた。私は思わず手が出そうになるのを必死に堪えた。エルナコが視線だけで「いいから」と語っていないければ、衛兵を殴りつけているところだ。

「薄汚い下界の民が口答えをするんじゃない。殺さずにいるだけ有難いと思え」

ぺつと衛兵はエルナコの顔に唾を吐きかけた。髪の毛が針金になったのではないかと思うほど、私の頭髮は怒りで逆立っていた。我慢するために握り締めた拳に爪が食い込む。

私たちはハト小屋からすぐ隣の神殿まで連れて行かれた。門の前にいた兵はまるで畜生でも見るかのような冷たい視線を私たちに送った。

神殿の中は、さすがに荘厳な雰囲気だった。立ち並んだ石柱には近寄って顔を寄せなければ判別できないほどの細かい装飾が施されている。壁には等間隔に獣脂の蠟燭が灯っていた。石積みヴォール

ト構造の天井は綺麗なアーチを描いている。文明レベル如何に関わらず、こういった神格的な建造物に力を入れるのは古今東西共通のものらしい。

衛兵たちに小突かれながら石畳の通路を歩かされ、私たちは玉座の前まで連れてこられた。玉座には偉そうに頬杖をついた髭面の老人が座っている。おそらくあれが少女の言っていた長老だろう。長老は私たちが玉座の前にひれ伏したのを見ると――衛兵に無理やり頭を押さえ込まれた――つつと手の平を横に滑らせた。衛兵たちは一礼し、後ろへと下がる。

「さて、下界の者よ」

威厳を含みながら同時に軽薄さも感じられる声だった。私たちは膝をつきながら頭を床にへばり付かせているので、その声しか聞けない。

「貴様らがどういった目的でこの町に來たのかは知らん。知る気もない。しかし、この町に來たからには、我らの慣習に従ってもらうよいな？」

よいなと聞かれても私たちに断る権利などはじめからありはしない。何か発言をしようものなら、長老の周りに控えている衛兵たちが無言で槍を突き刺してくるだろう。

「まず男。貴様は死ぬ。下界の男など奴隷にもならん。ただ、簡単に殺してしまうのも面白くないから、市中を引きずり回したあと、柱に縛り付けて広場で晒し者になってもらう。後は民衆に戮られるなり、肉をこそぎ落とされるなり、焼かれるなり、好きにされるがよろう」

恐怖よりも怒りが沸き起こった。本当にこの町の人間たちは、地上に生きる人々を自分たちと同じ人間として見ていないのだ。

「次に女。貴様は下界の者にしてはなかなか器量好しのような。この山の神聖な空気に耐えられるというのも気に入った。我の専属奴隷にしてやろう。明日から常に我の傍らに立ち、我に奉仕せよ。分かったな？」

エルナコは返事をしなかった。だがそんなことは奴らにとっては関係ない。沈黙も肯定も拒否も全て同じだ。従わなければ殺すだけ。いや、エルナコほどの美人を殺すのは奴らも惜しいと思うだろうか。きっと慰み者にされた挙句、強制奉仕をさせられるのだろう。ただし、それはエルナコが普通の女性だった場合だ。この世の事象を全て操作できる彼女が、黙ってそんなことをされるとは思えない。私はそのことを重々理解しているつもりなので、なぜ彼女が何の抵抗も示さずにここまで連行されたのか不思議だった。やろうと思えば、瞬き一つで衛兵たちを消すことくらい簡単だろうに。

「下界の者の処遇に関しては以上だ。最後に、ハト飼いの娘
「はい」

少女はやや怯えたような声を出した。一国の国防長官とも知り合いだとしても、あくまで少女はこの町の民衆の一人に過ぎなかった。絶対権力を持つ長老には逆らえない。

「何故お主は、このような下賤な者たちをハト小屋に連れ込んだのだ？ 答え次第ではお主の首も飛ぶことになるぞ」

「……」

少女はすぐに答えなかった。石畳の床をじっと見つめている。

「答えよ。口を閉ざすということは、よもや答えられないことなのか？ ならば残念だが、お主の首を刎ねさせてもらおうか——」

「下賤ではありません」

「……なに？」

私は思わず顔を上げそうになった。

「今、なんと申した？」

「この人たちは——地上の人たちは、決して下賤なんかではありません」

身体を恐怖で震わせながら、しかしはっきりと少女は言い放った。それほど大きい声でもないのに、その力強い声は神殿の壁に反響してエコーの尾を引いた。衛兵たちがざわめく。

隣ではエルナコが気付かれないように小さな笑みを浮かべていた。

私はようやく納得した。彼女はこれを予期していたのか。

「むしろ私たちの方が野蛮で醜い人種です。ただ山の高いところに住んでいるというだけで、地上に住む人たちを見下す愚劣な土人です。雲の上に引き籠もり、他文化と交流することもなく、自分たちだけが正しいのだと盲目に信じている嘲笑にも値しない非人間的集団です」

「この餓鬼が……言わしておけば！」

長老は立ち上がり、腰から片刃剣を引き抜いた。切っ先を光らせ少女に歩み寄る。長老は剣を振り下ろした。

少女の左耳の半分が切り落とされた。耳の破片が床に転がる。噴き出した鮮血が私の服に付着した。

「訂正しろ娘。餓鬼の戯言として一度は大目に見てやる」

鼻先に刃を突きつけられる。

少女はそれでも動じなかった。いや、本当は、怖くて痛くて堪らないに違いない。その証拠に、目尻には大粒の涙が滲んでいる。本当は泣き叫びたくて堪らないのに――少女はその痛みと涙を噛み殺した。肩口を真っ赤に染めながら、強い意志を宿した瞳を長老に向け、少女は言葉を続けた。

「長老たちは知らないのです。この町が世界から取り残されていることに。日々切磋琢磨を続ける地上の国々と比べて、この町があまりにも幼稚であることに。私たちは砂山の上ではしゃぐ赤ん坊です。世界の広さを知らず、世界の常識を知らず――自分たちが今まさに滅ぼされようとしていることにも気付かない、愚か者です！」

少女の言葉が終わると同時に、爆音がした。地面が震え、神殿が揺れる。衛兵たちは槍を構えこそのものの、何が起こったのか分からず混乱していた。少女の言葉に気を取られていた長老は、少しバランスを崩しただけでその場に倒れてしまった。

間髪を入れず、二度目の爆音。パラパラと細かい石の破片が天井から落ちてきた。町の方からいくつもの悲鳴が聞こえる。

「来たみたいね」

私とエルナコは立ち上がった。私は隣でうずくまる少女に手を貸した。少女は痛みで顔を引きつらせながらも、自分の足で立ち上がった。

「大丈夫かい？」

「ええ。それよりも、皆が……！」

私たちは神殿の出口へと走った。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（6）

爆撃機が雲の壁を突き抜けてくる。機能美を備えた三角形の機体が、標高数万メートルの山頂の更に上を飛ぶ。右翼付け根のパイロンから誘導弾が発射される。空気を引き裂く鋭い音。パイロットが狙った場所に寸分も狂いもなく着弾し、爆発。石造りの壁は容易く碎かれ、飛散した瓦礫が通りを歩いていた人々を押し潰した。断末魔を上げる暇さえなく、頭蓋から骨盤まで粉々に潰され、瓦礫の下に赤い花が咲く。

また一機、また一機と、爆弾を脇に抱えた機体が雲の向こうからやってくる。相手が対空砲も戦闘機も持っていないことは明白なのだから、隊列を組む必要もない。悠々と飛んできて、好きなところに爆弾を落とすだけだ。戦闘機乗りなら喜んで志願するだろう。爆弾の威力テストや、新人訓練にも丁度いいかもしれない。

「あ……ああ……」

少女は神殿の前に立ちながら、涙と血に濡れた顔を覆った。

爆弾が落ちる。大気が震え、爆音が響き、山が揺れる。人々は木の葉のように吹き飛ばされる。大地は抉れ、建物は跡形もなく破壊される。爆弾が落ちる。子供は泣き叫び、大人たちは死体を踏みつけながら逃げ惑う。着ていた一枚布はもう服として機能しておらず、誰もが裸同然になって駆けずり回っていた。爆弾が落ちる。目が焼けるほどの閃光。爆発に直接巻き込まれた人々はその衝撃に身体を捻じ切られ、胴体を二つに分断される。上半身だけになっても死に切れない人が、道に転がって呻き声を上げていた。

「ああ……！！」

少女でなくとも、思わず目を覆いたくなるほどの惨劇だった。

「ここも危ないわ」

エルナコが落ち着いて言った。

「あの人たち、この町を徹底的に破壊し尽くすつもりよ」

また爆発。今度はかなり近かった。爆風の余波が頬を叩く。土埃が舞い上がり、視界を覆った。飛んできた細かい土が口に入って、私はぺっとそれを吐き出した。

「そうだね。早く逃げた方がよさそうだ」

「な、なんだ……これは」

神殿の中から長老が出てきた。衝撃に足を取られないように、剣を杖代わりにしている。

「あの大きな鳥は何だ？ 何を落としている？ どうして町が壊されている？ なぜ我らの神聖な山がこんな目に合っている？」

長老は焦点の定まらない目をしていた。目の前で起きていることが信じられないようだ。ふらふらと夢遊病者のように、神殿前の段差を降りていく。二人の衛兵が門から飛び出してきて「長老！ 危険です！」と引き止めた。衛兵に両脇を抱えられながら、長老は気が狂ったように叫んだ。

「そうだ、これは夢だ……こんなことがあってたまるものか！ 我々は選ばれた人間だぞ！ この世界で唯一、神に愛された気高き民族だぞ！」

爆風に飛ばされた瓦礫が真横から飛んできた。暴力的な運動量を持った瓦礫は長老と衛兵たちの頭をいとも容易く弾き飛ばす。長老の頭部はビリヤードのように建物の壁を跳ね返って、最後には崖の下へと落ちていった。首から上がなくなった三つの胴体が、膝を付いた格好で神殿の前に並んだ。

「だから私はそんなの選んだ覚えはないってば」

「エルナコ、もう限界だ。逃げよう。君なら瞬間移動とかできるだろう？」

「できるけど……あんまり好きじゃないのよね。ただでさえ人間離れしているのに、そういうの使うと余計に化物染みちゃうから」

「そんなこと気にしている場合じゃないだろう」

エルナコは「ちえっ」と口を尖らせた。

「さあ、君も」

私は少女に手を差し出した。少女は両手で顔を覆い、身体を丸めて震えていた。恐怖なのか悲しみなのか、その両方なのか。私は片膝を付いて顔を近づけた。

「辛いのは分かるけど、いつまでもここにいる訳にもいかない。せめて君だけでも生き延びなくちゃ」

少女は顔を隠したままふるふると首を横に振った。私とエルナコは困ったように顔を見合わせた。こうしている間にも戦闘機は絶え間なく爆弾を落としてくる。すでに山の形が変わりつつあった。

「家族や友達を置き去りにするのは心苦しいかい？ でも、残酷なことを言うようだけど、この町の人たちが地上に降りてもまともな生活を送れるとは思えない。生活環境が何もかも違うからね。その分、君みたいな賢い子なら地上でも立派に生きていける。学校に通ってもっと広い知識を得れば、大陸全土に名を轟かせる研究者にだってなれるだろうさ」

「……違うんです」

手の平の隙間から弱々しい声が聞こえた。

「この町の人たちが滅ぶのは自業自得だと思っています。地上を馬鹿にして、何も知ろうとしなかった代償を払っているのです。それは私の家族や友人とて変わりません。滅ぶべきだとは言いませんが、この惨状は仕方のないことだと思っています」

驚いた。少女がここまでクレバーだとは思わなかった。小学校低学年相当の子供だとはとても思えないような物の考え方だ。この少女が相応の機関でしっかりとした教育を受ければ、本当に世界を揺るがす人物になるかもしれない。尚更死なすわけにはいかなかった。

「じゃあ、早く立って、逃げよう」

それでもやはり少女は首を横に振った。

「私は卑怯者です」

神殿の上に爆弾が落ちた。屋根が崩れ、石柱の一つがこちらに向かって倒れてきた。エルナコは石柱に向かって手の平で払い除ける

動作をした。石柱の軌道がずれる。石柱は私たちではなく長老たちの死体の上に倒れ込んだ。派手な音と砂埃を立てる。

「私は知っていました。こうなることを。知りながら、大した努力もせずに――あなた方のような罪のない人まで巻き込んで、一人で悲劇のヒロインを気取っていました。もっとやり様があったはずです。長老の言質が貰えなくとも、私が長老の振りをして謝罪の手紙を送ればよかったです。けど私は、その行為が発覚して自分が晒し首になるのを恐れました。自分の身の可愛さゆえに、皆を死なせてしまいました。私は……私は……」

「もういい。もうそれ以上自分を責めないで。君はさっきあんなにも勇敢だったじゃないか。大人たちの前で自らの主張を口にしていたじゃないか。それだけでも君は褒められるべきだ」

「許されることはありません。私は一人でのうのうと生き延びていい人間ではない。そんなこと、神様がお許しになるとは思えない」

「いや、きっと許してくれる。そうだろう、エルナコ？」

「……」

エルナコは黙った。何かを見定めるような、感情の乏しい瞳で少女を見下ろしていた。

不意に少女が立ち上がった。駆け出す。私は慌ててその背中を追った。

「待って！」

歩幅が決定的に違う。すぐに少女に追いついた。腕を掴まれながら、少女は必死に抵抗した。衛兵に拘束されたときだってこんなに激しく暴れなかったのに、少女はがむしゃらになって私の手を振り解こうとした。

「放してください！ 私には責任がある！ 私には皆の死に報いる責任がある！ 皆と共に死ぬ義務がある！」

「そんな義務があるものか！ 君は今錯乱している！ 落ち着くだ！」

「お願いです！ 私は皆を死なせたという罪悪感を抱いてまで、生

きたくない！　お願いです！　死なせてください！」

振りかぶった頭から飛び散った涙の滴が、私の手にかかった。その悲しみに満ちた冷たさに、私は無意識に手の力を緩めてしまった。後悔したときにはもう遅い。少女はするりと私の手をすり抜けて、阿鼻叫喚の広場へと駆けて行ってしまった。

キーン。戦闘機が頭上を横切った。筒状の誘導爆弾がレーザー照射による軌道修正を受けながら、広場へと落ちてくる。少女は広場の真ん中に立ち、爆弾を――自分と同じくらいのサイズの爆弾を――受け止めようとするかのように、大きく腕を広げた。私は自分でも良く分からないような声を上げた。

直撃。

少女の小さな身体はまず被弾の衝撃で細切れになり、次に爆発の圧力で粉々になった。爆風によって飛ばされた肉片は、通りに散乱し、建物の壁に張り付き、私の足元にもひとつ落ちてきた。私は魂が抜かれたように、その元少女の肉片を見つめた。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（7）

いっそ清々しいほどの喪失感だった。天井が崩れ落ち、半分に折れた石柱が残る神殿の真ん中で、私は呆然として空を見上げていた。綺麗な空だった。澄み渡る青一色の空も悪くないが、水彩画のパレットのように色とりどりに分割された空も、同じように美しい。雲の壁の向こうから、もう戦闘機は来ない。爆弾も落ちない。その必要がない。

町は蹂躪された。余すところなく、一人の生存者もなく、この町は壊滅した。今日この時、この町と人々は歴史から消えた。誰が知ろう。誰が語ろう。高層雲の遙か頭上の町が、滅びたことを。見下していた地上の人々の怒りを買い、圧倒的な軍事力によって、たった数時間で死に絶えた人々のことを。

そして、慈母のような優しさと強い責任感ゆえに死んだ一人の少女のことを。

「助けることはできなかったのかい？」

エルナコは石柱の焦げ跡を触っていた。ケロイド状に溶けた石柱の表面から爆弾の壮絶な威力がうかがい知れる。世界一と名乗るだけあって軍事国家の兵器はどれも高性能だった。爆弾を投下していた戦闘機だって、一機数十億円は下らないだろう。

人々が次々と死んでいくなかで、私はエルナコに守られた。少女の死ぬ瞬間を目の当たりにしてその場に崩れ落ちた私の側にエルナコは立ち、爆風や瓦礫を防いでくれた。彼女が睨みを利かせるだけで、人間を容易く死に至らしめる爆風はそよ風へと変貌した。

「できたわよ」

「じゃあ、なぜ助けてくれなかった？」

「無意味だと思ったから」

「無意味？」

私は無意識に咎めるような声を出していた。

「あの子を助けることが無意味だと言うのか？」

「ええ」

「どうして？」

「もしも助けたとしても、あの子はいずれ自害する。そういう顔をしていたもの」

「そんなの――！」

やってみなくちゃ分からないじゃないか、と言いつうになつて、私はその言葉を呑み込んだ。相手が誰だと思つてゐるのだ。彼女だぞ。世界を創世した女神だぞ。彼女の言う事が間違つてゐるとでも言うのか？

「じゃあ、確かめてみる？」

私の心を読んだのだろうか。エルナコは挑戦的な目を向けてきた。「一度だけチャンスあげるわ。私が時間を戻すから、あの子を助けなさい」

意外だった。彼女がこんな提案をするなんて。

彼女と旅を始めてそれなりの日数が過ぎ、彼女の性格はある程度把握したつもりだった。彼女は基本的に“物事の結末をそのまま受け入れる”人間である。自分に起きたこと、誰かに起きたことを否定も肯定もせず、ありのまま認める。実に“神様らしい”性格だと思つてゐた。そんな彼女がやり直しを認めるなんて。

「どうする？ やつてみる？」

逡巡は一瞬だった。

「あの子を助けられるのなら、やろう」

「了解。じゃあ、行つてらっしゃい。私はここで待つてゐるわ」
パチン、と指を鳴らした。

景色が回る。ぐるんぐるんと竜巻の中心部にいるような感覚。気付けば私はあの時――少女が隣で顔を覆つて震えている時に戻つてゐた。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（8）

戦闘機が頭上を飛び交い、人々は悲痛な叫びを上げて逃げ惑い、町のあちこちから黒煙が上がっている。まさしくあの時だ。頬を撫でる空気や温度まで再現されている。私は時を遡り、戻ってきたのだ。ただ一つ違うのは、側にエルナコがないことだ。それ以外は完璧にあの時と同じである。

隣では少女が震えていた。生きている。その事実だけで胸が締め付けられた。

もう死なせたりしない。この少女は世界の財産だ。こんなところで死んでいい器ではない。

「君は――」

私は慎重に言葉を選んだ。少女は今、後悔と自責の念に押し潰されようとしている。非常にデリケートな感情の爆弾を抱えている。それを爆発させないように、私はよく考えて発言する必要があった。

「とても利巧な子だ」

感情とは本当に厄介なものである。優しく包み込むように接することが必要なときもあれば、強引に心を突き破る必要なときもある。今、少女はどっちだろう。押すべきか引くべきか。私は迷っていた。しかし時間はない。爆弾のタイマーは止まることなく進んでいる。今すぐにでも、少女は駆け出してしまいかもしれない。

「そして優しい子だ。それゆえに、君は今こう考えている。『この町の人々が死ぬのは仕方ない。けれどその原因を作ったのは自分だ。だから自分は生きていくべきではない』と」

少女は僅かに反応した。

我ながら卑劣なやり方だ。私は一度少女の主張を聞いている。少女が悩み苦しんでいるその原因を知っている。そこを突けば少女の心を動かすことができるかもしれない。何ともあざとい説得の仕方

だが――構うものか。それで少女の命が救えるのなら、卑怯者呼ばわりも厭わない。

「もう一度言おう。君はとても利巧な子だ。この町の誰よりも賢くて、世の中のことを大人以上に理解している子供だ。だからだろうね――君は少し自惚れている」

「……自惚れている？」

少女が顔を出して、こちらを見上げた。どうやら心を動かすところまでは成功したようだ。私はやや厳しい顔をして少女を見返した。「君は無意識のうちに町の人たちを見下している。彼らが地上の人々を見下しているように」

「そんな！ 私はそんなこと――！」

「君自身は気付いていない。だから無意識だって言ったんだ。間違はなく、君は彼らを自分よりも下に見ているよ。だってそうだろう？ 君は、自ら行動で彼らの命を救えたと思っている。彼ら全員の命を、自分一人が握っていたと思っている。たかが一介のハト飼いに過ぎない、君が」

「でも……それは」

「事実だろう。確かに君の行動如何によっては彼らを救えたのかも知れない。けど、その思考に行き着いた時点で、君は自分の優位性を認めたことになる。自分が彼らの命を掌握しているという傲慢な考えを持ったことになる。君は自分がどれだけ偉いと思っているんだい？ 自分なら、こんなにも賢い自分なら、何だって出来ると思っていたのかい？」

少女の顔は困惑と悲しみでぐちゃぐちゃになっていた。

「自惚れるな。君には誰も救えやしない」

私は言った。私に出来る限りの冷酷な声で。

少女は泣き出した。歳相応の子供のように大声で。

爆弾が近くに落ちた。建物の破片が私の頬に突き刺さった。痛かった。血が出た。しかし、その痛みも今の私の心の痛みに比べたら何てことはない。少女を死なせないためとは言え、少女を傷つけて

しまった。少女の半生を全否定するような言葉を投げてしまった。
ああ、誰かを傷つけるということは本当ににつらい。自分が傷付くよりもずっと。

「どうしろと言うのですか？ 私は、一体どうすればいいのですか？」

少女はかすれた声で私に尋ねた。ここですぐに折れてしまわないところが、この少女の強さだ。私は笑顔になりそうになるのをぐっと我慢した。

「生きればいい。彼らの死に報いる方法なんて、他にはない。生きて、彼らのことを伝えればいい。歴史に埋もれていくこの町のことを、君が史実に残せばいい」

「……分かりました」

私は心の中でガッツポーズを取った。成功だ。これで少女が死んだという事実が消え失せ、少女が生きているという新しい時系列が現れる。少女の名が世界に響き渡るといふ、輝かしい未来が開かれる。

「でも、やっぱり駄目です」

「……は？」

思わず間拔けな声が出た。

少女は涙顔のまま、ずっと立ち上がった。

「あなたの言う通りだと思います。私は自惚れていました。自分の能力を過信していました。皆を見下していたことも認めます。ですが——それでも私は、自分を許せないのです」

「どうして！」

少女は一步前に進んだ。私は手が出せなかった。その背中には神々しいまでの近寄りがたさがあった。私なんか少女に触れてはならない。そう感じさせる背中だった。

爆弾が落ちる。爆風と振動が少女の前髪を揺らした。

「あなただけではなく、誰に説明しても、理解して貰えないことだと思います。これは、私の矜持なのです」

少女は普段どおりの歩幅で神殿前の段差を降りていった。広場へ。
戦闘機が空を切り裂く。

私はその場に膝を付き、握り締めた拳を石畳の床に叩き付けた。

マウンテン・マウンテン・ア・デス（9）

「分かった？」

「ああ」

崩壊した神殿。崩れ方も全く同じだった。私は何の変わりもない“今”へと戻ってきた。喪失感は二度重なることによって――マイナスにマイナスを掛けるとプラスになるように――私はむしろすっきりした気持ちになっていた。

どうあがいても少女を救えなかった。おそらく何度も時間を遡り少女を説得したとしても、同じ結末に落ち着くだろう。この世界では少女は死ぬ運命だったらしい。神様が隣にいる状況で運命なんて言葉を使うのは、何だか滑稽な気もするが。

「気高い命ほど、早く死にたがるのよね」

「そうだね。あの子は高潔に過ぎた」

高貴な魂を持つ人間ばかりが苦しむ。空を見上げながら、私はほんの一瞬だけ、この世界がとても汚いものに見えた。本当に綺麗な心を持つ者たちは、ずるくて薄汚い人間たちに踏み躪られて泣いている。そんな世界の機構に嫌気が差した。

「でも、仕方がないのよ」

エルナコはすぐ隣に立って、私の頬を撫でた。頬にあった傷が瞬く間に消える。

「それが一番上手く世界を回す方法なんだもの。綺麗な者たちばかりでも、汚い者たちばかりでも上手くいかない。今の世界の構図が一番安定しているの」

「言い訳じゃないのかい？ もっと工夫すれば、もっと上手い方法が見つかるとは思わないのかい？」

「そうね。見つかるかもしれない。でも、それはきっと私一人では見つけれない。協力者がいなくちゃ。だから私はずっと探している。私の“助手”となるべき存在を」

何気なく口にした言葉だった。しかしその言葉で、私の頭の中に渦巻いていた一つの推測に筋が通った。

彼女は私を試していた。空高きの小部屋から落ち、今に至るまで、彼女は私に色々な試練を課していた。それらが彼女の些細な遊びだとは思えない。何かしらの意味があるはずなのだ。これまで試練と今の言葉を繋ぎ合わせれば、考えられることは一つ。

「もしかして、君は私を――」

彼女の人差し指が私の唇を押さえた。エルナコは首を軽く振る。

「その先はまだ言っちゃ駄目。もう少し、あと、もう少しだから……」

エルナコの瞳が僅かに震えていた。

私たちは山を降りた。

瞬間移動を使えば一瞬なのに、やはりエルナコは使ってくれなかった。「人間の力でできることは人間の力でやらせるのが、私のモットーなの」と、返事ができないくらい疲れていた私に向かって笑って言った。標高数万メートルの山を登り降りすることは、もはや人間の範疇を越えている気がするが、そこは黙っておいた。

久しぶりの地上だった。平原が広がっている。近くにあった沼から水鳥の群れが飛び立った。地平線には何も見えない。まだしばらくは徒歩の旅が続きそうだ。

「終わりはあるんだよね」

私はふと呟いた。

「終わりが無いものなんてないわよ」

「そうか」

私たちは肩を並べて地平線を見つめた。まだ旅は続くけれども、この旅もいつかは終わりが来る。そのとき、私と彼女はどのようなのだろう。私はそれを想像しようとして――あまりに怖くてやめてしまった。私の隣に彼女がいないことなんて想像したくもない。

今はただこの旅を続けよう。それしか今の私には出来ない。

女神の最後（1）

「観光ですか？」

中世騎士のような白いサーコートを羽織った門兵にそんな質問をされた。私はわずかに悩んだあと「はい」と答えた。本当は平原を歩いていたら、煉瓦作りの古めかしい城壁が目に入ったので立ち寄っただけなのだが、観光というのもあながち間違いではあるまい。古風な城壁に興味がそそられ、中を見てみたいと思ったのは事実なのだから。

「すると、降神祭を見に来たのですね？」

人好きのする笑顔だった。本当に中世騎士物語の中に出てきそうな青年だ。

「降神祭？」

私は鸚鵡返しに聞いた。

「何と！ 降神祭のことを知らずに偶然この町を訪れたのですか？ いやあ、幸運な方ですね。それでは是非とも今回の観光で、この町の伝統の祭典である降神祭のことをお知りになって下さい。――創世の神の慈悲があらんことを」

門兵は握りこぶしを胸に当てて目を閉じ、軽く頭を下げた。もう一人いた門兵も同じようにして私たちを見送った。“創世の神”というフレーズを聞いて、私は反射的にエルナコの顔を見た。エルナコは苦笑気味に微笑んでいた。

私たちは門をくぐり、町の中へと入った。

「うわっ」

町に入ると同時に、顔にピエロのような化粧をした大道芸人が近付いてきた。不意打ちだったので私は思わず声を出してしまった。少し恥ずかしい。

大道芸人は手に持った風船の束から一本を取って、エルナコに差し出した。エルナコは「ありがとう」と言ってそれを受け取った。

大道芸人は芝居がかった深い一礼をして、軽やかなステップを踏みながら次の観光客へと向かっていった。

エルナコは貰った風船を嬉しそうに揺らした。まるで子供のよう
に。風船には先ほど門兵が口にしたのと同じ『創世の神の慈悲があらんことを』という言葉が、現在は使われていない古い言語で書かれていた。

「何か宗教的な祭典なのかな？」

「かもね」

表通りは人で溢れ返っていた。沿道には露店が立ち並び、子供たちがお小遣いを握り締めて綿菓子やクレープなどを買っているのが見えた。いたるところに大道芸人や楽器を抱えた演奏隊が立っていて、陽気な音楽を奏でたり、愉快な芸などを披露していた。人垣を掻き分けながら進んでみると、いつまで経っても露店や人が途切れることはなく、町中がこの状態なのだとは知らされた。人々の熱気や興奮がこちらにも伝わって、否応にも気持ちが高まってくる。私とエルナコは離れ離れにならないように、定期的にお互いの位置を確認しながら、ゆっくりと町の中心部へと向かった。

中央広場には丸い噴水があり、さらに噴水の真ん中には神様を象ったであろう石像が立っていた。噴水の端に立ち、私たちはその石像をよく見た。半裸の女神だった。ウェーブした髪の毛が露になった乳房を隠している。私は隣にいる彼女の胸元を見て「ああ、向こうの方が大きいな」と“心の中”で思った。エルナコは踵で思い切り私の足を踏んだ。私は声にならない声を上げた。

「君は偶像崇拜を禁じなかったのかい？」

足の痛みを我慢しながら、気紛れの質問をした。

「禁じるものにも人間が勝手にやっていることだけど――もしそれで救われる人がいるなら、わざわざ禁じる必要もないわ。頭の中だけで神様を想像できる人ばかりじゃないでしょうし」

「なるほど」

「でも、あんまり似てないようね」

彼女は挑発的な視線を石像に向け、髪の毛を掻き上げた。確かにそうだ。本物の方がずっと良い。

私たちは更にメインストリートを進んだ。途中で彼女が蜂蜜のかかったパンケーキを買った。私もひと欠けら貰ったが、私には少し甘すぎた。エルナコは風船を持ちながら器用にパンケーキを頬張った。

エルナコが食事するところは今まであまり見たことがなかったが――それを言ったら私だってそうだが――彼女も普通に甘いものが好きなんだと知ると、何だかおかしな気分になった。世界を創造した神様は、こんなにも安っぽいパンケーキ一つで、こんなにも嬉しそうな顔をするのだ。

町の三分の二ほどを横断したかと思われる頃、私たちの目の前に巨大な大聖堂が現れた。白と金を基調としたゴシック調の建物である。門は閉まっており、門前には腰にホルスターを提げた警備官が何十人も立ち並んでいた。私たちが門に近付くと威圧の目を向けてくる。この物々しい雰囲気はただ事ではない。

私は近くにいた警備官に話を聞いてみた。

「どうしてこんなに兵がいるのですか？」

「大聖堂内では降臨の儀式の準備が進んでいます。その間、一般人や不審者をこの場所に近づけないためです」

それにしても兵の数が多すぎる気がするが。

「降臨の儀式というの？」

「降神祭のメインイベントです。今夜、大聖堂に教祖と教徒たちが集まり、年に一度この町に降りてくる創世の神を出迎えるのです。

降神祭とはその神様を歓迎するための祭りです」

「分かりました。どうもお仕事の途中にすみません」

「いえ、これも任務ですから。創世の神の慈悲があらんことを」

警備官は胸に手を当てて頭を垂れた。どうやらあれが教徒のお決まりの挨拶らしい。

私たちは大聖堂から離れ、来た道を引き返した。降臨の儀式には

色々な意味で興味があつたが、夜にならないと大聖堂には入れないらしいので、時間まで適当にお祭りを楽しむことにした。

「降臨の儀式か。すでに神様がこの町に來ていると知ったら、教徒たちは何て思うかな？」

大道芸人による人形劇を見ながら、私は彼女に言った。人形劇は神話を子供向けに作りなおした物語をやっているらしく、使い古されて少しボロい神様の人形が要所所で登場しては、人間に罰を与えたり奇跡を起こしたりしていた。

「別に私は崇めて欲しいなんて一言も言っていないんだけどな」

彼女は人形劇を見ながら「私はそんな罰は与えない」と時々つつこみを入れていた。

「でも悪い気はしないだろう？」

「そうね——」

エルナコは顔を横に向けた。そこでは子供たちが神様が頭に乗せていたというペチュニアの冠を被り、元気に走り回っていた。笑い声が近付き、そして遠ざかっていく。親たちの嗜めるような声も聞こえた。

「こんな風に出迎えられるのなら、いいかもね」

「じゃあ、本当に皆の前に降臨してあげたらどうだい？」

冗談のつもりだった。彼女が自らを神様だと公言するような真似なんてするわけないと高を括っていた。

「うん。それいいわね」

「え……」

私は口を開いたままで固まった。

「たまには人間たちに私の存在を知らしめるのも必要かもね。これ以上、不細工な女神像を造らせないためにも」

「ほ、本気かい？」

「ええ」

彼女の目は冗談を言っているものではなかった。

人形劇の中では、反逆した人間たちが神様に復讐をしようとして

いた。

女神の最後（2）

天井の採光窓に丸い月が輝いていた。

舞台の両脇に控えた少年合唱団が聖歌を歌う。古風な造りながらしっかりと反響効果を計算して建造された聖堂内に、幼い少年特有の澄み切った高音が厳かに響き渡る。大聖堂内に隙間なく押し込められた何千人もの教徒たちは、その歌声を聴きながら少しずつ神秘的な世界に心を落としていく。現世ではない神代の世界へと自らをトリップさせ、じっとその時を待つ。

大聖堂の周りでも、中に入りきれなかった教徒たちが胸に手を当てて、直臆不動の姿勢のまま神が降臨するのを待ち望んでいた。それだけではない。町中にいる全ての人々――昼間は陽気に踊っていた大道芸人も、物心もつかぬ子供も、病床に伏せる老人でさえも――誰もが一言も口を利かずにじっと時を待っていた。町は完全なる静寂に包まれている。

無論、彼らはこれが儀礼的なものだとは知っている。神様が本当に降りてくるとは思っていない。毎年行われる祭りのパフォーマンスに過ぎないと分かっているが、彼らは真摯な顔つきで神を待っていた。この町に住む人間、この祭りに参加するためにやって来た人々、全員が敬虔な信者だった。神の存在を理性では否定しながら、それでも神を信じたいと願う純粋な教徒たちだった。

十九時三十分。一度目の鐘が町に鳴り響く。

中央広場の噴水が止まった。広場の端に鎮座していた騎士風教会兵たちが一斉に立ち上がり、噴水の周りに集まる。長い棒状の神木を取り出し、噴水中央の神像の台座の差した。台座にはこのための穴があらかじめ開いていた。反対側に突き抜けるまで差し込み、突き抜けた側と差し込んだ側の神木の長さが同じになるまで、さらに押し込む。一本が終わるともう一本の神木を同じようにして差し込む。二本の神木は神像を持ち上げる“担ぎ棒”になった。

数人の教会兵が担ぎ棒を持ち上げる。噴水中央の神像が静かに持ち上がった。

「神の依り代を聖堂へ」

先頭の兵が音頭を取り、神像はメインストリートを通って大聖堂へと運ばれる。沿道の人々は神像が近くを通ると、胸に手を当てて小さな声で「創世の神の慈悲があらんことを」と呟いた。人々の呟きが細波となってメインストリートを流れる。

ゆっくりと焦らすように教会兵たちは通りを歩いた。大聖堂の外にいる信者を配慮してのことだった。彼らにとってはこれが神への唯一のお目通りである。いつも目にしていて噴水の神像とは言え、今夜だけは特別だった。これから神が現世に降り立つための依り代になる神像は、えも言われる神秘的な輝きを放っているように見えた。

大聖堂の前まで来た。二度目の鐘が響き、門が開かれる。

神像が大聖堂中央に敷かれた白い絨毯の上を進む。聖堂内の信者たちはその姿を見たいのを我慢しながら、うつむいてじっと目を閉じていた。合唱団の歌がクライマックスへと突入する。切なげな尾を引きながら歌が終わると同時に、神像は大聖堂正面舞台の上に着した。教会兵たちは退場する。信者たちは目を開き、舞台の上にある神像の姿を目にした。

舞台袖から教祖が現れた。白髪の老人である。長いローブを引きずりながら、教祖は舞台中央へと歩み寄る。神像の隣に立ち、胸に手を当てる礼をした後、信者たちの方に向き直った。

「今宵間もなく、一年の時を経て、再び創世の神が地上へと降臨しなされる。敬虔なる信者の諸君よ、我らの最大なる歓迎の意を持って神をもてなそう。――創世の神の慈悲があらんことを」

「創世の神の慈悲があらんことを」

何千人もの声が協和音となって聖堂に響いた。

蠟燭の炎が消される。天井の採光窓にも蓋がされた。暗闇の中、スポットライトで神像だけが照らされていた。聖堂が闇と静寂で満

ちる。聖堂の外にいる人々は時計の針を注視していた。神が降臨するとされている二十時までもう少し。あと数秒。

二十時。三度目の鐘がひときわ大きく鳴り響いた。

この後、本来ならば無数の花火が打ち上げられ、人々は喝采の中で後の祭りを楽しむ予定だった。実際、聖堂の外ではほぼその通りに事が進んでいた。いくつかの花火が上がり、通りにいた人々は直立不動の姿勢を止め、自由に動き始めていた。――大聖堂内で起こっている出来事など知らずに。

聖堂内にいる教徒たちは身動きがとれずにいた。儀式の途中だから動かずにいるのではない。何が起こったのか理解できずに固まっていた。

「こんにちは」

スポットライトに照らされた女性は、呑気な声で挨拶した。まるで友達の家を訪れたときのような軽い口調だった。

「今夜は私のために集まってくれてありがとう。こんなに盛大に出迎えてくれるなんて、神様冥利に尽きるわね」

二十時の鐘と共に起きたことを説明するところだ。

まず神像が消えた。持ち運ばれたとか舞台から落ちたとかではない。何千人もの目の前で、まるでマジックショーのように神像が舞台の上から蒸発した。教徒たちが驚く間もなく、今度は強い光が聖堂内を満たした。誰もが眩しさに目を閉じ、次に開けたときには舞台の上に見慣れない女性が立っていた、という次第である。

「色々と“神様っぽい登場”の演出を考えてたんだけど、考えれば考えるほど低俗になっちゃってね。例えばナルシスト同士の結婚式の新郎新婦入場みたいな感じ？ ゴンドラに乗って入場するとか、私には無理だから。だから出来るだけシンプルな登場にしてみたの。あなた達がせっかく用意してくれた石像は――色んな理由で邪魔だから消させてもらったわ。ごめんね」

エルナコの声は蛇腹状の壁によく反響した。教徒たちはまだ信じられないように、呆然と口を半開きにしたまま棒立ちになっていた。

「き、君は……いや、あなた様は」

スポットライトの中に教祖が入ってきた。声も身体も震えている。エルナコは「なあに？」と教祖に振り向いた。教祖はそれだけでビクッと怯えた子犬のように一歩後ずさった。エルナコは困ったように笑う。

「怖がらないで。取って食いやしないわよ」

「あ、あなた様は、ほ、本当に、神様なのですか？」

「そうよ」

「ま、まさか……こんなことが本当に……信じられ……いや、教祖の私が神の存在を信じなくてどうする……けど、本物が現れるなんて……」

エルナコは教祖の手を握った。教祖はまたビクッと身体を揺らした。慈愛に満ちた深いエメラルドグリーンの瞳が教祖を見つめる。それだけで教祖の心は不思議と安らいでいった。すぐに平静を取り戻し、恭しい口調でエルナコと話す。

「本当に、来てくださったのですね？」

「ええ。あなた達の真実の信仰心に導かれて」

「感謝します、神よ」

スポットライトの中、教祖はエルナコの前にひざまずいた。それを見ていた教徒たちはようやくエルナコの存在を認めた。

「創世の神の慈悲があらんことを！」

大聖堂の中は大音声に包まれる。聖堂での出来事は、すぐに外の人々へも伝えられた。もう祭りどころではない。人々は驚きと喜びで発狂したかのように大騒ぎした。

来年と再来年の分まで作っておいた花火が全弾打ち上げられ、露店は全店無料セールになり、酒場ではビールやワインやらスコッチやら、とにかくアルコールなら何でもいいやといった感じで、酒のかけ合いが始まっていた。頭からビールのシャワーを浴びて、信者の男たちはあらん限りの快哉を叫んだ。女たちも喜びのあまり恥など捨て、近くにいる者たちに片っ端から抱きついてキスをした。子

供たちは何が起こっているのかよく分かっていない様子だったが、大人たちが楽しそうなので、自分たちも楽しくなってきたて親の言いつけも守らずに夜の町へと飛び出して、皆と同じように踊ったり叫んだりした。

ただ、その狂乱の最中にありながら、無愛想な表情をしている者たちがいた。彼らは騒ぎから遠ざかるように路地に集まり、何やら話し合っていた。そんなあからさまな不審者たちがいれば、普通なら警備官が立ち入ってくるだろうが、今は警備官や協会兵すらも職務を忘れ神の降臨の喜びに酔いしれていた。勤務中であることなどお構いなしに酒を浴びるほど飲み、顔を真っ赤にして広場で浮かれ騒いでいた。

乱痴気騒ぎは一向に収まる気配はなく、翌朝太陽が昇るまで一晩中続いた。

女神の最後（3）

野宿もしくは寝ないという生活をずっと続けてきた私には、ホテルのベッドの柔らかさがどうにも馴染まなかった。もう五日もこのビジネスホテルに宿泊し続けているのだが、一度もベッドで寝たことはなかった。床に毛布を敷きそこで寝る。その方が私にとっては寝やすかった。

太陽が薄いカーテンを白く輝かせる頃、私は目覚める。ユニットバスの洗面台で顔を洗い、カードキーを忘れずにポケットに入れ、一階ロビーへと降りる。

「おはようございます」

タキシードをピシッと着こなしたフロントが、耳障りのいい挨拶をしてきた。よく教育されている。宿泊料金は平均より少し安めだったが、なかなか居心地の良いホテルだった。他に移らず五日間も泊まっていることがその証拠とも言える。

フロント横のレストランに入った。レストランには私以外にもちらほらと客がいた。私は壁際の席に座り、コーヒーが付いているモーニングセットを頼んだ。テーブルの上に置かれていた新聞を手にする。まるで出張に来たサラリーマンみたいだな、と苦笑しながら新聞を広げた。

『女神様を一目見ようと大聖堂に押し掛ける教徒たち』という見出しが躍っていた。隣には大勢の人々が大聖堂の門前に集まっている。白黒の写真が印刷してあった。人々は大聖堂の中へと入りたがっているようだが、門が施錠されている上に教会兵たちが道を塞いでいた。写真の下にはこう書かれている。

——この町における降神祭の歴史は古い。町外れの遺跡から発見された書物には、百年以上前から降神祭は行われてきたと記されている。しかしその百余回の降神祭は全てまやかしかつであったと言っても、

もはや過言ではない。今年行われた降神祭こそが、最初にして真の降神祭となったことは誰の目にも明らかである。神はいるのか？ 宗教関係者ならずとも全人類が頭を悩ませてきた命題に、六日前、決着がなされた。神はいた。創世の神は確かに存在した。上の写真はその女神を一目見ようと、大陸中からこの町にやって来た人々を写したものである。ただし、現在神への謁見は教会によって規制が行われており、一般信者が神を見ることは不可能な状況にある。

「おまたせしました」

ウェイターがモーニングセットを運んできた。私は新聞を畳み、横の椅子の上に置いた。

コーヒーを飲み、パンをちぎって口に入れる。私はガラス張りの壁を通して町の景色を眺めながら朝食を食べた。付け合わせのオレンジまで綺麗に平らげると、私は席を立ち出口へと向かった。出口近くにいたウェイターが「いってらっしゃいませ」と頭を下げた。

フロントにカードキーを預け、私はホテルから出た。

どこかに行く当てがあるわけでもない。ただ町を歩いた。他にすることなんてなかった。

彼女は今、大聖堂の中に閉じ込められている。彼女は名実共に人類の神様になった。私だけの女神ではなくなった。彼女は神様であり、私は特異な体質を持ちながらも、現状においては単なる一般市民でしかない。私も写真の中の人たちと同じように何度か大聖堂へと赴いたが、中に入れさせてはもらえなかった。数十億年の時を共に過ごした事実など教会兵に聞かせたところで、信じてもらえない。は思えない。

寂しさよりも不安感が私の身体を覆っていた。彼女の気紛れからこんな事態になってしまったが――これから私はどうなるのだろう。エルナコはこれからどうするつもりなのだろう。

町を歩いていると、『OPEN』の札がかかったバーを見つけた。こんな朝から開いている酒場も珍しい。時間つぶしには丁度良いか

もしれないと思い、私はバーの扉を開けた。

「いらっしやい」

店内ではマスターがテーブルを磨いていた。

「こんな時間から本当にやっているのですか？」

私はまだ半信半疑だったので聞いてみた。

「ええ。祭りは終わりましたが、まだまだ皆の興奮は冷めやらぬようです。早朝からも飲みたいと言ってくる客が結構いるので、しばらくは二十四時間開店状態ですわ。ほら、言ったそばから」

「おう、兄さん、ちよいと失礼」

私を押しのけて背の低いおじさんが店へと入って来た。ずかっとカウンターに座り「マスター！ビール！」と大きな声で注文した。マスターが奥へと入っていくと、おじさんは私の方を見た。

「兄さん、そんなところに突っ立ってないで、座ったらどうだい？ほれ」

バンバンと隣の席を叩く。断るのも失礼な気がしたので、私はおじさんの隣に座った。

「マウター！こっちの兄さんにもジョッキね！もちろん大で！」

「え？そんな私は……」

「いいからいいから、俺のおごりだ！一緒に女神様に杯を掲げようじゃないか！」

マスターが大ジョッキを二つ持ってきた。白い泡が零れるほどに注いである。おじさんは「創世の女神の慈悲があらんことを！」と叫んだ。ジョッキをぶつけ合う。カキンといい音がした。おじさんはぐいぐいと大ジョッキを一気飲みしてしまい、すぐに次の注文をした。私は何とか半分まで飲んだ。

女神の最後（4）

「いやあ、めでてえなあ、ホントめでてえ。俺っちが生きている間に女神様に会えるなんてなあ。今年の降神祭ほど、生きていて良かったと思ったことはねえ」

二杯目のビールも物凄い勢いで飲み干していく。おじさんの顔には早くも朱が差していた。

「兄さんは、この町の人間じゃなさそうだが、祭りを見に来た観光客かい？」

「まあ、そんなところですね」

「いいタイミングで来たなあ。神様が降りてくる時に観光に来るなんて、兄さんもなかなか神様に愛されているみてえだ」

神様と一緒に町に来たのだから、タイミングもへったくれもない。あまり騒がしい酒は好きではないのだが、エルナコのことをこまめに歓迎してくれる人を邪険に扱う気にもなれず、私は適当に相槌を打ちながらおじさんの話を聞いていた。

おじさんがビールから焼酎へと変え始めた頃。午前中だと言うのに、店には私たちの他にも客がちらほらと入り始めていた。誰もが乾杯の時に創世の神への感謝を忘れない。そして酒を飲みながら、嬉しそうにこの前の降神祭のことを語る。この町の人々にとっては、神が降臨したことが本当に嬉しくて堪らないことらしい。町の中心に大聖堂が居座っているあたり、この町は宗教都市としての色が濃いうだ。

「なあ、兄さんよ。さっきから酒が進んでないようだが――」

おじさんが怪訝な目をして覗き込んできた。私は奢ってもらった一杯目のビールをようやく飲み終わり、二杯目のジョッキに入ったばかりだった。それもほとんど口付かずで、店の熱気に当てられて少しぬるくなってしまうている。

「どうかしたのかい？」

「いえ、祭りの夜に飲みすぎたので、少し肝臓を休ませているだけです」

変に勘ぐられても困るので適当に誤魔化した。時間を潰しに来ただけなので、何杯も飲む気はなかった。

「そうかい、それならいいんだが……何だかあんまり嬉しそうじゃないから、もしかしたら反宗教団体の仲間かと思っちゃったよ。だが、違うな。兄さんはそういう雰囲気を持ってねえ。そもそも奴らの仲間ならこんなバーに来るわけがねえ」

「反宗教団体？ 何ですか、それは？」

「そのまんまだよ。教会に楯突く連中のことさ。神なんかいやしない。神がいるのなら、どうして救われない人たちがいる。そんな言葉を叫んで、経典や教会の教えなんかに反発している奴らのことさ。たまに教会関係者なんかと武力衝突も起こしている」

私は思い出した。祭りの日の大聖堂前のやけに厳重な警備。あれは、反宗教団体の暴動を警戒してのことだったのか。

「へえ。町の人全員が熱心な信者というわけでもないのですね」

「そらそうさ。どんな集団だって一枚岩とはいかない。捻くれ者はどこにだっている」

おじさんは不意に険しい目になった。酔っ払いとは思えない真剣な目である。

「その反宗教団体がなあ……どうもやばいんだよ……」

「何か問題でも？」

「問題も問題、大問題だ。奴らが主張していた『神はいない』ってのが真っ向から否定されちゃったからなあ。奴ら、ちよいとばかり危ない手段に出るかもしれないって、町の情報通の間じゃあもっぱらの噂だ」

「危ない手段……それってもしや……」

神の不在を主張していた者たちが、実際に神を目の当たりにした時、どういった行動を取るか。神様の存在を素直に認めるのならいい。しかし、そうもいかないだろう。彼らにも面子はある。そんな

簡単に自らの主張を曲げるのならば、初めから教会と対立したりはしない。彼らの信念を信念のまま保持するための方法は一つしかない。

「神を殺す？」

ぐっとおじさんは酒を呷る。返事はなくとも無言で肯定していた。「祭りの夜から裏でこそそこそと怪しい動きをしている奴らがいるらしい。素性の知れない男が町の裏門を通っているのを見たという話もある。間違いなく、反宗教団体の奴らが呼んだ武器商人だ。奴ら町の内外から武器をかき集めてやがる。どうやら、ドンパチを始める気満々らしいぜ」

「そこまで知っておきながら、どうして教会兵か警備官に報告しないのですか？」

「証拠がない。それに考えてみる。武器商人は町の門をくぐって来たんだぞ？ 門には門兵がいる。まともな門兵ならそんな怪しい男を黙って通すわけがねえ」

「……教会兵の中にも、反宗教団体の仲間が？」

「そういうこった。密告が反宗教団体の仲間バレれば、密告した奴の命も危ない。いくら神様のためとはいえ、教徒も自分の身が可愛いのだ。身体なくして信心なし、さ」

私は席を立った。料金をテーブルの上に置く。

「お、兄さん、もうお終いかい？」

「ええ。用事を思い出しまして。ビール、ご馳走様でした」

私は急いで店を出た。

大聖堂へと向かって走る。私は焦っていた。まずいことになった。気紛れ一つから、こんな事態にまで発展するなんて。反宗教団体がどれほどの規模なのか知らないが、強大な教会を相手に出来るということはそれなりの力を持っているのだろう。教会と反宗教団体の全面対決なんて事になったら、一般人にまで被害が及ぶ。死人が出る可能性もある。さすがにそれを黙って見過ごすわけにはいかない。彼女に――エルナコに早くこのことを伝えて、どうにかしてもらわ

なくては。

大聖堂の前に着いた。相変わらず教会兵が厳しい顔をして立っている。

私は息を切らしながら、教会兵に詰め寄った。

「エル——いや、神様に会いたいのですが」

「見たところあなたは一般信者のようですが、許可証などはお持ちでないですか？」

「いえ、ありません。ですが、どうしても神様に伝えたいことがありまして……」

「残念ですが。許可無き者を通すわけにはいきません。お引取りください」

鋭い眼光で睨みつけられたが、私は引き下がらなかった。

「お願いです。できるだけ早く伝えなければならぬことがあるのです」

「駄目です。謁見をしたければ教会事務局にて許可証を発行して貰ってください。一ヶ月もあれば発行手続きは済むでしょう」

「そんな……それじゃあ、間に合わない」

「おい、お前ら、ちよつと待て！」

大聖堂の中から動きづらそうな祭服を着た男が駆けて来た。どうやら偉い人らしく、教会兵たちは揃って敬礼をする。

「これは司祭殿。何でありましょうか」

「その人を中に入れろ」

「は？ いや、しかし、この者は許可証を持っておりませんか？」

「そんなものはどうでもいい！ これは神様が直々に仰ったことなのだ！ 早く門を開け！」

「は、はい！」

教会兵たちは急にしおらしくなって門を開けてくれた。

「すみません。とんだ失礼を。ささっ、こちらです」

司祭の男に案内されて、私は大聖堂の中に入った。

女神の最後（5）

意外にも質素だった。もっと絢爛で嚴重なものを想像していたが、エルナコが匿われている部屋扉は、木製で観音開きの至って凡庸な扉だった。金の装飾もなければ、鍵さえもかかっていない。司祭は私を扉の前まで案内すると「神はこの中にいらっしゃいます」と言い残して退散した

扉を開く。

部屋の中も扉と同様に簡素な造りだった。壁の一面に本棚があり、聖書をはじめとした宗教関連の本が隙間なく詰め込まれている。反対側には天蓋付きのベッドがあつて、豪華な家具と言えはそれだけだった。強いて言えば足元の絨毯が他の場所と比べて幾分か柔らかい。それくらいである。とても神の御座す場所とは思えない。

半開きのカーテンから風が差し込んでくる。レースのカーテンがひらりと舞った。エルナコは窓枠に手を乗せ、外の景色を眺めていた。

古臭いチュニツクの服は着替えされられ、今は純白のドレスを着ている。私はその姿を素直に美しいと思う。部屋はともかく、誰もが一目見ただけで納得するほどに彼女は“女神然”としていた。艶やかな長髪がカーテンに合わせるように波打つ。

彼女が振り向いた。変わらぬ微笑み。

「久しぶり。元気にしてた？」

「ああ」

本当は、彼女が側にいないと私は元気でなんていられない。まともな精神状態でいられない。こうして六日ぶりに会って、私は胸の底から彼女に対する強い郷愁のようなものが湧き上がってくるのを感じたが、拳を握り締めてそれを押さえ込んだ。今はそれどころではない。

「君に話しておきたいことがある」

「あら、何かしら？」

私は先ほどバーで聞いた反宗教団体の話をエルナコに聞かせた。エルナコは話を聞いている間は特に目立った反応はしなかった。

「そういうわけだから、こんな茶番はもう終わらせるべきだと思う。君なら時間を戻すなり、皆の記憶を消すなり、どうしても出来るだろう？」

「……………」

彼女は顎に手を当てて、窓の外へと視線を逃がした。私は返答を急かさず、彼女の言葉を待つ。

「…………人間が私を殺しに？」

「ああ。けど、今さら君の命が危険だなんて言わないよ。君なら銃弾の嵐の中だって平気で歩けるだろうからね。それよりも一般人が巻き込まれる方が怖い」

「ええ、そうね。その通り。でも——それはそれで寂しいわね」

「何がだい？」

「自分の身が心配されないっていうこと。私だってこう見えても女の子なんだから、誰かに守られたいと思う気持ちはあるのよ？」

「いや、その気持ちは分かるけど…………君は何だって出来るからなあ。今までだって私が逆に守られてきた立場だったし」

「…………分かった。私が“何でも出来る”からいけないのね。手を出して」

何だろう、と疑問に思いながらも、私は従順に手を差し出した。それを彼女の柔らかい手が握る。彼女は空いた方の手で自分の髪の毛を握った。音も無く、彼女の髪の毛の一部が切り落とされた。私は目を剥く。切り取った自分の髪の毛を、私の手首に近づけた。

しゅるり、と髪の毛が束になって私の手首に巻き付いた。髪の毛の密度が濃いため、まるで黒いブレスレットのように見える。一目では髪の毛だとは分からない。

「これは私の全て。たった今、私は普通の女の子になった」

「…………何だって？」

「私の神様としての全ての力を、この腕輪に封じ込めたの。だから、今の私は何の力も持たない。お腹も減るし、眠くもなる。走れば疲れる。銃に撃たれれば、簡単に死ぬ。二度とは蘇らない」

「馬鹿な！」

私は自分の手首に巻き付いた腕輪を外そうとした。しかし、どんなに力を込めても外れなかった。がっかりと私の手首に固定されている。

「無駄よ。ダイヤモンドカッターでもその腕輪は切れない。神様の力が全て圧縮されているんだもの。人間の力では外すことは無理」
「じゃあ、どうやって元に戻すんだ！ 君はもう何の力も持たないんだろう？ 私にだって無理なら、この腕輪を外して力を解放することは不可能じゃないか！ ……そうだ。私の腕を切り落とせば」

「それも無駄よ。あなたの身体から腕輪が分離した場合、自然消滅するようにしておいた。そうすれば、本当に二度と神様の力は戻ってこない。あなたが死んでも同様」

「どうしてこんなことを！ 君の命が危険に晒されるだけじゃないか！」

気紛れにも程がある。今までも彼女の思考回路についていけないことは何度もあったが、今回がその極致だ。何でこんなことをしたのか、全く見当が付かない。

「知りたい？ どうしてこんなことをするのか？」

「あ、ああ、もちろん」

「じゃあ、頑張りなさい。頑張つて、私とあなた自身の命を守りなさい。それが達成されたとき、あなたはきっと全てを理解し——そして、“最後の権利”を手に入れることができるでしょうから」

エルナコの瞳を横切った一瞬の逡巡と決意を、私は見逃さなかった。

間もなくして司祭が部屋に入ってきて、謁見の時間が終わったことを告げた。エルナコにはやってもらう仕事は山ほどあるらしく、私一人に長い時間は割けないそうだ。私は混乱した頭のままで部屋

を出た。

女神の最後（6）

二人の警備官が町を巡回していた。片方は垢抜けない顔をした新人。もう片方は定年退職が近い老年の巡査長だった。

「巡査長」

大聖堂近くの細い通りを歩いていると、新人が足を止めた。

「何だ？」

「その建物の陰で……」

閉店した古着屋と大手チェーンデパートのビルの隙間を指差した。そこでは数人の乞食がデパートの廃品を漁っていた。私的な廃棄物を許可無く持ち去ることは当然ながら違法行為だ。巡査長は溜息を一つ吐き、路地裏へと入っていく。

「君たち、何をしとるのかね？」

乞食たちは巡査長の声を聞いただけで怯えた顔になり、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

散らかったゴミを片付けて、二人は巡回に戻った。

「最近ああいう人たちが増えた気がしますね」

「金持ちがいれば貧乏人もいる。仕方のないことだ」

「……神は貧乏人をお救いにならないのですか？」

やや皮肉めいた言葉だった。巡査長は眉根をひそめる。

「神を冒瀆するような発言は控えた方がいい」

「すみません。――ですが巡査長、これは私見ではありません。この町の恵まれない人々ならば誰もが感じていることです。この町が神のお膝元となってから一週間以上が経ちました。しかしそれで、何かが変わったでしょうか？ 相変わらず乞食は町を徘徊していますし、難病の人は苦しんだままです。神が近くにいるというのに、結局は何も変わらない。神に対する不信感確実に蔓延して来ます」

「言われなくとも分かっておる。だからこうしてパトロールを強化

しているのではないか。もうすぐ定年を迎える老人まで引っぱり出して、警備官が総出で町を巡回しているのだ。文句を垂れる暇があるなら、一人でも多くの人間をお前の手で救えるように努力せい」

「……はい」

二人は大聖堂の前に着いた。これで町を一周したことになる。

「五分間だけ休憩だ。一服したら別ルートでもう一回り行くぞ」

門の前の詰め所に二人は入った。備え置きのカップから紅茶を注いで飲む。巡査長は椅子に座って紅茶を啜りながら、詰め所の窓から町の様子を見た。

先ほどとは別の乞食たちがメインストリートの路肩で焚き火を囲んでいた。街中での焚き火も禁止行為だが、巡査長はそれを見守る気にはならなかった。彼らには家もなければ今日の夕食を買うお金さえない。そんな彼らが寄り添いあって一時の温もりを享受し合っているのだ。余計なことをして彼らの安らぎを妨害するのも酷だと思った。

「……確かに神は無能かもしれない。だが、人を救うだけが神じゃなかろうて」

呟いた声は新人に聞こえていただろうか。新人は何も反応しなかった。

「さあ、そろそろ行くか」

二人が詰め所から出たそのとき——くぐもった発砲音が響いた。

「何だ!」

巡査長は咄嗟に腰のホルスターから拳銃を引き抜いた。

続けざまに銃声。誰かの悲鳴も聞こえた。

「大聖堂の中から聞こえたぞ!」

懐から鍵を取り出して門の鍵を開けた。それと同時に巡査長の後ろから誰かが駆けてきた。路肩で焚き火をしていた乞食の一人である。乞食は巡査長を突き飛ばすと、開いた門から大聖堂内へと入って行った。

「だ、誰だ! おい、新人! 奴を捕まえろ!」

「はいっ」

新人は銃を構えた。銃口を乞食の身体――ではなく、巡査長の頭に向けた。

「な、何のつもりだ？」

「すみません、巡査長。自分は無能な神に耐えられないのです」

新たな銃声が生まれた。巡査長は膝を付くようにその場に倒れた。額に空いた穴から血が流れ出して、門の前の地面を染めた。

「今だ！ みんな来い！」

近くの建物から一斉に男たちが飛び出してきて、門の中へとなだれ込んだ。彼らの手には軍事国から横流しした銃器が握られていた。大聖堂内がにわかに騒がしくなる。新人はある程度の人数が門をくぐったのを確認すると、巡査長の死体から鍵を奪い取って、自分も大聖堂内へと駆けて行った。

私が駆けつけたときには、大聖堂はすでに反宗教団体の武装グループによって占拠されていた。建物の周りには警備官が集まり、警戒態勢を敷いている。さらにその周りを野次馬たちが囲んでいる。大聖堂にこんな人が集まったのは降神祭以来だろう。私は野次馬の一人となって大聖堂の様子をうかがっていた。

しばらくした後、大聖堂の正面扉から一人の男が出てきた。警備官たちは一斉に銃を構える。しかし、その引き金が引かれることはない。男は隣に司教を連れていた。私をエルナコの部屋に案内してくれたあの司教だ。男は自分の銃の銃口を司教のこめかみに当てていた。司教は両手を挙げたまま今にも失神しそうなほど怯えていた。「警備隊！ まずは武器を降ろせ！ 俺の言う事に従わなければ、即刻この男を殺す！」

男は大声で叫び、銃口をこめかみにめり込ませた。司教は「ひい」と涙顔になる。

警備官たちは已む無く銃口を下げた。一刻も早く大聖堂内に突入

したいのはやまやまだが、まずは目の前の人命が優先だ。

「次は門の前に停めてある邪魔な車をどかせ！　すぐにだ！」

大聖堂を包囲するように停めてあったパトカーのうち、門の前に停めてあったものだけが移動した。門の前に道ができる。

「よし。準備はできたようだな。ここからの話は、警備隊ではなく、野次馬の諸君に聞いてもらいたい！」

集まっていた人々は騒然となった。よもや自分たちに矛先が向くなんて思っていなかったからだ。怯えてちらほらと帰り出す人もいたが、大半の野次馬たちは一抹の不安を抱きながらも、とりあえず話だけでも聞くことにしたようだ。

「いいか諸君！　我々はこれより大聖堂にて“神殺し”を決行する！」

ざわめきが一気に大きくなった。

「神は実在した！　確かにそれは揺ぎ無い事実だ！　しかし！　神が存在したところで、我々の生活は良くなっただろうか？　この幾日かの諸君らの生活を思い出して欲しい！　何か一つでも好転しただろうか？　いや！　何も変わりはない！　諸君らが信じてきた神は、諸君らに何一つとして恩恵を与えたりしないのだ！　そんな神をこのまま崇め続ける必要などあるだろうか！　このまま生かしておく必要などあるだろうか！　いや！　ない！　必要のなくなつた神など人々の崇拜を貪る害悪にしか成り得ない！　ゆえに、我々は神を殺害する！　創世の神を、人間の手によって抹殺する！」

人々は顔を見合わせて小声で話し合った。反発するような声が多数だったが、その中に混じって「確かに」「その通りだ」「神は不要かもしれない」などと、武装グループを支持するような声も聞こえた。

詭弁だ。彼らの言っていることは一見正しいように聞こえるが、決定的に間違っているところがある。そもそも神は――エルナコは無償で人間に手を差し伸べるような存在じゃない。エルナコと長い間一緒に旅をしてきた私だから分かる。

彼女は人間を愛している。自分が創り出した全てを愛している。

だからこそ何もしないのだ。黙って見守ることこそが最大の愛情表現だと彼女は知っている。神様の力に頼ってはいつまで経っても成長しないと分かっている。彼女は自分の子供のような人間たちを、独り立ちさせようとしている。生も死も、貧富も差別問題も、全て人間に解決させようとしている。人間の力を信じ、人間の意志を尊重しているのだ。

だというのに、奴らは『自分たちが苦しんでいるのは、神が助けてくれないからだ』など自分勝手な言葉を吐き、あまつさえ責任を神に押し付けようとしている。

「さあ、諸君！ 我々と共に神が死ぬ瞬間を見届けようではないか！ 歴史が変わる瞬間を、その目にしかと焼き付けようではないか！ 我々是我々の考えに賛同する者を歓迎する！ 世紀のショーが行われる舞台に案内しよう！ 遠慮なく大聖堂内に入ってきてくれたまえ！ 警備隊に所属する者でも、武器を放棄するというのはなら中へ入ることを許可しよう！ くれぐれも武器を隠し持って侵入しようなどという気を起こさぬように！ 我々としてそのための予防線は張っている！」

金属探知機でも設置しているのだろう。さすがに用意周到である。男は扉を開いた。門の前から大聖堂内までの道が完全に繋がった。なんと大胆不敵。警備隊がその道を通って突入してくる可能性を理解し、そのうえで道を開き賛同した人々が入ってくるのを待っているのだ。ここまでであからさまにやられては、警備隊も迂闊に動けない。何か裏があるのではないかと疑ってしまうからだ。

誰もが動けずにいた。警備隊は罨を警戒している。野次馬たちは男の言葉に心を動かされつつも、やはり武装した集団の中に入っていくことには躊躇せざるを得ないようだ。

「さあ、誰か！ 誰か共に世界変革を成し遂げようと思う者はいないか！ ……おっ？」

野次馬の中を抜け出し、私は門の前に立っていた。大聖堂に向か

って歩き出す。何百人もの視線が私に集まっていた。警備隊の中からは「止まりなさい!」という制止の声も聞こえた。

「素晴らしい! そうでなくては! 君は実に勇気のある青年だ!」

私は扉の前まで来た。司祭は私の顔を恨めしそうに見ていた。男が嬉しそうに握手を求めてきたので、私は作り笑いを浮かべてそれを握った。

「一人! まずは一人だ! 我々の考えに賛同する人間は確かにいるぞ! さあ、他にもいないか! 人間に銃を突きつけられて、神が命乞いをする姿を見たい者はいないか!」

ややあって、ぽつりぽつりと野次馬が動き始めた。本心では神殺しの瞬間を見たいと思ってる者は沢山いたのである。ただ、自分が最初の一步を踏み出す度胸がなかっただけだ。私がこうして先陣を切ってやれば、案の定、門をくぐる人数は増え、やがて大勢の人間の列になった。

こうなっては警備隊も止めようがない。しまいには、警備隊の中からも銃を捨てて列に加わる者さえ現れて、完全に収拾がつかなくなってしまうた。

列に並ぶ者たち全員が男の言葉に賛同したわけではなからう。長年慕ってきた神を、たった一度の演説で見限るほどこの町の人たちは冷酷ではない。おそらく大半の人たちが、単純に“神の最期”を見たいがために列に加わったのだ。好奇心と、あとは責任感。信じていたからこそ最期を見届けたいという信仰の現れだ。

しかし、私にとってはそんなことどうでもいい。とにかく中に入れたのだ。彼女の――エルナコを救うための第一関門を突破したのだ。

私は自分の手に巻き付いている黒く細い腕輪に目をやった。

――頑張って、私とあなた自身の命を守りなさい。

「……今助けるから、エルナコ」

武装グループの仲間につれて、私は大聖堂ホールに到着した。

女神の最後（7）

例えば、木の葉が舞い散る並木道を何も考えず歩いているときの幸福感。例えば、誰もいない屋上で無数の星たちを見上げているときの充足感。例えば、草原の真ん中で柔らかな大地に抱かれながら大の字に寝ているときの安心感。

彼女が側にいるということは、つまりそういうことだ。

勘違いしてもらいたくないのは、私は彼女に対して、俗に言うところの“愛”を感じていないということだ。この“愛”という言葉のニュアンスは国や地域、究極的に細分化するならば個人によって異なるが、今ここで言う“愛”とは単純に“生殖活動への準備段階”だと思ってくれればいい。

いやさ、確かに私はこれまでに何度も、彼女のその細く柔らかな身体を自分の腕の中に収めたいと思ってきたが、それは生物としての愛に帰結されるものではない。言い訳がましいが、違うのだ。私と彼女の間には初めから——あの天高くに浮かんでいた小部屋にいたときから、今この時——大聖堂で彼女を助けようとしているこの瞬間まで、一度たりとも、“男と女”としての感情が入り込んだことはなかった。

だがしかし、性欲が排除されたからと言って、禁欲的という訳でもないのだ。私は常に彼女の側にいたいと狂氣的なまでに願っていたし、おそらく彼女も私を自分の支配下に置いておきたいと強く思っていたことだろう。——そのことが、今なら分かる。私たちは互いを激しく求め合いながら、決して交じり合おうとは思っていないかった。ベクトルの矛先は互いの身体を指し示しているのに、一向に加速しないグラフ上の質量点同士のようなようだった。何かしらの斥力が私たちの間には働いていて、それが私たちを接触させないでいた。

結局のところ、その“斥力”という奴が今回の騒動の原因なのか

もしれない。斥力というと分かりにくい、B級ドラマ的に表現すれば“些細なすれ違い”という奴だ。現在の状況に対する認識の違い、と換言してもいい。

彼女と私では、見ている世界が違っていたのだ。

当然といえば当然である。神様と一般市民が見ているものが同じであるわけがない。創造者と被創造者が同じ目線で世界を見つめるなど有り得ないことだ。けれど、それでも私は彼女と同じ目線に立ちたいと思っていた。不可能であると認めつつも、一歩でもいいから彼女の立つ頂に近付きたいと思っていた。本能に近い欲求だった。金持ちの彼女と付き合っている貧乏な男が、彼女に釣り合う男になるために涙ぐましい努力をするのと同じだ。男の細胞に刷り込まれた悲喜劇的な性質と言ってもいい。

凡夫が神様と釣り合う存在になるためには、果たしてどうすればいいのか？

答えは見つからない。きつと永遠に。だけど探し続ける。探求をやめるのは私の意識が途切れたときだけだ。死んだときだけだ。証明できない問題を命果てるまで解き続ける数学者には尊敬の念を覚えずにはいられないが、私は自分自身のそういった無益な行動に対して一片たりとも自己満足を覚えたりはしない。ただし自己嫌悪も感じない。胸の中にある素直な欲求に従っているだけなので、偉いとも馬鹿らしいとも思わないのだ。敷かれたレールの上を走る電車は偉大だろうか？ いや、たいして偉くもない。本当に凄いのは、山を切り崩し大地をならし、枕木と鉄のレールを運んだ人間たちだ。つまり、私は電車だ。

さて。

壇上で武力グループのリーダーが何やら偉そうな話をしているのを信者席で眺めながら、私はそのような思考を頭蓋骨の内側で好き勝手に滑らせていた。何をいわんや、反宗教団体のリーダーの話な

どまともに聴く気にはならなかったからだ。私は一番最初に大聖堂に入り、最前列の席に座って、あたかもリーダーの話に食い入っているように前傾姿勢をとっていたが、実際にはリーダーの口から発せられる全ての単語を鼓膜の一枚外側の空気膜で跳ね返していた。

一言たりとも、自分の脳に彼の言葉を侵入させたくはなかった。彼女を攫った男の発する声などで、自分の脳を汚されたくはなかった。

エルナコは壇上にいた。舞台の真ん中――そう、降神祭の儀式のときに神様の像が置かれたあの場所だ。彼らにしてみれば皮肉なのだろう。神様が降臨した場所で神様が殺される。そういった劇的効果を狙ったことだろう。そもそもが、こんな大聖堂に人々を集めたのも、自分たちが目立ちたいがためだ。彼らは今まで陽の光を浴びることなく、アンダーグラウンドでひそかに活動していた。鬱憤が溜まっていたに違いない。彼らは自分たちが異分子だと理解していたのだ。だからこそ、今までずっとチンケな小競り合い程度の反抗しかしてこなかったのだ。揺らいでいた自分たちの正当性が、ようやく証明できる時分になって、彼らは意気揚々と表舞台へと飛び出した。そしてこんな馬鹿げた騒動を起こした。

彼らに対しての怒りがふつふつと足元から沸き上がってきていたが、今はその怒りは棚上げしておく。今問題にすべきは“どうやって彼女を助けるか”の一つに絞られる。

彼女は縄で縛られていた。手首と足首をそれぞれ縛り上げられ、正座をしながら手を後ろに回されている。口はガムテープで塞がれ、目にはアイマスクが被せられている。まるで拷問を待つ囚人だ。私はその姿を見ているだけで、心臓がぐいぐいと圧迫されているような苦痛を覚えた。膝の上に乗せた手をきつく握り締め、今にも爆発しそうな感情を、奥歯が陥没するまで口を噛み締めながら我慢する。一刻も早く彼女を助きたい。

しかし、タイミングがつかめなかった。どれだけ私が義憤に燃えていようと、機関銃の掃射を受ければたやすく死ぬのだ。怒りで反射神経は鋭くなるかもしれないが、肉体の構造までは変わらない。

脳髓を細切れにされれば意識はなくなるし、全身に無数の穴が開けば生命活動を維持することはできない。私は眠くもならないし腹も減らないし歳も取らないが、死なないわけではない。今まで死んだことがないので証明はできないが、確信はある。私は普通の人間と同じように、殺されれば死ぬのだ。

当然、死に対する恐怖心もある。死んだらどうなるのか。まさか夜空のお星様になるなんて御伽噺を信じてるわけではない。人間は死んだら土に還る。それ以上でもそれ以下でもないことを私に植え付けられた知識が語っている。ひどく理知的で無慈悲な解釈だが、天国や地獄といった宗教的で荒唐無稽な話を信じるよりかは、いくらか安心できる。人間が科学を求めたのは、結局神や悪魔から逃げたかったからなのだろう。夜の闇に潜む羊頭のデビルを駆逐するために、某天才発明家は電気を光に転換した。同様に、死の恐怖と出鱈目な幸福論を払拭するために、人間は自分たちの構成元素を解析し「人間は死んだらタンパク質やカルシウムなんかに分解されるんだぜ」という事実を広く普及させた。

「――ああ」

私は目を閉じて額の前で手を組んだ。

怖い。私は自分が死ぬ事が怖い。どれだけ科学が発展しようとも、仮にタイムマシンが発明されて過去未来を自由に行き来できるようになろうとも、自分の未来や過去を好きなように眺めたり改変できるようにになろうとも、死が怖いのだ。機関銃に蜂の巣にされるのが、怖いのだ。鉛弾が肝臓の横に突き刺さり、筋肉を突き破り血管を破裂させ骨髄が流れ出す想像をするだけで、私の身体は抗いがたい拒否反応を起こすのだ。

自分の身を危険に晒すことなんて、ロボットだってしない。アイザック・アシモフに笑われそうだ。

でも。

私が自分の身を可愛がって、何も行動しなければどうなるか？

彼女が死ぬのだ。

誰よりも、何よりも大切な彼女が、死ぬのだ！

ジレンマの奔流が信者席の後ろから津波となって私を飲み込もうとしているような感覚に襲われた。いつそのこと、濁流に飲み込まれて上も下も分からないような状況になって、全てをリセットしてくれればいいとも思う。第三者から見ても、私自身から見ても、明らかな現実逃避だ。現実逃避の末路は後悔と悲劇に決まっている。それでも逃げ出す人が後を断たないのは、逃避行があまりにも魅力的だからだ。一步踏み外せば自分もその道に落ち込んでしまいそうだった。臆病者のレッテルを背中に張られて、死ぬまで後ろ指を差されながら生きていく人間に墮落してしまいそうだった。

駄目だ。

そんなの駄目だ。

私は彼女が大切で、私は自分自身に最低限の矜持を持たせておきたいと思っている。実現できるかどうかはともかく、そう思っているのだ。私がいまだに何もかもを諦めて脱力せずにいられるのは、要するに私の中の矮小なプライドが腹を立てているからだ。

お前はその程度の人間なのか？ まったく、君には絶望させられる。君が本当に、本当に大切な人を守りたいと思っているのなら、悩む前に行動したまえ。床を踏みしめ、腕を振り、君が持っているなけなしの勇気を振り絞って、彼女のために自分の命を投げ出したまえ。冷徹な銃口の前に自分の身体を晒し、彼女に向けられている幼稚な悪意を振り払え！

勇気はあったか？

知略はあったか？

彼女を救うだけの力が、私の二の腕には秘められていたか？

何一つとして、ありはしない。

私は、信者席から立ち上がり、舞台に上がった。

女神の最後（8）

案ずるよりも産むが易しという言葉は、未来永劫変わることにない真理であるように思う。悩んでいる暇があったら一步でも進んだ方がマシ、というひどく実利的な考え方はその人のIQ如何に関わらず同様に効果的だ。私が天下一の愚か者であれ、奇跡的な配合から誕生した天才であれ、行動を起こしたことは評価してもらいたい。「何だ、お前は」

武装グループのリーダーは唐突に舞台に登場した私に対して、明白な不快感を露にした。無理もない。気持ちよく演説していたところを邪魔されたのだ。おそらく彼自身の人生において最も輝いていた瞬間に横槍を入れたのだ。問答無用で銃弾の嵐を浴びてもおかしくはなかったが――幸運にも彼らはそれなりに道理をわきまえているらしかった。舞台袖の仲間たちは咄嗟に警戒態勢を取ったが、引き金を引くまでには至らなかった。まずは様子を見ようという判断を取ったらしい。銃を握る人間としては甘い考えだが、私としては好都合である。

「話をしたい」

私は出来るだけ中立的な態度をとるように努めた。敵意剥き出しで敵陣の真っ只中に突っ込むほど無謀ではないし、敵に媚びへつらえるほど腰が低くもなかった。まずは彼の警戒を解かなければならない。

私が今、唯一持っているカードは「この場にいる」というものだ。このカードは二つの価値を持つ。ブラックジャックのエースのように。一つは再三言っているように、彼女の側まで接近できたという価値。とにかくにも彼女の近くに行かなければ何も進展しない。

もう一つは、彼らが私を「自分たちの考えに賛同している人」だと思っている事である。いわば、私と彼らは同志なのだ。神を嫌い、神を殺すことを望む、反宗教的使途の一員なのだ。少なくとも、表

面上は。

引き金にかかった指がむやみに引き絞られなかったのも、彼らが私のことを仲間だと思っていることが理由の一つになっていたのだろう。大聖堂前の演説を聴いて同調してくれた人間を――さらに言うならば真っ先に群集から一步を踏み出してくれた人間を、衆人環視の場で撃ち殺せば、武装グループに対する恐怖感や不信感が一気に吹き出す。騒動が起きて収集が付かなくなる可能性もある。

「何の話だ」

「神がいなくなった後の世界について」

「何？」

舞台上の三人――私とリーダーと、その中間にいるエルナコー――に、何百もの視線が集まっていた。私が舞台に姿を現したときに一瞬だけ騒然となったが、今は誰もが固唾を呑んで事の成り行きを見守っていた。これは非常にデリケートな問題なのだという共通認識が空気中に万遍なく漂っていた。物音一つすら立ててはならない。汗の滴すら垂らしてはならない。そういった雰囲気が大聖堂ホールを満たしていた。

「あなたは神を殺そうとしていますね？」

静寂のホールに、私たちの言葉はよく反響した。

「その通りだ」

「その動機は『神がいても何の意味もない』というものですね？」

我ながら、裁判における検事のような口調だった。

「まったくその通りだ。俺たちの考えを理解してくれているように、何よりだ」

「私もあなた方の考えの“一部”には賛同しています。神がいても私たちの生活に何の変化もないということは、疑いようのない真理だと思います」

私はチラッと眼球だけを動かして、エルナコを見た。目と口を塞がれて表情は分らない。しかし耳栓をされている様子はなかった。ので、私たちの会話は聞こえているだろう。できることなら彼女の

少し不貞腐れた反論を聞いたかった。余裕のある笑いを浮かべながらも憤りを滲ませた皮肉たっぷりの言葉を聞いたかった。

「だろう？　なかなか話が分かる男じゃないか。もう少し早く出会っていれば、俺たちは本当の同志になっていたのかもしれない」

「ええ。それはとても素敵な仮定ですね」

思わず口に出た露骨なあてすこりに、リーダーの男は皺を寄せた。「神がいても何の意味もない。確かなことです。神がいても世界は“フラットな状態”を保ったままです。一向に上昇気流は吹かず、人間は地べたを這いつくばり、貧困は解消されず、不幸な人間は不幸なままです。――ですが、私は思うのです。いや、想像するのです。もしも、神がこの世界から消えたとき、神が殺されたとき、果たして人間はフラットな状態を保ったままでいられるか、と」

「……何が言いたい？」

男の指先にほんの僅かな力が加わった。何か下手なことを口にすれば、薬莖内のガンパウダーが爆発し、弾き出された弾頭が私の眉間を撃ち抜くことは容易く想像できた。私の背中に気持ちの悪い汗が伝った。ここに来て、また恐怖がぶり返してきた。足が震えてきた。膀胱が弛みそうだった。私は我慢した。我慢するより他になかった。退路はない。ちっぽけでくだらない勇氣と矜持を振りかざして、敵の間合いへと一気に詰めるしかなかった。

「神を殺せば世界は崩壊する」

信者席がさざめいた。

リーダーの男は口を歪め「ほう」と演技がかった相槌を打った。

「その根拠は？」

身体が恐怖を感じて今にも発狂しそうだというのに、喉奥から咳き込むような笑いがこみ上げてきた。根拠？　根拠とこの男は言ったのか？　何がそんなに可笑しいのか自分自身にもよく分からな

った。だけど可笑しかった。

私は大声を上げて笑った。

大聖堂の壁を小気味よく跳ねて、私の笑い声は信者たちと武装グループを四方八方から包囲した。やもすると大聖堂の外にいる警備隊にも聞こえたかもしれない。いやいや、もつとすると、この星の反対側で泣いている誰かさんの涙を吹き飛ばしたかもしれない。リーダーが呆気にとられてポカンと口を開けていた。その顔が面白くて私はさらに声を張り上げた。エルナコの肩がわずかに震えていた。きっと、彼女も笑っているのだろう。私たちはまともな人間たちの理解の範疇を超えたところで、快活に笑っていた。

旅を、思い出そう。

ゆつくりと慎重に。地雷原を進む少年兵のように。

私は雨の降りしきる雲のドームの中で誕生した。

一つの国が滅ぶ悲劇と、一つの国が復興する過程を見届け、一人の人間の果てしない強さを知った。

何の変哲もない道を歩き続けた。何の変化もない毎日の、何気ない風景の大切さを知った。

対立する人間同士の、戦争の論理のような解決策のない争いの中で、私自身の未熟さを知った。

自分以外の誰かの命を救うことの難しさを知った。

大したことのない旅だった。

自伝小説を書くには少々物足りない内容だ。

でも、私は多分、生まれた直後よりも、ほんの少しだけ成長した。雨に濡れそぼつ異性を傘の中に招き入れる少年少女のような頼りない歩幅で、私は前進した。

とても貴重な前進だと思う。

「根拠は、あなたの目の前にあるじゃないですか」

顔が凝り固まって上手く話せなかった。笑い続けたせいで頬と腹筋が痛かった。限界量の声を出したので喉も痛かった。

「……お前は」

リーダーは怯えたような口調になっていた。異星人にでも邂逅した人類のように、不安定に瞳が揺らいでいた。当然の反応だろう。私だって、今の私のような人間が目の前にいたら同じ反応をする。

「何者なんだ？」

私は彼女に近付いた。皮膚を傷つけないように優しくガムテープを剥がす。それでもエルナコは、口が動くようになった途端に「痛い。もっとゆっくり剥がしてよ」と文句を言った。久しぶりに聞く彼女の声は、やはり良い。彼女の声が鼓膜を震わすだけで、細胞が歡喜に震えた。

「おい！ 何をしている！」

リーダーが銃口を私に向けた。すぐにでも撃てばいいものを、私に対する恐怖感をまだ引きずっているようで、なかなか指が曲がらない。

私はアイマスクを外そうとして、手を止めた。「ちょっと待って」
とだけエルナコに言って、銃口へと近付く。私が一歩近付くたびに、男も一歩後退した。

「私は――」

今にして思えば、最初に気付くべきだったのだ。

でも――最初に気付いてしまったら、エルナコとの旅はなかった。彼女との波乱に満ちた旅をすることはなかった。そういう意味では、私は絶妙のタイミングで気付けたのかもしれない。今なら、彼女の

ヤキモキした気持ちが分かる。彼女がときどき不安定になっていた理由も分かる。彼女は不安だったのだ。私がいつになったら気付くのか——気付いてしまうのか。旅の終わりと結末が、明日にでも訪れやしないかと、彼女も怯えていたのだ。

きっかけと根拠は私自身だ。私という存在そのものだ。

立志という言葉がある。元服を迎えた子供たちが大人になるために通過する儀礼のようなものだ。私は外見こそ大人だが、年齢的にはまだ一歳にも満たない。私は子供だった。『だった』。そう、今は違う。私はまさに今、立志を迎えたのだ。私の精神と肉体が、この世界に馴染んだのだ。馴染む、というのは非常に厄介な性質である。どんな天才でも、物事や風習に馴染むためには絶対的な時間が必要だ。もちろんその時間は常人よりもだいぶ短いだろうが、それでも一瞬ではない。必ず相応の“時間”が必要になる。

私にとっての“時間”が、彼女との旅だった。

エルナコとの旅によって、私はこの世界に、自分自身の存在を認めることができた。

逆に言えば、世界が私を受け入れてくれた。エルナコが創ったこの世界に、私という存在がカウントされたのだ。+1。ピコンツ、と音を立てて——たった今、この世界に一つの存在が追加された。

世界と自意識。客観と主観。二つの視点から自分自身を観察することによって、私はようやく自分の存在を理解した。

——お前は何者なんだ？

お答えしましょう。私は——

「私は人間です。ただし、あなた方よりもほんの少しだけ、高次元

女神の最後（9）

誰かさんたちの声が聞こえる。

「おい、正解が出たぞ」

「うん。どうやら今回は成功みたいだね」

「ああ、良かった。エルナコちゃんが死なずに済んで。エルナコちゃんが神様を放棄したときはどうなることかと」

「私は最初から信じてたけどね」

「本当か？ まあ、いい。これでようやく俺たちの肩の荷も降りるわけだ」

「長かったですね」

「そうだね。僕たちにとって時間なんてたいした意味もないけど――それでも長かった」

「さあ、エルナコ。それと“お前”。さんざん世界を扇動したんだ。放棄した力は戻してやるから、ちゃんと尻拭いをしてこい。こっちに来るのはそれからだ」

「お前は何を言っているんだ！ それがどう世界の崩壊と繋がると言うのだ！」

「分かりませんか？ いや、分かりませんよね。多分、一年かけて説明したって、あなた方には分かりやしないでしょう。この次元に生きるあなたには。――これだけは言っておきます。あなた方は、平面上に描かれた二本の直交線の延長線上に過ぎない、と」

「訳が分からんことをぺちゃくちゃと――お前は良い理解者だと思

っていたが、もう我慢がならん！ お前ら！ やっちまえ！」

武装グループたちの銃口が一斉にこちらに向けられた。引き金が引かれる。無数の弾丸が私たちに向かって発射された。

次の瞬間、私の腕に巻かれた腕輪が強烈な光を放って霧散した。全てが光に包まれる。

「やっと全てを知ったのね」

白い光の中に、エルナコが立っていた。縄は解かれている。アイマスクも外されている。虚空の真ん中で、エルナコと私の二人は、宣誓前の新郎新婦のように向き合っていた。

「ああ。待たせてごめん」

「あなたは約束を果たした。矮小な勇気を振り絞ってこの場所までやって来て、私のために命を投げうった。結果としては“あの人たち”に救われた形になったけど、それでも私はあなたのその勇気を褒め称えたい」

「ありがとう」

「礼を言うのはこっちだわ。これで、私は夢を叶えられるもの。――さあ、あなたに最後の権利を与えましょう。“私と共に生きる”権利を」

勿論、それが物理的な誓約だけではないと分かっている。私はこの瞬間に、彼女と同等の力を得た。この世界の全てを書き換えることのできる力だ。

光が消えた。

私たちは先ほどまでと同じように壇上に立っていた。無数の銃弾がこちらに飛んで来ている。今の私にはひどくゆっくりに見えた。箸で掴めそうな速度だ。ああ、エルナコはこんな世界を見ていたのか。なるほど、考え方が違って当たり前だ。

私とエルナコは同時に腕を振り払った。

飛んできた銃弾は私たちに到達する前に跳ね返され、聖堂の床に

落ちた。パララツと雨粒が傘を叩くような音がした。

武装グループたちは何が起こったのか理解できず、次の弾を撃つ事もできずに固まった。

「さあ、あの人たちの言ったように後始末をしなくちゃね」

「ああ。具体的にはどうする？」

「どうしたい？」

「君に酷い目を合わせた奴らだ。少しばかりお仕置きをしないと気がすまないな」

「同感」

お互いに嫌な性格だ、と改めて思った。

長々と描写するにはあまりにも退屈な内容である。かいつまんで話そう。

私たちはまず武装グループたちを残らず駆逐した。殺したわけではない。適度に痛みつけて、警備隊に差し出した。“適度”の詳細についてはご想像におまかせする。武装グループを差し出したときの、警備隊の鳩が豆鉄砲をくらったような顔はなかなか愉快だった。

私たちは街を後にした。門から出てから、エルナコは指をパチンと一回だけ鳴らした。世界の人々から、私たちに関する記憶を消したのである。全てを消滅させて何もかもを無かったことにすることも出来ただろう。しかしそれではあまりにも味気ない、とエルナコは言った。この世界を可能な限りそのままにしておきたい、とも。

「これで後始末は完了ね」

私たちは街を出てしばらく歩き、道の途中にあった一本杉の根元に立っていた。

「これからどうするんだい？」

「決まっているでしょう。あの人たちに会いに行くの」

私は全てを理解した。しかし、その全てとはこの世界とエルナコ

と私のことであり、彼女の言う“あの人たち”については何も知らされていなかった。

「その人たちはどこに居るんだい？」

“どこ”なんて言葉は無意味よ。あの人たちは、時間も空間も超越した場所にいるんだもの。強いて言えば“どこでもないどこかね”

「なんだか想像がつかないな。SFで言うところの“宇宙の果て”みたいな感じかい？」

「うーん、それとは似て非なるものなんだけど……まあ、そんな認識で構わないわ。百聞は一見にしかず。まずは行ってみましょう」
そうして私たちはあの人たちの居る場所へと出発した。

赤の彼岸（1）

私たちがその場所に行き着くまでに費やした時間は、果たしてどれくらいだったのだろうか。数日だったのかもしれない。数週間だったのかもしれない。数年だったのか、一億年だったのか、数兆年だったのか——もはや取るに足らないことである。時間という悠久不變の流れは確かに存在していたが、区切りのない流れに意味はない。どのようにしてその場所に行き着いたのかも、私にはよく分からない。気付いたら立っていた。

海だった。赤い海だ。

白い砂浜が世界を縦断するように横たわっている。私たちはその砂浜に足を踏み入れた。キュ、と小鳥のさえずりのような音がした。波打ち際まで歩いてみた。血のようでありながら、どこまでも透明な液体が私の足首を舐める。さらさらと足裏がすくわれる感覚。気持ちが良いけれど、いつまでもここにしていると自分を見失ってしまいそうな不安感があった。空を見れば奇妙に明るい青空が広がっている。雲などなく、太陽と思いき白い発光体が、ただっ広い空の真ん中にぽつんと浮いていた。

「ここは？」

私は隣にいるエルナコに聞いた。

「さあ？ 私も詳しくは知らないわ。あの人たちが居る場所、とか言い様がない」

「で、肝心のその人たちはどこに？」

「言ったでしょう。“どこ”なんて言葉に意味はない。あの人たちは確実にこの場所にいるわ。事実はまだそれだけ。そこから先はあなた次第」

「つまり？」

「会いたいと思えば会える」

そういうものか、と思った。深く考えるだけ無駄なのだろう。常識はすでに地平の彼方に沈んでいった。

私たちはひとまず海岸線に沿って歩くことにした。

「エルナコ？」

いつの間にかエルナコの姿が消えていた。振り向くと、砂浜に私の足跡だけが延々と続いている。初めからエルナコなんていなかった。そう思わせるように。

前へと顔を向けると、そこには木造の小屋が建っていた。先ほどまではなかったはずだ。チョコレート菓子のような茶色い外装をしており、海側はテラスになっている。日除けの屋根の下にはテーブルが一つと椅子が二つあって、椅子には誰かが座っていた。海を眺めている。

私は正面の短い階段からテラスに登った。

「こんにちは」

椅子に座っている人に挨拶をした。二十代から三十代と思われる男性だった。あくまで外見がそう見えるだけで、実際の年齢など分からない。

「うん」

と、男性は頷いた。どうしろ、とも言わなかった。私の方を一瞥しただけで、また海へと視線を向けた。何を見ているのだろうか、私も男性と同じ方向を見たが、そこには何もなかった。ひたすらに赤い海が広がっているだけだ。

「アドバイスをしよう」

男性が口を開いた。視線は動かない。

「ここでは何よりも“意思”が重要になる。君の目に映る私の姿や、君が聞いている私の声などに、真実は存在しない。私は確かにここにいるが、君が私の真の姿を捉えているとは限らない。目や耳など信用するな。まずは、意思を持ちなさい。何をしたいか。何をしてもらいたい。そういったことを正直にこの世界へと映しなさい。そ

うすれば、何かしらの道は開けるだろう。勿論、絶対ではないがね。私が君に会いたくないと願えば、瞬く間に、君の視界から私は消え失せるだろう。君の意思だけで世界が回っているわけではない。意思と意思が衝突しあい、その釣り合いでこの世界の現象は成り立つ」

なるほど、エルナコの言った通りだ。会いたいと思えば会える。この場所での現象は、意思によって発現されるらしい。

「ということは、あなたが――」

「うん、まあ、そうだな。君の推測は正しい。私はエルナコが言っていた“あの人たち”の一人だ。その、なんだ、とりあえず座りなさい」

赤の彼岸（2）

私は男性の隣の椅子に座った。この“男性”という外見にも意味はないのだろう。もしかしたら女性かもしれないし、性別不定なのかもしれない。

「私は、先駆者と呼ばれている。まあ、呼ばれているだけで、実際のところはどうか分からない。私自身は自分がそんな大層なものだとは思っていない。私は、人がすでに歩いたところは歩きたくないだけなんだ。未踏の荒野こそが、人間が歩くべき道だとは思わないかい？」

「初雪の日の朝のようなものですな」

赤い海から無味無臭の潮風が吹いて、男性の前髪を揺らした。口元に予想外に朗らかな笑みが浮かぶ。

「なるほど。エルナコが命を懸けるわけだ。君は今までの人間たちとは、どこか違う。……分かった。君はこの前の騒動で全てを知った気になっているようだが——いや、実際に全てを知ったんだろう。だけど君はまだ理解していない。知識が心に浸透し、知恵に昇華していない。だから君は、ここで私たちの話を聞く必要がある。本当の意味で全てを知りたいのなら、ね。——どうだい？ 少し長くなるが、聞いていくかい？」

意思が、この場所に漂うのを感じた。この男性は私にこの世界の全てを知って欲しいと望んでいる。そしてまた、私も知りたいと思っている。二つの意思が、しっかりと噛み合った。空気が変わる。私はまるで映画館にいるような気持ちになって、ゆったりと落ち着きながら、男性の話に耳を傾けた。

次元という物差しがある。君の知識にもしっかりと記されている

だろう？　そう、その、一次元、二次元、三次元、という奴だ。一次元は一本の線。二次元は平行ではない二本の線。そして三次元には更に奥行きが加わる。

では、私たちのいる世界は？　そう、三次元だ。私たちは三次元に存在している。まずはそのことをしっかりと頭に入れておいて欲しい。この事実こそが全ての始まりにして、全ての発端なのだから。私たちがこの場所に行き着いた経緯にも、この事実が深く関わる。念のため言うておくが、今私たちがいる場所は三次元ではない。――ふむ。そう、不思議そうな顔をするな。確かに私の話にはある種の矛盾が内包されている。しかし、それは必然の矛盾なのだ。起こるべくして起きる矛盾なのだ。分かるかい？

まあ、何だ、順を追って話そう。一つずつ解決していこう。私とてそこまで頭の回転が早い方ではないのだ。こうやって話していても、自分で自分の話に混乱しそうになるときがある。だから、出来るだけ双方に分かりやすく、慎重に、一つずつ理解して行こう。

最初に次元の話を持ち出したが、ここで言う次元についても少しだけ注釈を加えておく必要がある。そもそも次元なんて単位は人間が勝手に作り出したものだ。はじめからこの世界に存在していた概念に、人間が分かりやすいように言葉をかぶせただけだ。なので本来、次元などという言葉に大層な意味はない。けれど我々は次元に代わりうる言葉を発掘することができず、結果として先人の偉業をなぞって次元と表現する他ない。

私たちが今、最も重要視すべき事とは何か。それは、『三次元よりも二次元の方が低く、二次元よりも一次元の方が低い』ということだ。一や二や三、という絶対値には意味がない。大事なのは比較なんだよ。分かるかい？　比較だ。比べることだ。二つの概念を並べて、見比べることだ。三次元と二次元。どちらの方が高次で低次なのか。そういったことなんだ。不等号の向きが左なのか右なのか。

一番重要なのは、そこなんだ。

整理してみよう。ここで私が言いたいことは次の二つだ。
人間が生きているのは三次元。しかし、この場所は三次元ではない。

重要なことは比較であり、絶対値に意味はない。

ここまでは理解できたかい？

ふむ、よろしい。では次の話に移ろう。

赤の彼岸（3）

次元の異なる三つの世界がある。

君は気付いているかな？——そう。その通り。実に君は聡明だ。一つ目は、三次元の世界。人間が生きている世界だね。二つ目は、この場所。私たちが存在している場所だ。私はこの場所が三次元ではないと言った。等号で結ばれないのだから、異なる世界であることは明らかだ。そして三つ目が、君とエルナコが旅してきた世界だ。

いちいち“何々の世界”と言うのは煩わしいから、人間が生きている世界を〈人間界〉、この場所を〈中層〉、君たちが旅してきた世界を〈カンバス〉と呼ぼう。

なぜそんな名前なのかって？ いい質問だ。この呼称にこそ、各世界の本質が隠されていると言っても過言ではない。名前の由来を理解したとき、君は私たちが発見した“神秘”を知ることになる。すなわちそれは、君とエルナコが同等になることを意味する。

俄然、興味が沸いたようだね。そう。君がエルナコの側にいたいと願うのなら、まずは私たちの話を理解しなくてはならない。必須条件だ。顔や性格なんて大した問題ではない。——いや、君の顔が、その、なんだ、悪い、と言っているわけじゃないぞ？ 性格だって申し分ない。君はエルナコに釣り合うだけの男だ。それは認める。何たって〈カンバス〉を無事に旅してきたわけだからね。

ところで、少し話は逸れるが——何度も“私たち”と複数形で自称しているように、この〈中層〉には私以外にも何人かの人間がいる。私が先駆者と呼ばれているように、彼らにもそれぞれ呼び名があるが、それらは本人に会ったときに聞けばいいだろう。

で、なぜ私がこのタイミングでこの話をしたかと言うと、もうすぐ私の順番が終わるからだ。そう。君は私たち全員の話を聞かなく

てはならない。私一人が全てを話しても構わないのだけれど、それでは他の者たちが納得しないだろう。彼らも君と話したがつているようだからね。今の君なら感じるだろう？　彼らが発する強い“意志”を。

三つの世界についてももう少し詳しく説明しておこう。

君に植えつけられた知識は〈人間界〉のものだ。つまり、三次元の世界のものだ。君は何度も旅の途中で疑問を持ったことだろう。不思議に思ったことだろう。〈人間界〉と〈カンバス〉の常識の差異に驚いたことだろう。もしも君の知識が〈カンバス〉から得たものだったのならば、君は何の疑問もなく旅を続けられただろう。無数に切り分けられた空を見ても、何一つとして感慨を抱くこともなかっただろう。

君は混乱したかもしれない。たくさん戸惑ったかもしれない。けれど、その分、楽しかったんじゃないかな？　何もかもが新鮮に感じたのではないかな？　うん。それはとても素晴らしいことだ。少し、羨ましいよ。君は未だに世界に驚くことができる。目の前で起きた出来事に感銘を覚えることができる。それは一人の人間にとつて、とても大切なものだ。もしかすると、命よりも大事なものかもしれない。いや、それはさすがに極論かな。けど、私はときどきそんな風に思うことがあるよ。世界に驚きを感じられなくなったら、生きている意味なんてない、とね。――ん？　……そうか。やはり君はエルナコに相応しい男だな。

三つの世界について、もう一つ言っておこう。私の口から話すことはこれで最後だ。いいかい？　さっき次元の話をしたね。そして、次元の絶対値にはさほど意味はなく、比較にこそ意味があるとも言った。また、三つの世界の次元はそれぞれ異なるとも言った。私が次に何を話すのか、もう分かったね？　そう、三つの世界の次元の比較についてだ。

答えを言おう。〈人間界〉の次元が最も高く、〈カンバス〉の次元が最も低い。〈中層〉は両者の中間にある。

さあ、これでまず〈中層〉という名前の意味が分かったかな？
そう。今私たちがいる世界は、〈人間界〉と〈カンバス〉の中間にある。だから〈中層〉と私は名付けた。安易だと思うかい？ でも分かりやすいだろう？ まずは余計なことを考えずに、理解することだ。頭をこねくり回すのはそれからでも遅くない。

私の話はこれで終わりだ。――ふふ。結果論だが、私は先駆者としての役割を立派に果たしたわけだ。君が全てを理解するまでの道のりの、第一歩目を私が導いたわけだ。君がどれだけ私の話を理解できたかは分からない。それでも取っ掛かりにはなっただろう。雲を掴むような荒唐無稽な物語のスタートを、君はちゃんと切ることができた。

何度でも言おう。ゆっくりでいい。その代わり確実に理解しなさい。すぐに理解できないようなら、しばらく時間を置いてから次の人に会いに行くといい。君が会いたくないと願えば、向こうも姿を現したりはしない。自分の中で整理がつくまで、海を眺めながら過ごすのもいいだろう。全ては君の意思次第だ。君の意思はこの〈中層〉でちゃんと尊重されている。心配はいらない。彼らだって君を急かしたりはしない。君には考える時間が無限にある。君の一步を、誰も邪魔したりはしない。

ゆっくりと、考えなさい。

赤の彼岸（4）

男性と別れてから、私はまた砂浜を歩いた。

太陽が移動しないのでどれだけの日数が経ったのかは分からない。自分の中の感覚では少なくとも一週間以上は歩いていた気がする。自分の影が時間変化しないというのは、本当に奇妙なもので、私は途中で一度立ち止まって、自分の影と小一時間見詰め合った。

お前は私なのか。と影に尋ねた。

それを言うなら、お前こそ私なのか。と影は答えた。

私が先に笑い、すぐに影も笑い始めた。素晴らしい茶番だと思った。私はまた歩き始めた。影はいつまでもついて来た。甲斐甲斐しく、私の後ろから足音も立てずについて来た。太陽が私たちを呆れたように見下ろしていた。

「エルナコちゃんのお友達ですね？」

声がして私は振り向いた。

白い麦わら帽子をかぶった女性が立っていた。この世界に似つかわしくない、清涼な水色のサマードレスを着ている。普通の海ならば何の変哲もない格好なのだろうが、この赤い海の砂浜では異様なミスマッチ感があつた。

「初めまして。私は奉仕者と呼ばれています」

女性は麦わら帽子をおさえながら、ペコリとお辞儀をした。

若い。私よりも若く見えた。少なくとも二十歳前だろう。私も彼女にならって頭を下げた。女性は外見年齢に似つかわしくない大人びた微笑を浮かべた。

「どうぞ、こちらへ」

いつの間にか私たちのすぐ近くに、ビニルシートが敷かれていた。横にはビーチパラソルが刺してある。私たちはパラソルの影の中に

入り、シートに座った。私は胡坐で、女性は正座で。視線を交差させることなく、二人とも赤い海の水平線に顔を向けた。

「これ、よろしければ」

女性はバスケットを差し出した。中にはサンドイッチが入っていた。私は礼を言って、サンドイッチを頬張った。トマトとレタス、それにハムが入ったオーソドックスなサンドイッチだった。単純であるがゆえに、食材の良し悪しと作った人の腕が試されるわけだが、おそらくそのどちらも良かったのだろう。

「美味しい」

正直な感想を言った。いや、感想と言うよりも反射的な反応だった。本当に美味しいものを食べたとき、人は美味しいと口にせずにはいられない。

女性は「よかった」と破顔した。私はその顔を見て、女性の呼び名の意味が分かった気がした。女性は本当に嬉しそうに微笑んでいた。

「さて、どこから話しましょうか。私は他の人たちと違って、あんまり話すのが得意ではないんです。でも、私はあなたと話したいと思っています。エルナコちゃんが自分の身を危険に晒してまで“目覚め”させようとした、あなたと。もしかしたら脈絡がなくて聞き苦しい話になるかもしれませんが――それでも、聞いてくれますか？」
私は頷いた。

絵を描いたことがありますか？ 絵、です。紙でも砂の上でも何でも構いません。白黒でもカラーでも構いません。あなたの思い描く通りに、平面に世界を投影したことがありますか？ ない？――あ、そういえば、あなたはまだ生まれて間もないんですね。いえ、知っていますよ？ 時間という杓子定規で考えれば、確かにあなたは普通の人間の何億倍もの時間を過ごしています。けど、無為

に過ぎた時間なんてカウントしても意味がないでしょう？ 普通の人間だってそうです。同じ年齢でも、子供っぽい人や大人びた人がいます。経過した時間にさして大きな意味はありません。経験の総量こそがその人の本当の年齢を決定します。そう言った意味では、あなたはまだ赤ん坊に過ぎません。大人と同等の知識を持つていようと、です。赤ん坊に絵を描いたことがありますか、と聞くのは酷ですね。新入社員に、一千万のクライアントを取ってこい、と命令するようなものです。横暴ですね。

絵を描いたことがないとすると、少し説明に困りますね。でも、絵を描くという行為自体は知っていますよね？ ——そうです。その通り。画材道具を用いて画用紙やカンバスに線や色を置いていく行為のことです。——その顔、何かに気付きましたね？ 当ててみせましょうか？ カンバス。この単語に反応しましたね？ ええ、私もあなたが気付くようにわざとこの単語を用いました。そうですね。あの人——先駆者と呼んでいるあの人が言った通り、〈カンバス〉と名付けられた世界と、絵を描く画布であるカンバスには深い関係があります。

というよりも、結論を言ってしまうえば、両者は本質的な意味で全く同じものを指しているのです。

次元という単位についてはあの人から説明を受けたと思いますので、私から特に言う事はありません。そもそも補足できるほど、私は次元について深く知っているわけではありません。そういう概念があるんだなあ、といった程度のもんです。逆に言えば、その程度の解釈で構わないのです。深く追求したところで常人には理解できる概念ではありませんし、完璧に理解できる人がいたとすれば、その人は生物を超越した存在となるでしょう。あくまで私たちは人間です。こんな御伽噺のような世界にいたとしても、私たちは普通に生きている人間です。これも一つの矛盾です。私たちが常日頃から

抱えている必然の矛盾です。

次元と絵。私が話をしたいのは、この二つの事柄に関してです。簡単な質問をします。絵は何次元ですか？——わざわざ口にするのも憚れる下らない質問でしたね。そうです。絵は二次元です。——ええ。あなたの指摘の通りです。あくまで二次元とは一般的な言葉を用いただけであって、私たちの間では“二”という絶対値の意味はありません。数学の授業のように x 次元と表現しても何の支障もありません。あなたはあの人の話をちゃんと理解しているようですね。嬉しいです。

さて、絵を描くという行為の性質について、もう少し深く考えましょう。絵を描くというのはとても創造的なことです。風景画であれ抽象画であれ、デザイン、空想画、ノートの端に書いた拙い落書きでさえ——絵を描くという行為ならば何であつても、そこに創造の光が満ちています。目も眩むほどの光です。クレヨン握ることを覚えたばかりの幼児から、国宝級の美術家まで、あらゆる人間の描く絵には創造の光が宿っています。

ここで立ち止まって確認しましょう。そもそも創造とは何なのか。端的に言えば「生み出す」ということです。無から有を作り出す。ゼロから無限を引き出す。創造とはそういった尊い行為です。そして、創造には必ず「自由」が含まれます。見も蓋もない言い方をすれば「好き勝手にできる」ということです。頭の中で空想した世界を、あなたは自由に画用紙に描くことができます。誰にも制約されない、あなただけの自由な世界を、カンバスに映し出すことができます。それが創造であり、絵です。

赤の彼岸（5）

少しずつ、何かが見えてきましたか？ 私たちが辿り着こうとしている結論に近付いてきましたか？ ——ええ、そうです。おそらく、あなたの予想は間違っていない。このまま何もせずとも、時間が経てばあなたは答えを導き出すことができるでしょう。ですが、それでは私たち——そして何よりエルナコちゃんが納得しないのです。エルナコちゃんがなぜ何も言わずに姿を消したと思いますか？ あなたに、私たち一人ずつと話をしてもらいたかったからです。一対一の対話をして欲しいと、あの子は願っているからです。叶えてあげましょう。私たちにとっても、あなたにとっても、エルナコちゃんは大事な存在なんですから。そうでしょう？

砂浜は唐突にして途切れ、岩壁が現れた。

私は陸側から回り込むようにして、その岩壁に登った。さほど高くはない。三メートルもなかったろう。ごつごつした岩肌に足をとられそうになりながら、私は崖の先に座っている人影へと近付いた。少年だった。中学生と高校生の中間くらいの歳格好である。崖の縁に腰を降ろし、釣竿を垂らしている。こんな海に魚なんているのだろうか。そんな疑問が先立った。

「いないよ」

振り向きもせず、少年は声を投げた。

「別に魚が欲しくて釣りをしているわけじゃないんだ。釣りをしている自分が好きだから釣りをしているのさ。我ながらナルシストだと思うよ。でも、自分をナルシストだと思って嫌悪している自分も、やっぱり好きなんだ。救いようがないね。……そこに突っ立ってないで、こっち来なよ」

私は少年の隣に座った。

「僕は預言者。もう君には説明するまでもないだろうけど、呼び名に深い意味はない。僕だって本当に預言ができるわけじゃないんだ。ただ、少しだけ先のことが見通せるというか……予感めいたものを感じ取れる、その程度のものさ」

「それでも十分凄じくないか」

「そうかもしれない。でも何の役にも立たないよ。要は直感が少し鋭いだけだしね」

少年はクイクイと竿を動かした。崖の下の子が揺れる。魚がいないのだから何の意味もない行為のはずなのだが、少年は定期的にそうやって釣り針の位置を変えていた。

「さて、ようやく僕の番がやって来たね。はじめに言っておこう。結論は僕の口から語られる。先駆者と奉仕者の話を、僕がまとめる。つまり、実質的に僕の話が最後だ。この〈中層〉にはもう一人いるんだけど、あの人には別のことを話してもらう予定だ。本人がそれを望んでいるみたいだからね。と言う訳で、心して聞いてね。僕が語るのは、彼らの話の総括——つまり、世界創造の理屈と方法だ」

屁理屈って酷い言葉だと思わないかい？　それがどんなに詰まらなくて歪んだ理屈だとしても、理屈であるからには評価されるべきなのに、人間の勝手な都合で屁理屈は屁理屈として処理されてしまう。悲しいね。少なくとも僕は悲しいと思うよ。君はどう思う？　——そうか。君は優等生タイプかもね。クラス委員なんか似合うんじゃないかい？　ただし委員長にはなれないだろうね。副委員長。うん。しつくりくる。

今から僕が語る話も、一般人に聞かせれば屁理屈として捉えられるかもしれない。馬鹿馬鹿しいと言って聞く耳すら持たれないかもしれない。僕たちからすれば、だからどうした、って感じだね。ど

んなに無茶苦茶な理屈だろうと、僕らは実践して見せた。君がいる。僕たちがいる。エルナコがいる。ほら、それが証拠だ。君がここにいる。その事実こそが、僕たちが見つけた“創造の手法”を裏付けている。

うん。余計な話は可能な限り省いていこう。脇道に逸れていたら、いつまで経っても結論には辿り着かないからね。

僕の話をする前に、君がすでに聞いた話を軽くまとめておこう。そうした方が僕の話をするなり理解できると思うんだ。いいかい？ 順番に行くよ？

一つ目。

僕たちは三つの世界を知っている。〈人間界〉と〈中層〉と〈カンバス〉。

二つ目。

それら世界の次元を比較すると〈人間界〉が一番高く〈カンバス〉が一番低い。〈中層〉はその中間。

三つ目。

人間が生きている世界、〈人間界〉は三次元である。

四つ目。

絵は二次元であり、創造的であり、自由である。

五つ目。

ただし次元の絶対値は便宜上のものであり、本質的な意味を持たない。

先駆者と奉仕者の話をまとめると、こうなる。頭の整理はできたかい？ じゃあ、いよいよ僕の話に入らせてもらおうよ。

赤の彼岸（6）

単純な話なんだ。とても単純な話。

もともと僕たちは＞人間界＜に住んでいた。生きていた。呼吸をして、各々の生活スタイルに則って、ごく普通の生活をしていた。何の変哲もない毎日だったよ。あまりに変化が無さ過ぎて、全てを放棄してしまった人もいた。その人は僕の友達だけど、今はもう会えない。僕がこっち側に来てしまったからね。その人のことが僕はけっこう好きだった。純粋な意味で好きだった。まあ、それはこの＞中層＜にいる他の人たちにも言えることだ。僕は彼らが好きだよ。自分のことが好きなのと同じくらいにね。

僕らは何かしらの特別な力を持っていたわけじゃない。確かに僕たちは普通の人たちとは違った視点で世界を見ていたけれど、だからと言って、超能力を駆使して世界征服を企もうなんて思っていたわけでもない。僕らは常人だった。ただ、気付いてしまったんだ。そして、実践しようとした。それだけが普通の人と違うところだろうね。僕ら以外の人たちは、気付いていたかもしれないけど、実践しようとは思わなかった。なぜ？ 決まっている。あまりにも馬鹿馬鹿しいからだ。

出来っこない。不可能。そうやって他の人間たちはチャンスを捨ててしまった。勿体無いね。こんなにも楽しいことを放棄してしまうなんて、勿体無いとしか言いようが無いよ。考えられないことだ。僕だったらそれまで溜め込んできた金や地位や名誉なんかをかなぐり捨ててもやりたいと思うだろうに。まあ、実際に僕はそうしたわけだけど。

ねえ。僕は思うよ。やりたいことがあるならやるべきだって。本当にやりたいことがあるのなら、周りの目や評判を気にしている場合なんかじゃないって。そうだろう？ そう思わないかい？ —— ああ、思うよ。僕は思う。どうして人は躊躇するのかな？ 特に大

人は立ち止まるのかな？　ありもしない壁が目の前にあると思い込んで、希望を捨てた目をして、後退しちゃうのかな？　前へ、行けばいいのにね？　そうすれば今の僕らと同じところまで到達できるのに。そう、思わない？　君は見た目こそ大人だけど、思考はまだ子供のはずだ。つまり僕と同じはずだ。分かるだろう？　僕の言っていることが。――そう。君はとても優秀だ。残念だな。やっぱり僕らは孤独なのかもしれないな。僕らと同じ考えを持つ人たちは、もうどこにもいないのかもしれないな。悲しいね。少なくとも僕は悲しいと思うよ。

閑話休題っていい言葉だよな。響きがいい。それに漢字で書くところ好良い。僕は好きだな。さて、その好きな言葉を今こそ使おう。閑話休題。意味はわざわざ説明するまでもないね？　そう。『無駄な話はさておいて』だ。つまり、今の話は無駄な話だったということだね。でも、僕は割と無駄な話が好きだ。無駄な人生と同じくらいね。

好きな言葉を相応しい場面で使ったからには、有効利用しないわけにはいかない。さあ、本題に入ろう。と、言ってもだ。結論はひとりで済むんだ。今まで散々長話を聞かせてきたわけだけど、最終的に僕らの話は次のひと言に集約される。

『僕たちは自分たちより次元の低い世界を自由に創造できる』

理解できるかな？

理解して欲しいな。

今までの話をちゃんと聞いていたのなら、分かるはずだ。先駆者と奉仕者から聞いた話をちゃんと頭の中で整理できているのなら、今のひと言がどういった意味を持つかは、すぐに理解できるはずだ。だからわざわざ僕が説明するまでもないと思うんだけど――まあ、念のためだね。中途半端に理解して次のステップに進むのは危険だ。

基本公式を身に付けずに応用問題に挑む頭の悪い学生くらいに危険だ。

仮定なんだよ。まずは仮定。いいかい？ 僕はまず次元に目を付けた。自分たちが生きているのは三次元。そして自由に創造できる絵は二次元。ここだ。ここが重要なんだ。三次元に生きる僕たちは二次元を自由にできる。これを言い換えてみよう。高い次元に生きる僕は、自分たちより低い次元の絵を好き勝手にできる。そうだね？ これについては否定の仕様がなと思う。事実なんだからさあ、ここからが仮定だ。

もしかしたら――僕は自らの住む世界よりも低い次元の世界に對して、自由に干渉できるのではないか？ そう考えたんだ。――イエス。その通り。一般人が聞いたら眉をしかめるか、馬鹿にするかの二択だと思うよ。頭の可哀想な人だと哀れみの視線を向けられるかもしれないね。それもまた楽しいね。哀れみの視線なんていう貴重なものを受けることができたなら、それはそれはとても愉快な人生経験になるだろう。僕が＜人間界＜に生きていた頃はそれなりに真面目に生きてたからそんな視線は受けたことはなかったけど、今の僕が＞人間界＜に戻ったらそういった視線を沢山受けるだろうと予想できるね。今更戻る気なんてさらさらないけど。

僕らはね、この誰もが馬鹿にするような仮定について、本気で取り組んだ。そりゃもう、国防長官が核戦争を危惧して連合国に核全廃の電子メールを送るときくらいの本気さだよ。それだけ本気だからね。成果はすぐに出た。具体的には一年そこらで、僕らはその仮定を理論として確立させていた。

そうさ！ 僕は、自分たちより低い次元を創造できるようになったんだ！

ここで重要なのがね、低い、という言葉のニュアンスなんだ。三次元より低い次元と聞いたら、君はまず何を思い浮かべる？ ――そうだね。今までしつこいほどに繰り返していたように、二次元を

思い浮かべるね。でも、違うんだ。要は三次元よりも低ければいいんだから、2・5次元だって良いわけだ。そうだろう？ さらに2・9次元だってOKだ。2・99次元だって。2・999次元だって。2・9999……と、9が無限に続いて、限りなく三次元に近付いていたとしても、三次元よりも低い限り、大丈夫なんだ。そして、三次元に近ければ近いほど、元の世界と似た世界を創造することができる。二次元は明らかに三次元とは違う。それは分かるね？ 立体と平面という天と地ほどもかけ離れた世界だ。でも2・999次元となると、ほとんど区別がつかない。＞人間界<とまるきり同じと言っても過言ではないくらいだ。でもやっぱり三次元よりは低いわけだから、僕らは好きに創造することができる。＞人間界<とほとんど同じ世界を、自由に創造することができるんだ。

それこそまさに、神様のよう！

そうやって創られたのが＞中層<と＞カンバス<だ。僕らはまず理論を実践するためにこの場所＞中層<を創った。もちろん最初は＞中層<なんて名前じゃなかったよ？ 第二世界とか異世界とか、そんな名前で呼んでたな。まあ、すぐに＞カンバス<を創ったからそんな呼び名も廃れちゃったけどね。僕らは最初に創った＞中層<を中継地点兼本拠地にして、更に低い次元の＞カンバス<を創造した。低いと言っても＞中層<自体が限りなく三次元に近い次元だから、＞中層<の次元に限りなく近い＞カンバス<も、やっぱり＞人間界<とほとんど同じなんだよね。結局、同じ構造の世界が三つあるのと同じことなんだ。劣化コピーとも言えいいのかなあ。でも何だかそれだと印象が悪いな。本物と見分けがつかない贋作、と表現すればちよつとはマシかもね。

さあ、分かったかい？ 僕らの世界創造の理屈と方法を理解できたかい？ 出来たなら良し。出来なかったのなら、いくらでも時間

をあげるから確実に身に付けてね。これは言わば基本公式なんだから。君はこれから『エルナコ』という応用問題に取り組むことになる。とても厄介な問題だ。僕にも解けるかどうかは分からない。――いや、きっと多分、それは君にしか解けない問題なんだろうね。君だけが彼女の答えを導くことができる。

うん。僕の話は以上だ。あとは、そうだな。一つだけ。

エルナコの手を離さないように、頑張って。

赤の彼岸（7）

ウミネコの鳴き声だけが聞こえていた。姿は見えない。

私はこの光景を知っている。いつかエルナコと歩いた道だ。音や声は聞こえるのに、生物の姿が見えない。

砂浜に続く自分の足跡を、振り返って確認した。

私は、ここにいるのだろうか。ちゃんと大地を踏みしめ、呼吸をしているのだろうか。唐突に不安になった。自分の存在が信じられなくなった。もしかしたら私も“姿の見えない生物たち”と同じように、音声だけの存在になってしまったのではないかと心配になった。

「大丈夫。あなたはちゃんとここにいるから」

すらりとした体躯の女性が立っていた。“女性”と判断したのは胸部の膨らみによるもので、首から上だけを見れば、顔立ちの整った美男子とも言える容姿だった。服装もジーンズにシャツという、どちらともつかないようなものである。

「私は伝導者。あなたが“あの人たち”と呼んでいるグループの最後の一人よ」

「女性……ですよね？」

「ええ、まあ、そうね。男性と女性という二つの括りで区別するならば、私は女性になるわ」

妙に含んだ言い方だった。

「出生がね、色々複雑なのよ。普通の人間のカテゴリーには納まり切らないような生まれ方をしたから、はっきり女性と言われると違和感を覚えるわ。でも男性と言われると、さらに違和感が強くなるから、どちらかと言えば女性として扱われた方がいいかな」

出生が複雑と言うわりには、ずいぶんとサバサバした性格である

ように感じた。シンプル・イズ・ベストを体現したような服装からもそう思える。

「内面が複雑なぶん、外面だけでも単純にしくちゃ。そうじゃないとゴッホの絵みたいに分かんなくなっちゃう」

今では心を読まれることにも慣れた。

「預言者の方から、あなたには他の方とは違う話をするようにと言われたのですが……」

「うん。私以外の人からは、この場所やあなたが旅してきた世界の構造と創造について話してもらったのよね。長かったし、退屈だったでしょう？」

「いえ、そんなことは……」

「いいのよ。正直、私たち自身でさえあの理論は馬鹿げたものだと思うっているの。でもどんなに荒唐無稽な理論だろうと“正しく”て“実践可能”だったわけだから、私たちはやらずにはいられなかった。良くも悪くも科学者気質だったのよね。発見した理論は実験して確かめなくちゃ気が済まなかったの」

「神になれる理論を机上の空論のままにしておくなんて、普通の人間には耐えられませんよ」

「ふふっ、そうね」

女性はおかしそうに目を細めた。

「そういえば、今の気分はどう？」

「今の気分？」

「全てを知り、神様に限りなく近くなった気分よ」

知るということは尊いものである。神話の時代、神が「知恵の実」を禁断の果実としていたのも、そのためだ。知るということは神に近づくことと同義である。

「……何とも言えません。今からあなたは神様ですと言われても、実感が沸きませんから」

「まあ、それもそうよね」

腰に手を当てて、女性は小さく息を吐いた。

「でもね、あなたには今すぐにも神様としての自覚を持ってもらわなくちゃいけないの」

「どうしてですか？」

「それがエルナコの望みだから」

「エルナコの？」

「そう。なぜエルナコがあなたを私たちに会わせたいと思う？　あなたに自分と同じ所にまで登ってきて欲しいからよ」

潮風が女性のシャツの裾を揺らした。張り付いた生地が女性のボディラインを際立たせる。男性と女性のカテゴリーを外れているという割には、随分と女性的な柔らかな曲線を見て、私の脳裏を一つの考えがよぎった。

「あなたは、エルナコの」

「ご明察。そう、母親よ。ただし父親はいないわ。蒸発したとか死んだとかじゃなく、初めからいないの。エルナコは私がこの＜中層＞という場所で生み出した＞中層＜と同じ次元の存在」

「＞中層＜と同じということは、エルナコはあなた方と同じ人間ではないのですか？」

「ええ。仮に＞人間界＜に生きる人たちを“本当の人間”と定義するならば、エルナコは本当の人間ではないわね」

「けど、女神でしょう？」

女性は満足そうに頷いた。

「まさしく、ね。流星に私たちの話を聞いてきただけあって、あなたはよく分かっている。エルナコは人間よりも低次元の存在でありながら、神様としての役割を持っている。言うまでもなく、＞カンバス＜の人にとっての、ね」

どこかで灯台の光が走った気がした。そんなはずはない。灯台なんて見当たらなし、そもそもこの明るさの中で光の筋が見えるとは思えない。錯覚。そう思うことにした。

そう思わなければとても直視に耐えないような光だった。人間が持ちうる“寂しい”という感情の切ない輝きをそのまま光にしたよ

うな、悲しい閃光だった。

「どうしてエルナコを生み出したのですか？」

他意のない純粹な疑問だった。＞中層＜と＞カンバス＜という二つの世界を創造した人たちの一員である彼女が、なぜいまさら一人の少女を生み出したのか、単純に不思議に思った。

「私の出生が複雑だってことは話したわよね。それと関係があるんだけど……まあ、ひと言で言えば、人間が何なのか知りたかったってところかしら？ ……驕っていたのよね。＞カンバス＜や＞中層＜を創り出して調子に乗っていたの。だから、知る必要のないことまで……知ってはいけないことまで、知ってしまった」

「知ってはいけないこと、ですか」

「そうよ。お腹を痛めないで人間一人を生み出すということが、どれだけ非倫理的か——そのときの私は分かっていたいなかったの。でも、仕方ないじゃない。私は子供を産むことができないんだもの。そういう身体なんだもの……！」

赤の彼岸（8）

語尾が荒くなったことに本人も気付いていた。女性は咳払いを一つして、肺の底まで深く息を吸った。

「ごめんなさい。つい感情的になってしまったわ」

「いえ」

「おかしい話よね。世界丸ごと創造したっていうのに、今さらたった一人の人間を生み出すことに異を挟んでいるのだから。でもね、違うの。＞カンバス＜は明らかに自分たちよりも下の世界として創造した。偉そうな言い方になるけど、実際そうなの。けど、私はエルナコを自分と対等の存在となるように――出来る限り自分と近付けるように生み出した」

「ちよつと待ってください。それは不可能では？ あなた方の理論では、自分たちよりも次元の低い存在しか創造できないはずでしょう？」

「“出来る限り”と言ったでしょう？ もちろんエルナコは私たちよりも低次の存在だわ。でも私は＞カンバス＜の創造に費やしたのと同じだけの――いえ、それ以上の心血を注いでエルナコという一人の少女を創り上げたの。それこそ細胞の一つ一つまで精巧にね。そのおかげで、エルナコは私たちの創造物の中で、最も私たちに近い存在になったわ」

その言葉で納得できた。

ここにいる人たちがエルナコに対して庇護者的な愛情を注いでいるのは、このためなのだろう。エルナコはこの女性だけでなく、彼ら全員にとっての子供のようなものなのだ。

彼らはもう普通の父親や母親にはなれない。そのレールから自ら足を踏み外した。自分の責任なのだから文句は言えないが、やはりどこかで父性や母性を発揮する対象を求めていたのだろう。その相手がエルナコというわけだ。

「エルナコと私たちの関係については理解できた？」

「おおよそは」

「じゃあ、本題。といっても、もう口にしたらけどね」

「私に、エルナコと同じ神様になれと」

「そう。さっきはエルナコの望みって言ったけど、これは私たちの望みでもあるの。理由は……もう説明するまでもないでしょう？」

「孤独だからですね」

目元に母親の優しさを滲ませ、女性は首肯した。

「一人、なのよ。私には彼らがいる。先駆者、奉仕者、預言者。私たちは一人じゃない。でも、エルナコは違う。私たちに生み出された彼女には、肩を並べることのできる存在がない。＞カンバス＜にも＞人間界＜にも、どこにも。エルナコはこの＞中層＜という世界に似ているわ。人間でもなく創造物でもない。中途半端でどっちつかずの、あやふやな存在」

「けど私は」

「ええ、あなたはエルナコによって創造された＞カンバス＜と同じ次元の人間。本来ならエルナコと肩を並べるような存在じゃない。けれど、今のあなたは違う」

女性の手が私の手を握った。中性的な顔がじっと私を見つめる。

必死で真剣で、そして少し泣きそうな顔だった。

「あなたはエルナコと共に＞カンバス＜を旅して成長した。エルナコと一緒に何億という時を過ごして、一段階上の存在へと昇華した。もう、あなたは単なる創造物じゃない。エルナコの心を掴み、私たちに認められ、世界創造の手法を知った。あなたは通常の間人でありながら、神の領域に足を踏み入れた――現人神とも言える存在なのよ」

「……………」

「お願い。これはもう命令じゃない。神が人間に下す神託なんかじゃない。私という一人の母親の、たった一つの望み。お願い。エルナコと一緒にいてあげて」

栈橋の先端に彼女はいた。

「やあ」と私が声をかけると「やあ」と彼女も同じように返事をした。

エルナコの横に立つ。

「ちゃんと話は聞いてきた？」

「ああ」

足元で波が跳ねた。高い空には相変わらず太陽なのか何なのか分からない光が浮いていて、私たち二人の後ろに短い影を落としていた。

「で」

エルナコは私の方を見ようとしなかった。いつもの気丈さも今は身を潜めてしまっている。細い肩が震えているように見えたのは、見間違いではないだろう。

「どうするつもり？」

その言葉に秘められた勇気が、今なら分かる。

改めて見ても、小さな身体だった。彼女が神様だと言って、疑うことなく信じるものは少ないだろう。＞人間界<にいれば雑踏の中にたやすく紛れて、すぐに見えなくなってしまうような、頼りない存在感だった。

自分が優位に立ったとは思わない。彼女と同じ高さに立てていても思わない。

私はまだ一人の人間に過ぎず、女神の隣にすることが信じられなくて、光栄であるという気持ちは変わらない。

きつとずっと、変わらない。

ウミネコが鳴いた。

「自分は君のそばにいたい」

用意された言葉なのだろうか。誰かが描いた未来予想図の通りに、

私たちは悩んで苦しんでいるだけの小さな存在なのだろうか。

いや、実際そうなのだろう。私たちよりも、>人間界<よりも、もっと高次の世界にいる誰かさんが、たわむれに書いた脚本の通りに事が運んでいるだけなのだろう。>カンバス<での出来事がエルナコの台本によって進行していたように。私たちはいつだって踊らされている。自分たちよりもはるかに大きな存在に踊らされている。それの、何が問題だろう。

私はエルナコと一緒にいたいと思っている。

エルナコの孤独を癒したいと思っている。

それが叶う。

ほら、何の問題もない。

「これから君のそばにいて、いいかな？」

髪の毛がひるがえり、泣き顔が私の胸に飛び込んできた。

「許す。あなたはずっと、私のそばにいなさい」

「ありがとう」

震える小さな肩を、私はそっと抱き締めた。

赤の彼岸（9）

「ハッピーエンドかい？」

「少なくともバッドではないだろう」

男性と少年はテラスのテーブルに向かい合って座っていた。テーブルの上にはランプの山札。二人はそれぞれ五枚の手札を持っていた。

「いやだねえ。ありきたりだよ。まるで三流映画のラストじゃないか。終わり良ければ全て良しってわけ？」

「ま、結果的にそういうことになるな。二枚チェンジ」

パサッとカードがテーブルに落ちた。男性は捨てた札と同数のカードを山札から引いた。

「さんざん引っ張っておいて、沢山の人たちを巻き込んでおいて、最後は二人が幸せになって終わり。あーあー、まったく。身勝手なヒロイズムにも限度ってものがあるよ。死んでいった人たちに申し訳ないと思わないのかな。三枚チェンジ」

少年もカードを落として、山札から引いた。

「古今東西、物語なんてものはそんなものだ。結末が誰にでも納得できるようなものとは限らない。ツーペア」

男性は手札を広げた。

「そりゃそうだ。万人が幸せになる結末なんてないし、あってはならない。いやはや、世の中はうまく出来てるよ。フラッシュ」

少年が手札を開けると、男性はため息を一つ吐き、黙ってカードをシャッフルし始めた。

「考えうる限り、最高の結末だと思いますけどね、私は」

麦わら帽子の女性が小屋の中から出て来た。手に持ったお盆には

クッキーと紅茶が載っている。女性はテーブルの上にそれらを並べ置いた。男性はシャツフル中だったカードをポケットの中に納めた。「エルナコちゃんが幸せ。それが私たちの望んだベストではないのですか？」

「ん、まあ、そうだけど……いや、そうだね。今日ばかりは僕も偏屈なるのをやめることにするよ。素直にエルナコの幸せを喜ぼう」
そう言って、少年は紅茶を一口飲んだ。

女性も着席し、三人は黙って紅茶を味わう。

「そう言えば伝導者はどうしたの？」

「彼女はエルナコちゃんたちの最後の見送りに」

「見送り？」

「ええ。もう彼らがここにいる理由はありませんから」

「じゃあ＞カンバスくには？」

「いや」

カップを置き、男性が答えた。

「君の言った通り、彼らは＞カンバスくを騒がし過ぎた。それに二人の新しい門出に古い世界は似つかわしくないだろう」

「ってことは、四つ目の世界を？」

「そうなるな。二人の新人神様にとっての、初めての世界創造さ」

億や兆という単位もはや陳腐に成り果てた。

私たちはそういった単位の星霜を潜り抜けて、一つの世界を創り上げた。私たちという言葉には伝導者の女性も含まれる。いわば監修者だ。

「さあ、出来た」

私たち三人の前に、小さな球状の靄が浮かんでいた。

「これが＞人間界く、＞中層く、＞カンバスくに次ぐ第四世界。まだ中身は完成してないけど、世界としてのベースは出来たわ」

「こうして見ると小さいですね」

靄の大きさはサッカーボールほどだった。淡いピンク色で、綿菓子のようにも見える。

「高次元から見た低次元の世界なんてこんなもんよ。この＞中層＜だつて＞人間界＜から見ればこれと同じようなものなんだから」

「まあ、私は＞カンバス＜を創ったことがあるから、今さら驚かないけどね」

エルナコは得意そうに胸を張った。

「先輩さすがですね」

軽くからかうように言うと、エルナコはペシッと私の背中を叩いた。

「はいはい、二人とも、ふざけている暇はないわよ。これからあなたたちは、この新しく生まれた世界の神様として山ほどの仕事をしなくちゃいけないんだから」

「やっぱり、大変なんですか？」

背中をさすりながら、女性に訊いた。

「そうね……どこまで細かく決めるかにもよるけど、ベースをつくるのにかかった時間の数倍はかかると思った方がいいわね」

「そうですか……」

ここまですでに数億年かかったことを思い返して、私は早くもうんざりし始めていた。

「ゆっくりやりなさい。時間は無限にあるわ。それにあなたたちは二人なんだから。一人でやるよりもずっと楽なはずよ」

私とエルナコは顔を見合わせた。エルナコはくすぐったそうに笑っていた。

「じゃあ、私は皆の所に戻るから。後は二人で頑張つてね」

そう言うと、女性はすたすたと砂浜を歩いていった。ずいぶんとあっさりした別れだった。私はしばし放心したように、その背中を見つめていた。

「ねえ」

エルナコが私の服の裾を引っ張る。

「始めましょう？」

ここまで来るのにずいぶんとかかった気がする。しかし、これは決してゴールではない。

「ああ、行こう」

エルナコとの旅はこれから始まるのだ。

＊ おわり ＊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7708n/>

ヘビー・レイン&ダーク・レッド

2011年3月11日20時10分発行